
早春散歩

結城 カイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

早春散歩

【Nコード】

N2768I

【作者名】

結城 カイン

【あらすじ】

凜一の兄、宿禰慧一の大学時代の恋人、藤宮紫乃の恋物語。

比較的短いテキストです。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107h/>

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n81000>
h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>
i /

「メタモルフォーゼ」 1

1.
誰一人知る人もない人ごみの中をかき分けて行く時ほど、痛切に孤独を感じるときはない。と、言った奴は本当の孤独を知らないんだ。孤独は痛みを通り越せば快感になる。

大仰な式典を終え、サークルの勧誘の声が桜と同じ速さで舞い降りる。

低く高く辺りを反響する声が渦巻く中を、俺は時折目を瞑りながら歩いた。

これさえも心地いいと感じるのは、人の目を気にしなくなった事の報酬なのかもしれない。

「君、新人生だろ？サークル決まった？」

「え？」

いくつもの誘いの声に耳を傾けることなく歩いていたのに、そいつの声に足が止まったのは、テノールの響きに思わず聞き惚れてしまったからだろう。

「浪人組み…一浪だろう？君」

「どうしてわかる？」

「高校卒業つてのはあんな感じ…だろ？」と、彼は勧誘する学生に取り囲まれたどうみても田舎から出てきた手前のまだ青臭い新入生を指差した。

「君は苦行を終えてようやく世の中を知るお坊さんに見えるよ」

「…」

「でも大人じゃない。また半人前の僧だね」

「…半人前で悪かったな」

「そう睨むなよ。俺と同じ年だろうって言いたかったんだよ」

「…それで？なんの勧誘？」

「聞いてくれる気になった？」

「もう充分ここで立ち止まってるよ。君も成果を上げなきゃならないんだろ？」

「話のわかる奴は好きだよ。じゃあ、これを見て」

「…」

俺はそいつの「好き」という言葉に胸がドキリとした。

なんなんだ？こいつは。

よく見ると俺より背は少し高い。

別に身体の線を強調するような服ではないのに、全体を見ると華奢な線が浮いていてどこことなく色っぽい。

しかし、その上に乗っている顔がやたら整っている且つ上品な面立ちなので、真面目な青年の印象が強い。

なんとも…目が離せない…ってね。

…ったく俺も煩惱だらけだ。成仏出来そうもない。

誤魔化すために手渡された紙に目をやる。

俺がそういう趣向の人間だとしても世の中、そういう奴ばかりって話は無いからな。

こいつも勿体無いがノーマルな感じがするし…

「…『天体観測の会』ってね。サークルなんだけど、プラネタリウムとか近場の星が良く見える天文台に行ったりするんだ」

「…悪いけど、あんまり星に興味はなくてね」

「俺もおんなじだよ。星の名前なんかシリウスぐらいしか知らないし…でも、小旅行もするんだ。夏は星空を見上げながら寝袋に入って一晩中流星群を見たりしてね。自分がどんなに小さい屑みたいな欠片かってね…そんな気分を味わえるのって偶には気持ちいいもんだよ」

「…自虐的だな」

「それこそが人間の本質…じゃないかな？」

「…そう…だね」

「どうだろう。君、入ってみない？君とはいい友達になれそうな気がするんだけど…」

なんの銜いも無く差し出される手の平。

「…」

俺の前に出されたその手の平に、一片の桜の花びらが落ちた。その花びらを俺は…無くしたくないと…思ってしまった。

握り返すと彼は屈託の無い笑みを俺に返し、

「よろしく、新入生。俺は建築学科二年の宿禰慧一と言います。同い年だから特別に呼び捨てで構わないよ」

「ああ、うん。俺は藤宮紫乃。人文社会学科一年…です」

「藤宮…紫乃か…綺麗な名前だね」

そう言った宿禰慧一の方が俺なんかより千倍も綺麗だと、思った。

生まれて初めて一目惚れというものを体現した瞬間だった。

桜の森の満開の下、僕らは密やかな契約をする

「孤独」という文字を「恋」に変えて

僕は君に狂いたい

俺は9つの時に母の実家である茶道の家元の跡目として養子に入った。

離婚し、俺を育てる事に疲れていた母は養子の話を喜んで受け入れた。

俺は母の為にならと、子供心にも不退転の決意で挑んだわけだな。

南部姓から藤宮姓を名乗り、跡目を継ぐため祖母からの厳しい稽古の日々。

養い親との確執に揉まれながらも、この流派を継ぐ為の意義を自分なりに見つけ、励んでいた。

しかし、14の時、すでに40を過ぎていた養母に子供が授かり、しかも目出度くも男子誕生。

直系の跡継ぎが出来たことにより、俺の存在価値は急降下。

むしろ邪魔にさえなったに違いない。

俺は大家の居心地の悪さに何度も家出を繰り返しては呼び戻され、藤宮流派の恥だと貶された。

居心地の悪い藤宮家には、すでに自分の居る意味も無く、南部姓に戻り、母親の元へ帰ろうと思ったが、その時は母はすでに再婚して別姓を名乗っており、俺の帰る場所はいよいよ無くなった。

唯一の味方であった祖母は、別宅に俺を住ませ、不自由なく暮らせるよう経済的援助をしてくれた。

しかし、その時期の俺の中ではそういうものの価値には有難味を覚える自覚が欠けており、夜昼と遊びまわった拳句、胃潰瘍と神経衰弱で身体を壊し、高校を休学、そして退学。

半年の入院。

大検を受け、この家から一刻も逃げる為、東京の大学を選んだ。

独り暮らしの快適さは言うまでもない。

今まで誰かが自分を見張り、付き添い、金目当てや身体目当てに来た連中どもと遊んだ日々など、もうおさらばだ。

しかし、ひとりでは寂しすぎるのもごもつとも。

いい相手を見つけないと。

俺、結構寂しがりやなもので…

入学式で出会った宿禰慧一は、俺の一目惚れの男だった。

俺はそれなりに好き勝手と遊んでいたんだが、まだ「恋」って奴にはお目にかかったことが無く、胸が高鳴るなんてもんは早々経験不足。

宿禰慧一はまさに俺の救い主。俺の胸に抱かれた奴を想像するだけで、何度も抜ける。

同じ大学ではあったが、彼とめぐり合う機会はない。

理系と文系でキャンパスが違うこの大学でかち合うことは先ずないのだ。

だから、わざわざ入部したサークル「天文観測の会」とやらの部屋に繁昌に出向くことになる。

そうはいつでも毎日彼が来るわけでもなく、大体こういうサークルに普段の決まった活動はなく、次に彼の顔を見たのは新入生歓迎コンパの夜だった。

居酒屋を借り切って行われたコンパは一年から三年までの約50人程度が集まり、紹介から始まり無礼講に終わる。

俺は宿禰慧一の姿を見つけては、彼の一挙手一投足に目を奪われる始末。

まあなんて…印象深い奴なんだろう。

隙が無いくせに当たりがいいから、良くも悪くも優等生に見える。
しかも偶にいうしゃれっ気のある冗句などで回りを和ませては、
酒や料理の気配りなどソツが無い。

…相当世間慣れしてるな」と感心させられる。
惚れた弱みでそのひとつひとつにまた胸が高鳴るから、女子高生
か！などと独り自分を晒ってしまう。

「楽しんでる？ 藤宮」ビールを片手に当の本人が目の前に来た。
俺の名前を覚えていてくれた。

それだけで宙に舞い上がりそうだ。

…なんてザマ。

「ビールでいい？ それとも酒の方が良かったかな」

「いや、ビールでいい…ですよ」

「タメ語でいって言っただろ？」

ビールを俺のグラスに注ぎながら、宿禰は俺の隣に座り込んだ。

「でも一応…人目があるし」

「じゃあ、ふたりきりの時は俺は紫乃って呼ぶ。おまえは慧一でいいよ」

「はあ」

「…おまえさあ、人馴れあんまりしてないんだな」

「そう見える？」

「隠匿するのは勿体無い器量だが、野放しにするのはもっと危ない。
君は貞淑なる貴人だろう？」

「意味がわからない」

「近寄りがたいっていう事だよ」

「まさか…」

「その証拠に誰も君には近づかないだろう？ 怖いのだ」

「そんなに危ない奴に見えるのか？」

「後戻り出来なくなりそうだから手を出せない…って感じかな」

「じゃあ、あんたは怖くないんだ」

「俺はマゾなのさ。精神的欲求には素直に従わない…安全な人間だろ？」

「…」

何の影も見当たらない大きな黒い眼。耳ざわりの良い声音。暗喩の含んだ諧謔の韻。

こいつの正体が見抜けない。

ただ、言うならば、まさに引力には逆らえないという事だ。

宿禰慧一というブラックホールにも似た星に、どこまでも俺は引き込まれたい…

そんな気分で飲む酒に酔わないわけがない。

繰り返し注がれる酒と、傍にいる宿禰の存在に、俺は深く酩酊する…

3.
歓迎コンパの夜、高校出たての新生同様、俺はグデングデンに酔っ払ってしまい、ひとりでは到底歩くことも出来ない有様で、宿禰慧一に身体を支えてもらってなんとかふらつきながら居酒屋を後にした。

「ごめん。おまえ強そうに見えたから、調子に乗って飲ませすぎだな」

「い、いい…大丈夫…」

いや、全く大丈夫どころじゃない。吐いても吐いても気持ち悪さでどうにかなりそうだ。そういや暫く酒も絶っていたから、こんなに飲んだのは久しぶりかも…

などと、あんまりはつきりしない頭で考えていると、

「おまえのアパートどこ？」と、俺の肩を抱えたままの宿禰が言う。

「え…神楽坂」

「じゃあ、俺の方が近いな。今日は俺の家に泊まるといいよ」

「…ああ…」

何だか思いもかけない方へ向かっているじゃないか…身体は思い通りに動かないがこれも神様の思し召なのか、ラッキーな夜に感謝感激って心境で、俺はこのまま宿禰の胸にしがみ付きたい衝動をなんとか抑えた。

「やっと着いた。おい、紫乃大丈夫か？」

「ああ…うん」

宿禰の家はアパートというより、オートロックのついた高級そうなマンションで、ひとりで住むには少し広めの部屋だった。

俺は寝室に連れて行かれ、そのままベッドに寝かされた。

「お客さん用は残念ながらないんでね。悪いけど俺のベッドで我慢してくれよ」

「…おまえは？」

「リビングのソファで寝るから大丈夫。気分が悪くなったら言ってくれ。遠慮はするなよ。先輩として責任は取るよ」

先輩としてか…まあ、いいさ。まだ二回しか会っていないのに、相手の家にお泊りなんてのは上手くいってるって思っているだろうか？

…向こうがノンケじゃしょうがないがな。

そう思っただけ目を閉じると、急速に睡魔に憑かれた俺は夢の中に呼び込まれ、意識を失った。

朝、珈琲の香りで起きた。

ベッドから降りた途端頭がガンガンし、ようやく自分が二日酔いの症状だと気づく。

ふらふらしながら寝室を出ると、ダイニングに座って珈琲を飲んでいる宿禰と目が合う。

「起きた？気分は？」

「…グラグラする」

「仕方ないな。二日酔いなんだから」

それは俺も良くわかってる。今後の為に勉強になったよ。

「シャワーでも浴びれば？下着とシャツは貸すから」

「…知り合っただけなのに、そこまで親切にされると裏があるんじゃないかと勘繰ってしまうね」

「友達になりたいという裏はあるよ」

「…」

友達かよっ！

…どこまでが本心か判断のつき兼ねるところまでさえも、胸がなるって事は相当重症だ、俺。

シャワーを浴び、用意されたスウェットに着替える。リビングに行くと思計らったように珈琲を出される。

「砂糖もミルクも入れない派だろ？」

「…うん」

「二日酔いだからアメリカンにしといたよ」

「ども…」

二人掛けのダイニングテーブルに座り、珈琲を飲みながら、目の前の奴をちらちらと見る。

「今日は講義はあるの？」

「3時限から」

「俺も同じだよ。昼飯は一緒に食おう。軽い奴」

「…うん」

なんか都合よく引つ張られている気がする。こいつは別に俺じゃなくても誰にでもこういう風に接しているんだろうな。

…そう思ってしまうと、あんまり気分は良くない。

「どうした？気分でも悪いのか？」

「…あんた、誰にでもこういう風に親切なのか？」

「誰にでも…ってわけじゃないよ。でも後輩が酒飲んでぶっ倒れりや、先輩としてはそれなりの介抱はしてやるもんだろ？」

「…俺は…ゲイだよ。こんなこと知り合ったばかりの先輩に言うのは気色悪いと思うだろうけど…だぶんおまえが好きなんだ。だからこういう事をしてもらうと…その気になっってしまう。気持ち悪かったらごめん」

「別に、気持ち悪くないよ。俺もゲイだから」
「は？」

…マジで驚いた。何処をどう見てもノーマルにしか見えないじゃないか。

その顔は詐欺だ。

でも…こんな嬉しい偶然ってあるかよ。

「紫乃を見てすぐゲイだとわかったけど。おまえ見るからにそうだもん。でも、おまえプライド高そうだし、タチだろ？俺もそうだから恋人には無理かなと思った。でもいい友達になれそうない感じがしたんで、声をかけたんだよ。誤解させて悪かったな」

「いや、正直嬉しかった、おまえに声をかけられて…」

テーブルに置かれた慧一の細く長い指を見る。

細いクセにどこから見ても紛れもなく男の手で、その指で触られたら…と思うと、ザワリとした。

「…おまえが俺のことをそういう風に思ってくれるのは嬉しいけど、自分の倫理を曲げてまでやりたいとは思わない方がいいぜ」

「…倫理なんてもん…ないよ。俺は…おまえになら、別に抱かれてもいい…って」

「紫乃は寂しいだけなんじゃないのか？俺じゃなくても他に可愛い子は沢山いる」

「どういう意味？」

「無理に下にならなくてもいいだろうって意味だよ」

「俺が誰とでも寝ると思っっているのか？」

「…悪い。そんな意味で言ったんじゃない。俺もおまえが好きだと思っただけ、おまえとしたら本気になりそうでちょっと…逃げ腰になりかけてるよ」

「本気じゃダメなのかよ」

「なったことがないから判らない」

「じゃあ、試してみないか？」

慧一の指に触れてみる。

一瞬だけ震えたが慧一は引かなかった。

そのまま指を絡めると慧一は指から俺に目を移し、真剣な眼差しで俺を見つめた。

「知り合って翌日に深い仲になるのか？」

「二日目じゃない。白状すればあの時、桜の下で出会ったときからずっと…おまえが好きだったよ」

「…」

「慧一、俺おまえと寝たい」

俺の告白に慧一は二、三度目をパチパチと瞬き、その後苦笑した。俺の絡めた指を逆に握り締めると、

「…わかったよ、紫乃。本気の付き合いをやってみよう。後悔をしてもおまえとなら意義あるものかもしれない」

「後悔はさせないよう努めるよ」

「よろしく頼むよ。でも今はやめとこう。おまえを押し倒してベッドで吐かれても困る」

「確かに…否定はしないよ」

クスリと笑うと、慧一はテーブル越しに、俺にくちづける。

慧一との初めてのキスは少し苦い珈琲の味がした。

これが青春の苦味なのかも知れない。

暗い青春時代しか味わえなかった俺は、これから遅い春を満喫することになるらしい。

願わくば、この恋が嵐に散ることなかれ、と。

あれから三週間になるが、慧一からはなんの連絡もない。

あの後一緒に昼飯を食べて大学で別れた。

あまりに舞い上がっていたからだろうか、携帯の番号もメルアドも聞くのを忘れ、勿論向こうが知るわけも無く、こうして置いてきぼりを食らった子供みたいに落ち着かない心持ち。

二度三度、慧一のマンションに行ってはみたが、号数もわからず、さりとてどのツラ下げて慧一の前に出ていいのかさえ判らない。

抱かれに来ましたとでも言うのか。そしてあれはその場しのぎで言っただけだよ。おまえしつこかったから、とでも追いかえられるのがオチだ。

確かに、寝てくれなどと恥も外聞も無く言っただけが今になって恨めしい。

言い訳する権利をもらえるならば、

あの時は…酔いが醒めていなかったんだよ。

もう半分諦めかかった頃、俺の携帯が鳴った。

誰からの電話か、わからないままに出る。

「もしもし、紫乃？」

紛れも無く慧一の声だった。

「あ、あ、…す、宿禰？」

「そう、久しぶりだな」

「久しぶりっておまえ…なんで携帯の番号…」

「サークルの名簿で調べたんだよ。ごめんな、レポートが立て込んでやってて、おまえをほっといてて」

「あ…うん、いいよ。それよりどこ？」

「今大学の駐車場。これからデートしないか？」

「え？いいの？」

「恋人同士だろ？俺たち」

「認めてくれるのか？」

「キスまでした仲なのに、つれくないか？」

「ごめん」

それから宿禰の待つ駐車場に行くまでが大変だ。

とてもじゃないが、口元が緩んで仕方ない。

慧一とデートだなんて、思いがけない幸運。まったく運命の女神も捨てたもんじゃない。

駐車場で待っている慧一を見つける。慧一は自分の車で来ていた。慧一らしいというからしくないというか…ミニクーパースールン。なんとも…これでふたりデカイのが乗るだけで変な感じがしておかしかった。

狭っ苦しいのにも全く関係なく、慧一は気分良く鼻歌なんぞ歌っている。

「天気良かったら天文台まで飛ばすのになあ〜賸の星空で我慢してくれよ」

「いいよ。プラネタリウムなんて…小学生の時以来だよ」

「昼寝するのには便利な休憩所」

「デートなのに寝るのか？」

「今日は初デートだからなるだけ我慢するよ」

そう言いつつ、投影が始まると五分と持たず、慧一は俺の肩に凭れて寝てしまった。

投げ出された左手をそつと自分の手と絡めた。

ほら、デートしているカップルになったろ？

「ヴェガとアルタイルの話なんて聞き飽きただろっけど、ああいう神話にこそ案外真理が隠れてんだぜ、紫乃」

寝ていると思った慧一が耳元で囁いた。

絡めた手を自分の口唇に押し付け、「アリアドネの口付け。おまえが迷わないように…」などと甘く囁くのだ。

…おそろしい奴。

腹が減ったというので、ファミレスにでも行って簡単に済ませるつもりが、奴は折角のデートだし、紫乃を待たせた償いもさせてくれと、だから俺が奢ると言いつつ、高級そうなホテルでフランス料理を味わってそのままそのホテルの部屋に泊まることになった。

「慧一はブルジョワなのか？」シャワーを浴びてバスローブを羽織っただけの姿でふたりで軽くワインなどを飲んでみる。ま、格好だね。

「いや別に金目のもんには興味がないんだが、なんでもうちのじいさんが豪商で酒作りをやっていたらしい。それでなんかしら経済的には余裕って話で。でもどこまでが本当かね。親父は単身で外国に行ったつきりだぜ？生活費を稼ぐ為に必死こいてる身だもん。本物の財産家じゃないね。紫乃の家の方が格式あるし、それはそれで大変そうだ」

「まあね、でも俺はもう跡目は継がなくていいし、気軽でいいよ」

「重荷は少ない方がいいんだけどね…血縁関係はなかなか切り捨てられない」

「なに？」

「別に…それより紫乃。俺と寝たいんじゃないかったのか？」

「おまえはどうなんだ？」

「俺？そりゃこんなに綺麗な奴を目の前にして何もしなかったじゃ、甲斐性無しと罵られても仕方ないんだろ？うがねえ…紫乃をいい気持ちにさせてあげられたら、褒めてくれよな」

そう言ってさし伸ばされた手の平を、俺はしっかりと繋いだ。

慧一は言葉どおり、俺を天国に連れて行ってくれた。

慧一の口唇が俺の身体のどこかに触れるたびにそこが腫れ上がる気がした。混じりけの無い官能的感受性。肉体の本質から根こそぎ変えてしまわれる様な苦痛と快感にもがいているような気がした。

こんなセックスなどしたことはなかった。

これまでにしてきた決して少くない性体験の中で、こんなに自分が翻弄されることは一度も無かった。

俺はそら恐ろしくなって、俺を抱いているこの男をまざまざと見つめた。

俺と同じ歳で、俺と同じようなガタイで、俺とは全く質量も許容量も違う。

恐れなど微塵もしらない純粹な人間の魂に触れた気がする。

それと同時にこの猥雑な行為を悪魔の如く楽しんでる気がして、俺は正直恐れ戦いた。

「お、まえとんだけ経験豊富なんだ、よ」「褒めてんの、ソレ」「ちよ、死ぬ」「紫乃とだったら俺満足するかも……」「や、慧……」「怖くなった?」「違う……良すぎて、死ぬ……」「俺も最高だよ、紫乃……」

完璧に圧倒された。

必然であれ、偶然であれ、俺は宿禰慧一という男に出会えた運命に感謝する。

大いなる希望であり、情熱の底辺を担う存在であった。

今まで昏い海の底をひとり漂いでいた俺が、光輝く宝玉を掴んだ気がしたんだ。

この先何があるとも、俺はおまえを拒絶したりしない。絶対に……

俺と慧一が本格的に付き合い始めたのは、蒸し暑い夏の始まりの頃で、さそり座のアンタレスが妙な色気で輝く夜を、俺たちは地を這うように何時間も楽しんだ。

秋が近づく頃になると、お互いの家を行き交うのが当たり前になり、「まるで紫乃と同棲しているみたいだな」と、今更ながら慧一が笑うのを、俺は複雑な想いで受け止めていた。

慧一の家に俺が泊まる割合が比較的多く、それは慧一の勉学の所為でもあった。

慧一はワーカーホリック気味なところがあり、建築の構造力学からデザインまでをトータルで修学しようと励んでいた。

色々なコンペティションにも応募し、評価されていた。

一晩中でも机やパソコンに向かう慧一の背中を見ている時間でさえ、俺は別に苦ではない、寧ろ楽しくさえあった。熱中する慧一の横顔はこの上もなく綺麗だから好きなんだ。

恋人としての慧一には、俺は何の不満も無く、誠意を尽くしてくれる姿勢に感心することしきりだった。

彼に愛されていると感じることも少くない。だが、俺は慧一の言った「本気になったことはない」という言葉が気になっていた。

彼は今まで付き合ってきた恋人にも、同じように接して来たんじゃないのか？

俺は本当に彼の「本気」の存在であるのか？

答えを求める勇氣は俺にはなかった。

俺の方が完全に慧一にのめりこんでいるのは明らかだったし、そ

のことを追及して、この関係が壊れるのを俺は恐れていた。

慧一には母親がいない。父親は単身で外国暮らし。ひとつ下の妹と九つ違いの弟がいる。

彼の実家は一人暮らしのマンションから一時間程度しか離れていない。大学へは無理をすれば実家からでも通える距離なのに、と思う。しかも妹とまだ小学生の弟を置いて一人暮らしなど、不安などないのだろうか、と思い尋ねると「妹がすっかりしているから」と濁された。

さほど愛していないのかと思うと、逆だ。

慧一は妹と弟の携帯の連絡には異常に反応した。

時にはやっている途中でさえ、彼等の呼び出し音が鳴ると、即中断してでも携帯に出るのだ。極まっている俺のことなど眼中にない如くにだ。

そして今、また携帯が鳴った。

「マタイ受難曲」…これは妹、梓のメール音だ。因みに弟の凜一はメサイヤの「ハレルヤ」。

メールを見ながら、慧一は苦笑した。俺には向けない顔だ。そこには「愛」があるのがはつきりとわかる。嫉妬しても仕方ない。

血は水より濃いものだからな。

「妹から？」

「そう、見るかい？」

「いいの？」

「大した写真じゃないんだ。只…クリスマスの余興の…練習風景」
「へえ、おまえの家、クリスチャンなのか？」

「いや、梓がカトリック系の学校だったので、そういう趣向で過

したがるんだよ。クリスマスには絶対帰ってこいっていう脅しだな」
そう言う慧一から携帯を受け取る。

液晶画面を見ると、ベールを被った女の子が顔を少し傾げながら
祈るポーズを取っている。

妹の梓を初めて見た。少女めいた顔立ちなのにどことなく大人の
女性の色気がある。くつきりとしたアーモンドの瞳は慧一に似てい
たが…だが、全体の顔のつくりは慧一似では無い。

「綺麗な妹さんだ」

「男にも女にもモテるそうだよ」

「でも慧にはあまり似てないね」

「父方の祖母似だね。祖母はかわいらしい面立ちだったよ。昔の写
真で見た限りでは」

「…弟は？」

「…凛一？」

「そう、おまえに似てるの？」

「俺は似てると思わないがね、回りはみんな口を揃えて似てると言
う」

「見たい気がする」

「次の画面を見ればいい…」

「うん」

慧一の了承を得て、俺は携帯の次画面を押した。

…弟の凛一がいた。

今度は天使の格好をさせられている。白い服を着て百合の花を手
にこちらに向かって微笑んでいる。

真っ直ぐに肩まで伸びた黒髪。

まだあどけなさの残る男か女か全く判断のつきかねる…綺麗な顔。
確かに慧一に似ている。決定的に違うのは…

「どう思う?」

「なに?」

「それを見て、凜一を抱きたいと思うか?」

「…待つてくれよ。おまえの弟だろ?まだ…」

「十一だよ」

「やめてくれよ。犯罪じゃないか」

「俺は十三で経験しているんだぜ。自分で求めりゃ犯罪じゃない」

「弟だろ?」

「勿論俺にとつては血の繋がった弟でしかない。だから俺は汚せないのさ。だが、俺と梓が慈しんで育てた凜一を他人がどう思うかは興味あるんだよ」

「…よくそんな平気な顔で言える」

「五歳で母親を亡くしてから、俺と梓は親代わりだ。どこでどう間違えたんだか、天使に育ってしまったらしい。この先どうしていいのかわからなくなる時があるよ。手放すには惜しくなってしまうっているからね」

「…おまえが家に帰らない理由って…それか」

「…純粹なる魂がそこにあるんだよ。それに触れるのは覚悟がいる…あいつの傍にいと…疲れるんだ」

「弟だろ?…弟はおまえを頼っているんだろ?。愛してないのか?」

「愛とは何か?…俺にとつて親愛とか慈愛とか…そんなもんじゃない。…そんなんじゃないんだよ…」

俺には慧一の抱えている暗闇の形には全く触れることが出来ないと感じた。

この男とその家族の関係は、他人が触れてはいけない聖域ではないだろうか…と。

家族の事に触れたのはそれきりで、俺はもう一切慧一の暗闇には目を向けないでおこうと決めていた。それが俺たちの未来を隔てるものであっても、俺が暴くものではないとも判っていた。

そうして表面には蜜月ともいう日々が続き、翌年の秋も深まりつつある晩、予想もしなかった事件が起きる。

たまたま慧一は携帯をマナーモードにしていた…わからなかったんだ。

俺たちはいつものようにお互いを求め合って絶頂に達していた。事後、慧一は携帯の受信に気づき…それに目を通した瞬間…唸るように呟いた。

「ウソだ…」

「…どうした？慧一」

「…あ、梓が…死んだ…」

「…」

慧一の言葉に俺は深く頂垂れ、続く言葉は無かった。

俺と慧一の蜜月は終わったと感じた瞬間でもあった。

そして…こういう時が来るのを、どこかで予感していたのも事実だった。

慧一の妹、梓の葬儀は翌日の夕刻に葬儀会場で行われ、俺も参列した。

そこで初めて、弟、凜一を目の当たりにした。

家族席に座る慧一の隣で肩を震わせながら泣いている。

喪服姿の慧一はその胸にすっぽりと入るぐらいの小さな凜一の背中を抱き、そのこぼれる涙をぬぐってやっている。

何故だか…不思議な気がした。

そのふたりの空気だけが他とは違う色で満たされている。

彼等だけが別空間にいるみたいに浮いているのだ。

その隣にいる上品な紳士はふたりの父親だろう。その父親ですら、このふたりと全く交わらない。

違和感を感じたまま、式が始まる。

葬儀は凜一のしゃくりあげる嗚咽に同調するように、終始涙と鼻を啜る音が鳴り止まず、まだ早すぎる妹、梓の死を誰もが悼んだ。だがそれ以上に慧一と凜一のふたりの悲しむ姿に感化されたのは紛れもなかった。

葬儀が終り、出棺までの間、俺は慧一に一言お悔やみをと家族の控え室に向かった。

ドアを開けようとすると、声が聞こえた。

少し高い声と、慧一の声だ。

扉の間から覗くと、ソファに座った慧一が泣いている凜一を抱きながら話しかけている。

話の中身まではわからないが、しきりに頭を振る凜一を宥めている慧一がいる。

「もう泣くな」

慧一が目じりにたまる凜一の涙を口唇で吸うと、凜一は顔を上げて自ら慧一の口唇に自分の口唇を押し付けた。

角度を変えながら何度も…口と口の間からチラチラと赤い舌が見えた。

彼等はお互いを味わっているのだ。

凜一は泣くのを止め、慧一にしがみ付く様に身体を預け、陶醉した眼差しでキスをする。

慧一は…慧一は目を開け凜一の顔を凝視している。その顔には何の表情も見受けられない。ただ凜一の求めに応じているだけ…のように見えた。

…俺はその場所から離れた。

彼等がどんな関係なのか、あれだけの場面を見せられても理解できなかった。

肉体的な淫猥な感情が全く感じられなかったのだ。

慧一は以前から凜一のことを天使だと呼んでいた。

その言葉どおりあの子のキスは欲情したものではなかった。

では慧一はどうだ？

何も感じていないのか？…俺にはわからない。それを聞き出すのさえ阻かまれる。

俺は考える。

あの子は…凜一は確かに綺麗な少年だ。だからといって見るからに色香を振りまくような蠱惑的なものは微塵もない。俺から言わせれば普通の子だ。

慧一は何をあの子に見ているのだろう。ただのブラコンで片付けるのは安易な気がする。

自分が育てた弟だから特別な感情が湧くのは当たり前だ。

だからと言って…それが情欲に摩り替わるわけじゃない。

肉親の愛情だろう？…違うのか？もっと違う絆があふたりには

あるのか？

…俺にはわからない。

ひと月ばかり経って、慧一から連絡が来た。

急いでマンションに会いに行くと、慧一は憔悴しきった顔で俺を見つめ、そして身体を預けるように寄りかかり、俺を抱いた。

「紫乃…俺を救ってくれ…」

「慧一…何があっただ…」

「…俺には…無理だ。凜一を育てていくなんて出来ない」

「…慧…なにもおまえひとりが背負い込むことはないだろう。父親だって親戚連中だっているじゃないか」

俺の言葉に慧一は首を振る。

「あいつは…俺の手からしか食べようとしない。他の奴が無理矢理食わそうとすると吐くんだよ。そのまま死ぬつもりだ…俺が居ないとあいつは…」

「慧…」

嗚咽する慧一の身体を抱きしめる事しか俺には出来ない…

どうなってしまうのか先行きのわからない状況だったが、春を迎える頃になると、凜一も落ち着いてきたと、慧一の顔から安堵の程が伺えた。

「大分落ち着いたようだな」

「それでもないが…取り敢えずひとりで食えるようにはなったよ。中学にも行くようになるし…少しは大人になってもらわないと、俺も困る」

「…」

そう言って、甘やかしてきたのは誰だよ、と言いたい気分になった。

誰だつてひとりで色々なものを抱えながら生きているんだ。

凜一がいくら小さい時に母親を亡くしたと言っても、父親も兄妹も居て、経済的にも何も不安はなかったはずだ。それは充分幸せの域だろう。それなのにマトモに育っていないのは、おまえ等兄妹が凜一をちゃんと育てられなかった所為だろう。

そういう意味ではおまえ達は親失格と言われても仕方ない。

「凜は頭のいい子だから、色々考えすぎるんだ」慧一は苦笑する。

「…おまえ、ブラコンだけならまだしも、親バカか？」

「え？」

「聞いてて恥ずかしくなる。おまえはあの子を天使に育てたとか言うが、俺の見る限り、普通の子だよ。慧一は近くに居すぎておかしくなっている」

「おかしい？」

「中学にもなるのにおまえをわずらわせようなんて、子供だつて言ってるんだ」

「あの子は子供だよ。まだ12なんだから」

「…」

ほら、このズレがおかしいんだ。

「それにあいつは本当に天使なんだよ。綺麗な虹色の六つの羽がある。梓も言つてた。普通の奴には見えないかも知れないが…俺たちには見えるんだよ」

「…」

慧一は本気で言っている。

この感覚はどう考えてもおかしい。

「…もういいよ。でもそんなに大事にしてもいつかはおまえの手から離れるんだぜ？慧一。その時、おまえは正気でいられるのか？」

「…考えたことはないよ」

「じゃあ、考えるんだな。逃げても始まらない事だよ」

俺の言葉に慧一はあからさまに眉を顰め、惘然とした表情で俺を

見つめた。

「…結局人間はひとりでも生きていけるって話か、なら、紫乃は…俺と別れてひとりでも平気だということになるな」

「…別れ話…か？」

「おまえと凜一、どちらかを選べと言われたら、俺を迷うことなく凜一を選ぶ」

「…」

迷うことなくきたもんだ。呆れた話だ。言葉も出ない。

「弟と恋人を天秤にかけるとき点でおまえはおかしい」

「どこがだ？」

「結婚したからといって親子や、兄弟の縁が切れるわけではないだろう。兄弟は兄弟。愛する者とは並ぶ場所が違う」

「紫乃…おまえは間違ってる。愛する者に兄弟も恋人もない。俺は…純粹に凜一を愛しているんだ」

「じゃあ、抱けばいい」

「欲望で汚す愛じゃない」

また笑わせてくれる話じゃないか…慧一、それがおまえの本心なのか？

「…セックスは汚いのか？おまえは俺が汚れているから、俺を抱いても構わないと思うのか？…バカだろう、慧一。凜一がおまえの天使でも、いつかは欲望に塗れるよ。それが嫌なら…そうならうちにおまえが手を付けた方が良くはないか？」

「紫乃…それ以上言うな。俺は本気で殴るぞ」

「おまえの本気なら見てみたい。おまえはいつだって…本気じゃなかった。俺を…本気で愛していなかったって、おまえに言われている俺のことも考えろっ！バカっ！」

そう言い残して、慧一の部屋を飛び出した。

別に一番に愛してもらわなくても良かった。凜一の次でも良かった。僅かでもおまえの本当の愛を感じていられれば良かったんだ。

慧一、誰も好きでひとりでいるわけじゃないんだ。

俺だって…誰かに愛してもらいたいんだ。

何故…判らないんだ！

二週間が経った。

慧一とはメールすら接触していない。

今までだって些細な事での口喧嘩は良くあることで、一週間何も連絡しなかった時もザラにある。

そんな時は必ず慧一の方からなんらかの行動があり、先に謝るのも彼の方だった。

「紫乃はプライドが高いから、自分が悪いと思っても自分からは絶対頭を下げたりしないだろう？俺は別にそこは拘らない性格なんだ」と、彼は笑った。

「だけど、俺はそういう紫乃が好きなんだよ。おまえの美しいところだと思っ」

…「好き」だと言ってくれた。「美しい」と言ってくれた。

その言葉に嘘はないはずだ。

俺は、この二年間ずっとあいつを見てきた。

慧一の暗い部分だって知っていて、見て見ぬふりをしてきたのは自分だ。だけど、そこを含めての宿禰慧一という男を好きになったはずだ。

今更あいつがどんな環境で育ってきたからとか、極度のブラコンだからって、簡単に嫌いになるような想いじゃないはずだ。

慧一からの連絡はいくら待っても来ない。

このまま終わってしまうんだろうか…こんなことで終りにしてしまっ「恋」だったんだろうか…

こんなに「好き」なのに…

携帯のボタンを押す。

このままじゃ納得いかない。

『…はい』

「慧一…俺」

『うん』

「この間は…俺も言葉が過ぎたよ、ごめん」

『…いや、俺も色々言いすぎた。悪かったと思ってる』

「…」

嘘付け。悪いと思っっているならおまえから連絡するはずだろう…

『紫乃…会って話さないか？』

「別れ話なら嫌だよ」

『俺も…離したくないよ、おまえを』

天上に瞬く数万の星の下で、俺たちは寝転びながら、話をした。

色々な話だ。

出会ってから二年間俺たちに何があったのか、そして心にあるわだかまりや過去の鬱屈としたトラウマ的な事まで。

俺には慧一に知って貰いたいことが沢山あった。

隠し立てするようなものさえ、慧一には見てもらわなければならぬ気がしたんだ。

それを理解してもらおうとか、慰めてもらおうとか、そういうものを望んでいるんじゃない。

差し出す手はお互い同等でなければならぬ。

俺は慧一のことを良く知らないまま、この先付き合っていくのは不安だった。

慧一の話は複雑だった。

慧一が十四歳の時、彼の母親が亡くなり、ひとつ下の妹とその時五歳だった弟、凜一の世話にかかりつきりになったそうだった。

父親は一年ほど日本に居たが、仕事で多忙の為、朝から夜遅くま

でない。

お手伝いさんも凜一の世話を親身になってしてくれるわけでもない。

学校から帰ると凜一はいつも寂しがって泣いていた。

慧一は部活や友達とさえ交流のないまま学校生活を過ごした。

神経質で疳の強い凜一はひとり寝るのを怖がって嫌がり、結局ふたりはかわるがわる交代で凜一と共に寝ていた。

「凜一がどうしようもない甘ったれだと思ってても、俺たちは可愛いと思っただし、俺たちしか守れないと思うと……よけいに彼の面倒を見るようになった。あいつはああいう見掛けだから心配もあったんだよ。誘拐されないだろうか、変なイタズラをされないだろうかって大人だったらもつと別な教え方があったのかもしれない。でも……俺たちはあいつを守ることで精一杯で……どこがどう間違っているのか判らないまま、育ててしまっただけ……ある時、梓は言っただよ。俺が凜に欲情してるって。……そんな事があるかと思っただね。実の弟にそんな気持ちなんかわかないって。でも……怖くなったんだよ。絶対的な信頼で俺に……近づく凜一が……急に恐ろしくなった。だから……距離を置いたんだ。俺は……あいつの前では逆らえない。あいつが何を求めても、俺はそれを与えてしまう。だからもう……」

慧一は黙りこくったまま、後はなにひとつ口を開かなくなってしまった。

俺は投げ出された慧一の手を繋いだ。

このどうしようもない性を持った慧一が、俺には必要だと思ったからだ。

哀れみでも蔑んだりしているわけでもない。

人間とはそういうものだと言わかったからだ。

俺は慧一の見かけに惚れたんじゃない。

宿禰慧一という人間が好きなんだ。

「慧一、俺の気持ちは変わらないよ。おまえが好きだよ」

「紫乃、いいのか？おまえを幸せにできるかどうか…俺に確証はないんだよ」

「そんなもん…求めてない。求めているのはおまえという存在だよ。慧…」

俺を抱く慧一の腕は、少しだけ震えていた。

夏になり、俺は実家に帰省した。

弟の正式な跡目の襲名が執り行われ、俺もその大事に奔走した。

わだかまりが全く消えたわけではなかった。しかし、育ててくれた恩は彼等には充分に報いたい気持ちがあつた。

俺は恵まれている。

育ての親は不器用ながらも俺を愛してくれた。祖母は精一杯の愛情を見せてくれた。弟には何の罪もない。これからこの流派を守っていく重荷はあるだろうが、俺が少しでも助けになるなら、力になりたいとさえ思っている。

自分がこんなに変われたのは、自分ひとりの力ではないことも判ってきた。

人間は変わる。

俺も、慧一も、凜一も…そう絶対に変わるんだ。

夏休みも終わりに近づき、明日は東京に戻るという夜に、慧一から電話があつた。

酷い声だった。

「慧、何かあつたのか？」

『紫乃…俺、アメリカに留学する』

「え？」

『向こうの大学院に行くことにする』

「おまえ、こっちの大学に残るって決めてたんじゃないか」

『前から誘いがあつてはいたんだ。いい機会だから向こうの大学院に行くことにしたよ』

「ちよつと待てよ…凜一は、どうするんだよ。連れていくのか？」

『…あいつの事はもう知らない』

「…知らないって…」

『紫乃の言つとおりだよ。大人になったから俺はいらないって…言われた…』

「慧…」

『そういう事なんだ。急で悪いけど、暫く会えないから』

「待ってくれよ」

『俺より好きな奴が見つかったら…忘れてくれていいから…』

「なっ…」

そう言つて携帯は切れた。

…一方的な言い草もここまで来ると笑うしかないんじゃないか？
凜一になんか言われたくらいで自分の運命変えんなよ。子供か？
全く馬鹿な話だ。

しかも好きな奴が見つかったら、忘れろって？

本当に…本当にしょうがない奴だよ、おまえは。

それでも…少しも嫌いになれないのは…これはもう…神様のイジメにしか感じないんだがね。

愛とは恐れ無きもの。完全な愛は恐れを取り除く。と、神は語る。
いや、違う。

愛とは、恐れながらも手放せないものなのだ。

急いで東京に戻った俺は、慧一のマンションに直行した。すでに
出払った後で、管理人から、二日前には引越したと聞かされる。

慧一の学部の人々に連絡を取ってみる。留学の話は前から打診は
あったみたいで、本当に慧一はシカゴ大学の建築・計画学部に編入
したという事だった。

俺は慧一が誘いを受けていたことも、その意思がある事さえ聞
いていなかった。

おまえにとつて、電話ひとつで、たったそれだけでそんなに簡単
に手放せる存在だったのか、俺は。

自分の価値が脆すぎて昔の俺だったら、自殺未遂でもやりかねな
いんだがね、慧一。

そしたらおまえは…少しでも俺のことを心配してくれるのか？

その年のクリスマス、俺は慧一の実家に足を運んだ。

前に言ってた「クリスマスには必ず家族で過ごすんだ」と言った
言葉を思い出したんだ。

高級住宅の一等地の広々とした邸宅は外から眺めても立派で、中
に住んでいる家族の団欒を想像出来る構えだ。

ここには…あの弟しか住んでいないのか？

慧一は何故あれだけ愛していた弟を放り出して、勝手に逃げたん
だ。

黄昏時、太陽の姿が今にも隠れようとする頃、その門が開けられ、
中から出てくる奴がいた。俺は急いで道路の角に隠れ様子を伺った。
出てきたのは…凛一だった。

髪を赤く染め、ジーンズと革ジャンを着こなしている姿はまだ少年ながらもモデル並みに恰好がいい。

彼は門を潜った後、慣れた手つきで煙草を銜え、ライターで火を付ける。

確かに様にはなっているが…よく考えりや、凜一はまだ中学一年だ。

不良行為少年一直線ってわけか…

慧一の育てた結果がこれなのか？

粹がついていても、まだ顔はどこかあどけなく、精一杯大人ぶっているのが一目瞭然で、その危うさに憐れみすら感じるのに…

おまえはこんなに未熟な子供を置きざりにして…平気なのか？慧一。

俺は刻々と落ちる夕陽に向かって歩く凜一の姿を見送った。

このままの彼に健全な未来があるとは思えなかったが、俺が関わる話ではない。

彼等の運命なんて俺にはもう…関係ないはずだ。

それでも…

凜一の孤独な後姿は慧一の姿にも重なる気がして…胸が痛い。

夕陽が最後の燐光を放った時、凜一の寂しげな背中に広がる羽が…見えた。

六枚の翼は、それぞれに薄い虹色を帯びたまま、彼を守るように…ゆつくりと羽ばたいている。

慧一が見てきたものはこれだったんだ…

俺はいつしか泣いていた。

立ち尽くしたまま、辺りが暗くなり、雪が降り積もるのも構わずに、声が枯れるまで、泣き続けた。

俺は大学を卒業し、鎌倉の聖ヨハネ学院高等学校で教鞭を取ることになった。

慧一とはあれ以来なんの音沙汰もない。俺も好き勝手に遊んでい

る。別に慧一を忘れたわけでも諦めたわけでもない。

結構粘着質だと最近気が付いた。

ここへ来て二年目の春。

俺は副担任となる生徒のひとりに、意外な名前を見つけた。

「宿禰凛一」の名を。

間違えようもない。彼だ。

凛一がこの学院に？

不思議な気がした。偏差値の高いこの高校に合格したという事は、凛一は道を踏み外さずに育ったというわけか。ひとりで？それとも…

彼の調査書の目を通した。

詳しくは書いていないが、中三の夏休みの事件に関連する内容が簡単に記されたあった。

…その事件に関して言えば、新聞で読んだ記憶がある。まさか凛一が関係しているとは思っても寄らなかったが。

慧一は…どうしたのだろう。

これだけの事件の後の凛一を、彼は守った。だから、凛一はここに

にいる。

そう考えるのが自然だ。

すべては凛一本人を見てからだ。

俺は期待と不安の混ざる気持ちを抑え切れなかった。

入学早々、宿禰凛一は怪我の為学校を欠席していた。

俺としては肩透かしに合った気分だが、気長に待とう。

もう…二年以上も待ったんだ。一週間かそこら待てないわけはな

い。

一週間後、宿禰凜一の姿を見つけた。遠めにでもわかる。

鮮やかな印象。恐ろしい位に人目を惹く。敢えて目立たないように振舞っているところも垣間見えてかわいいじゃないか。

相変わらず背中の中は慧一は見事なまでに美しい。

可笑しいことに慧一に黒魔法でもかけられたのか、凜一の背中の羽は俺の目にも誤魔化せなくなってしまっている。

二日後、彼は顧問である俺の部活動「詩人の会」に部員になった。まさか彼に詩を愛する趣味があるとは思わなかったが、慧一の影響であるなら、納得するところだ。

そして、今、俺は宿禰凜一の教師として目の前に立っている。

俺と慧一を別れさせた張本人。恨み辛みは山ほど在る。

おまえが居なけりや俺と慧一は、あのままふたりで……くだらない、当てる無い夢を見ることだってできたんだ。

教壇に立ち、気に入った詩を誦んじる時間。

凜一は慧一に良く似た声音で、ミニョンを詠う。

君よ知るや南の国、檸檬の花咲き オレンジの輝き、

さわやかな風吹き ミルテ香り 桂そびえる

君よ知るや南の国 かなたへ、かなたへ

君と共に行かまし、あわれ、わがいとしき人よ

……おまえの為に慧一はどれだけ苦しんだんだろう。

おまえに払った犠牲は幾ばかりだろう……

おまえは慧一に何を与えた？

行き着く場所は見つかったのか？

共に行きたいのは俺だった。

梅雨も最中の折、俺は宿禰凛一の住むマンションを訪ねた。勿論凛一が居ない時を見計らってた。

前もって慧一には連絡をした。彼は会うのを躊躇ったが、俺には凛一の副担任というカードがあるから、家庭訪問とでも言えば、彼は会わざる負えない。

三年ぶりに見る慧一は、少し痩せてみえたが、相変わらずの美貌で、正直参ったね。

全くもって俺好みで、困ったもんだ。

玄関での僅かなやり取り。ただそれだけ。慧一は俺を中に入れることは決してしなかった。

夏、偶然街で慧一と出会う。

俺は無理矢理彼の腕を取り、常連の店に連れ込んだ。

「いつまでも俺から逃げてんじゃないよ、慧一」

「逃げてるわけじゃない。おまえに迷惑かけたくないだけだ」

「もう充分、関わっていると思うぜ。凛一は俺の生徒だし、学校の様子は俺が知ってる。なんなら事細かにおまえに教えてやってもいい」

「俺を責めるなよ、紫乃」

「おまえが凛一の為にあの事件から大学院を休学していることは凛一から聞いた。九月にはシカゴに戻るって話もな」

「詳しいな」

「何故あいつをひとり置いてアメリカなんぞに行くんだよ。折角凛一はあんなにちゃんとした高校生になっっているじゃないか。ひとりの寂しさを知らないわけじゃないだろう」

「俺にはやるべきことがある。それを望んでいるのは凜一だから…」

相も変わらずおまえの中心は凜一かよ。そういうところも可愛く見えてくるから全く不思議だよ。クソッ！

その上、続く言葉に呆れたことを言い始める。

「紫乃、こんなことを頼むのは筋違いだとわかっていているけど…凜一を見守ってくれないか？」

「…そんなことを俺に頼むのか？おまえにあんな裏切りをされた俺に？…その原因たる弟の面倒を見れて？」

「俺は二年経ったら戻る。それまで、ひとりになるあいつが心配なんだ」

「だったら…おまえが今すぐこっちに帰ってきて、凜一の傍にずっとついてりゃいい事なんじゃないか。どうして…俺に頼むんだよ。正気じゃない」

「だから悪いって言ってる」

「おまえはいつだって…俺の気持ちは凜一の半分も考えないで、傷つけてもいいと思ってるんだろうな」

「違う…そうじゃない…」

落ち込んで俯く慧一を見るのは嫌いじゃない。人目には影なんか絶対見せないこいつが、俺だけに見せる感情だからな。

…無理だ。おまえを諦めるなんて、俺にはできないよ、慧一。

「…条件を飲むなら…凜一を見てやってもいい」

「…」

「俺ともう一度やり直す」

「…今更そんなことを言うな」

「あの時から一日だって忘れたことはなかったんだ。俺は今でもおまえが好きだよ」

「…ごめん。無理だよ。紫乃。俺がおまえにしたことを考えれば、

これから平気でおまえと付き合えるわけないだろう」

「では…その償いを持って俺と付き合え。俺もひとりには飽きたんだよ」

俺の勝手な言い草に慧一は暫くしかめっ面で俺を睨んでいたが、諦めたように苦笑した。

「凜一だけでも手一杯なのに、おまえに対しての罪まで背負わせられるのか、俺は」

「自業自得と思ってくれよ。おまえは元来自虐的本質を愛しているんだろう？」

「おまえがそこまで嗜虐性癖のある奴だったとは知らなかったけどな…では、なにをすれば俺の罪は軽くなる？」

「…星を見ないか、慧一。自分がどんなに小さい屑みたいな欠片かってね…そういう気分になるもの悪くないだろう」

「…ああ、悪くはないな…紫乃」

俺たちの第二章が始まる。

時が経つほどに人間も変わり行くものだ。

善き彼方が、悪しき彼方かはわからないが、歩く道に花が咲けば、そこは美しき南の国となるだろう。

そう信じさせてくれ、今は。

君よ知るや南の国　かなたへ、かなたへ

君と共に行かまし、あわれ、わがいとしき人よ

8 (後書き)

紫乃編は「早春散歩？」に続きます。
こちらからどうぞ。

<http://ncode.syosetu.com/n4331j/1/>

「Resolve」1（前書き）

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

「Resolve」1

「Resolve」

1.

世の中には美しいものとそうでないモノがある。

そして中身の良し悪しに関係なく、大方の者は見てくれで判断する。

即ち器量が良ければ、心映えも美しかろうと…

しかし、その実は美貌を嵩にしたロクデナシという輩が大方。

ここに器量が悪い上性格も悪い奴と、器量は良いが同じくらい性格が悪いという奴がいるとする。

さてどちらを取ると言われたら（友達に、恋人に、連れ合いに、ただ一夜の遊びにでも、と、なんでもいい）どちらを取る？

…いうまでもなからう。

それが人間本来の生理的心理というものだ。

言い換えれば器量の悪い奴はすべからず器量のいい奴よりも人間性はマシだということなのかも知れない。

（それはそうと、人間性が何かと問われたら…哲学の本でも読んでもろ、と、言うしかない。どうせしがない私立高校の国語教師である俺に深い哲学思想など知る由もない）

そう、美人は三日で飽き、醜女は三日で慣れるそうだからな。

更々見た目に惑わされなきように…

さて、結論はでたはずだが、もう一度問おう。

美しいモノとそうでないモノ、どっちを選ぶ？

勿論、俺は器量のいい方を…だ。

まあ、俺も俗人で一生を終わるということだ。

目の前に開かれたページに写る、紛れもなく神に選ばれたというしかない極めて非の打ち所のない美貌の奴の顔を見ながら、俺は自分のふがいなさを知るわけだ。

彼はただそこに居る。こちらを向いて瞳を合わせているだけ…

この深淵なる黒眼の密やかなまことしやかにしめやかなる睡蓮の美。

男というより女に見えなくはない。薄化粧は施しているが、卑しくは見えず、それが蠱惑さや可憐さ、延いては優雅で上品にさえ見えてくるんじゃない、然もありなん。

このフォトの目的は理に叶っている…と、言わざるを得ないところが…虚しい。

そいつの名は「宿禰凜一」

俺はこいつの担任教師。

そしてこいつに良く似た美しい兄は、俺の元恋人。

バカ兄貴の慧一は、この悪魔さえ陥落させそうな美貌の弟に一方通行の懸想をしているわけだ。

弟の方は、理に従い、その容姿とは裏腹の、性格の捻じ曲がった奴。しかし、残念ながら極めて珍しくその美に敵った翼と一途な心を持ち合わせている。

それがまた俺にはとりわけ気に入らないところで、バカ兄貴が執着するのもすべて弟の見た目の美だけじゃないという理由になる。

そして俺は偏執的なブラコンの兄、慧一に未だに未練がありすぎて、誘われでもしたら、いつでも脱ぎます！という覚悟で居る、バカの上をいく大バカ者なのである。

なげきつつ　ひとり寝る夜の　明くる間は…だ。

時々冷静になり、

「俺はなんという兄弟に取り付かれているんだ？もういい加減おま

えらに関わるのは嫌気が差す。やめた！やゝめた！」と、叫ぶのだが…（勿論人気のないところで、である）

一度は手にした男を諦めきらずにいる自分自身にも呆れるが、その上をいく慧一には怖れいる。

なんせ彼は生まれてからずっと、血の繋がった弟だけを愛してきたという筋金入りのバカである。いやいや、肉親の愛情ならば由としよう。が、彼はこの美貌の弟を自分のものにしたいという甚だ不謹慎極まりない感情を持てあまして26年、大概解脱してもよさそうだが、煩惱は強し。即ち近親相姦という大罪の畏怖と妄想の念に囚われているわけだ。

男同士であることと兄弟で愛し合うことの二重のタブーに、百戦錬磨の慧一が今更恐れおののいているとは思えないが、彼にとつてこの弟、凜一はどうしても開けられないパンドーラの箱なのだろう。彼は知っているのだろうか。あの箱に残ったものが何かを…まあ、俺としては 敢えて言う気はサラサラ無いが…

神よ、どうぞ、あの兄弟にはその美貌に似合った不幸せを…だ。

そうは言っても。

学習準備室の扉を叩く音が聞こえ、許可を与える間も無く、ドアが開けられた。

その生徒は少し不機嫌な顔つきで俺の机に近づき、「何か用？」とぶつきらばうに尋ねながら俺の前に座った。

「コレは何だ？」

俺は今まで眺めていた雑誌の写真をボールペンで指した。

「え？」

写真よりも幾分健康な男子高校生に見える宿禰は、自分の載った雑誌を見て驚いた声を出した。

「バイトは学校の許可無くしては禁止。無許可でしかもこんなに堂々とエロイ顔しやがって。退学になっても知らんぞ」

「バイトじゃないよ。お金は一円も貰ってない。知り合いの写真家から頼まれてモデルになったけど、雑誌に載せるなんて聞いてない。第一こんなの、慧一が許すわけないだろう」

「…」

写真の専門雑誌だし、一般の人の目に触れることは少なからうが、あの慧一の事だ。愛弟のこんな姿が世の中に晒されていると知ったら…目から火が出る。そのとばかりは確実に俺に来る…損な役回りと来たもんだよ。

「三田川さんったら酷いなあ。職権乱用だ。個人情報勝手に出しやがって…訴えてやる」

腕を組んで憤慨の剣幕だが、どうも真剣味が足りない。…こいつ役者だ。

9つも上の大人としてはこんなガキに翻弄されるのは真っ平ゴメんだ。

バカ兄貴の二の舞にはなるかよ。

「じゃあ、宿禰は知らなかったんだな」

「うん」

「一応この雑誌の会社に連絡して、厳重注意はしておく。今度からこういう事をする時は、学校の許可を得ること。わかったな」

「はい」

少しだけ頭を傾げて笑って応えるその顔…参ったね。

この写真の顔と同じじゃないか…当たり前か、本人だった。

とてもじゃないか、俺も男だから、綺麗なものには惹かれるさ。それが毒であろうと、悪魔の導きであろうと、味わいたくて仕方が無くなる。

怪我は承知の上。

「用は済んだからもう戻っていいぞ」

この顔に騙される前にさっさと追っ払うとしよう。

目を合わさずにしっしっとして手で帰るように命ずると、宿禰の奴は

「慧一から伝言があるよ」と、言う。

「え？」

俺は思わず顔を上げ、凜一の顔を見た。

その魅惑的な顔が俺の耳元に近づき、こっそりと囁く。

「なーんつつてね」

「！」

まんまと騙された、この悪党め！

「おまえ…平常点零点だからなっ！」

「慧があんたに用事なんかあるわけないだろう。兄貴にあんまりしつこくすんなよ」

悪魔は笑いながら去っていった。

なんとというこの忌まわしき世界。

あいつの顔がちよっとでも曲がっていたら、目が小さかったら、鼻が低かったら、怒りなど沸きやしない。すべてはあの顔が悪い。

俺は机の上の雑誌を手に取り、宿禰の写ったページを破り捨てようと手にかけた。

しかし、優美に笑うその写真に何の罪があるだろう…

あんなガキの挑発に乗ってどうするよ、藤宮紫乃。

大人は大人らしく狡猾な手を使わしてもらう。

見てろよ、凜一。

慧一に逐一バラしてやる…

その夜、俺は慧一にメールした。

ありあけの つれなくみえし 別れより
暁ばかり 憂きものはなし

直ぐに返事が来た。

風さそう 花よりもなほ 我はまた
君がおもいを いかに関やせむ

… 辞世の句かよっ！

「Resolve」1（後書き）

紫乃編は時々しか書かないので、更新はあまりありませんが、他の編で活躍予定なのでよろしくおねがいます。

筆者のBlog「auqa green noon」はこちら。

<http://arrowseternal.blogspot57.fc2.com/>

イラストも多数ございます

2 (前書き)

宿禰凜一編は「one love」

以下の小説と連動しております。

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>
i /

2、

俺の勤める聖ヨハネ学院高等学校はいわば進学率で言うならば、近郊の高校ではハイレベルな名門校であり、遠方からも生徒達が集まる離島……いわんや鎖国した島国のようなものでもある。

自主性を重んじ、自由闊達な校風は、それまでの親や家族からの監視下を離れた男子が、初めて味わう麗らかな春の訪れであり、閉じられてはいても心は風になり、自由に舞い上がることが出来る。しかも守られた空間だ。そして、きつちりと区切られた三年間でもある。

この三年間をどう楽しむかは各々のモチベーションによるが、学問も自由も恋も経験もすべてまさに限られているからこそその青春なのである。

なにを選ぶかはコレ、個人の価値判断。

俺はこの教師になって4年になるが、色々な生徒を見てきたつもりだった。

見てくれの所為でもあるが、いわゆる男子にはばつちりと好かれる性質であるから、それなりに傷にならない程度は相手をしているつもりだ。

卒業してしまえば、取り残されるのはこちら側。

生徒たちは「先生と離れたくない」と泣きながらも、半年も経たないうちに「いい思い出をありがとう」と、笑って手を振るのだから。

所詮鳥籠の中の恋なんてそんなもの。本物の自由を知った鳥は籠に帰ることは無い。

まあ、最もこちらが本気になったことは一度もないのだが。ガキを相手にするほど、俺も暇ではない。

恋はきままに…が俺のモットーだ。

しかし、それとは逆に俺は意外な一面を持つ。
今まで付き合ってた奴らに何度となく言われたことがある。

「顔に似合わず執念深いんだね」と。

その通りだ。

俺は初めて俺を犯した奴のその時の顔やら、俺を傷つけた一言を
言った時の相手の表情やら、俺を蔑んだ奴らの面々の顔をやたら鮮
明に覚えている。そして、いつかは仕返しをしてくれると…思い続
ける性質なのだ。

そりゃあもう怨霊になって、毎夜枕元で打杖で打ち据えてやろう
程に…だ。

だからこそ、俺をこれ以上ないほどに無様に傷つけてくれた昔の
恋人、宿禰慧一にはよほどの仕返し…罰を与えてやりたいと、無償
に思いめぐらすわけだ。

死ぬ時は俺の手で…とまでは行なくても、逆に死に水は取って
やりたいと思うのは、可笑しい話で、愛情にまざる憎しみと言うも
のに俺はそぐわないらしい。

恩を仇で報いるとはよく言うが、あいつに関しては逆。

それがまた腹が立って仕方ない話なんだが、あの顔で見つめられ
ると、恨み辛みもそっぽを向いて脳みそが浮上してしまう。

相手もそうだと、これはもう運命の歯車と承知し、誰が何と言お
うと手と手を取って、俗世とは離れてしまってもいいんだが、相手
は俺のことなど、これっぽちも胸の片隅にもありやしないから、俺
は余計に腹が煮えくり返ったり、空しくなったりと忙しい。

別れて5年も経つのに傷が癒えるどころか、恋心は濃過されて純
粋なエキスだけが残るというわけだ。

つまり苦しみも時間が経てば、味わい深い酒となる。

しかし、それは慧一のみにおいてであり、それ以外には当てはま
らないはずなのだ…

その弟、凜一の担任の俺は、慧一に似たその顔を見るたびに、いっぺんは俺の恩讐を受けてみる！クソガキがつ！と、憎々しく睨みつける。つもりでいたが、あの顔は俺にはどうも鬼門らしく、ついでに背中を翼を見るたびに憎々しいどころか、すっかり魅了されてしまう始末。

今日は三学期の始業式であり、その後は最終的な進路の確認に始まって、授業の組み分けなど三年に上がる生徒達には大事な日であるにも関わらず、あの宿禰凜一は来なかった。

本人からの事前の連絡は無く、朝、始業式の前に携帯のメールで慧一から連絡を貰った。慧一がアメリカに帰るのを、凜一がどうしても見送りたいと言うから欠席するという連絡だった。

そして最後に「よろしく頼む」と。

俺はその文字を暫く見つめていた。慧一の俺への感情は信頼ではない。

わかってる…

その夜、久しぶりに都内の行きつけのイタ飯屋で食事をして、ドライブの途中、切れた煙草を買う為にコンビニに寄ろうと車を寄せた。

ヘッドライトが駐車場に屯している数人を映し出した。

一見してわかる。ガキのケンカだ。

俺はクラクションを鳴らし、大声で「警察を呼ぶぞ！」と叫んだ。蜂の巣を突いたように大声を上げガキどもは逃げ去った。ただひとり置いて。

おそらくそいつがケンカの中心だろう。

多勢に無勢だが一方的にやられている風でもなかった。故にほっときゃ良かったのに、こういう時だけ何故か、教育者と

しての使命感に燃えると言うか：実に馬鹿馬鹿しい限りだ。

怪我でもしていないかと、様子を見に車を降りて近寄って見て唾然…

そのまま引きかえって猛スピードでトンずらした方がどれだけ利口だったかわからない。

しきりに左の腕をさすり、近寄る俺の顔を見た途端、そいつは悪魔も虜にするくらいの綺麗な顔で微笑んだ。

「あれ？先生じゃん。こんなところで出くわすなんてどんだけ運命的なのさ」

そいつはにやりと笑いながら俺の方へ近寄ってくる。

俺はといえばまだ呆気にとられたままで、そいつの顔を凝視した。「先生、なにやってんの？また少年狩り？…でも車中だれも乗ってねえじゃん。じゃあ、せつかくだから俺が乗ってやるよ。暇だしさ。どつか眺めのいいところに連れてってよ。海に見える場所がいい」

「おい、勝手に乗るな、不良少年めが…」

助手席に乗り込む凜一の姿を見て、俺も慌てて運転席へ座った。ほつといたら車ごと逃げられそうな気がした。

「凜一、こんなところで何やってんだ。慧一が居なくなった腹いせの破壊行動か？」

「そうとも言えるね。言っとくが言いがかりをつけてきたのは向こうだぜ。コンビニに入ろうとしてもドアの前にうろついて入れなくてやがるの、あいつら。金出したら入れてやるって。無理矢理入ろうとしたら、胸倉掴んでくるからさ…まあ、ちよいと遊んでやつただけ」

「…」

顔はモデルも形無し、頭もバカではなく、その上腕っ節が上等とくりゃ、東西の男女問わずモテるに決まっている…ただしとんでも

ない性悪気質が大問題。

「それで…怪我はないか？お望みなら病院に連れて行くこともできるが」

「病院に行くほどじゃないけど、さすがに五人を相手はちときつかつたかな」

言葉とは裏腹に、なんとも悪びれる様子も無く両腕を頭の後ろにやり、あくびをしながら身体を伸ばす凜一の様子を眺め、うんざりと諦めた心地で車を発進させた。

「学校以外では眼鏡してないんだね」

「ああ、伊達眼鏡だからな。一応先生らしく思っただけで、普段はかけてない」

「じゃあ、今は先生じゃないんだね。だったら俺も紫乃って呼んでいい？」

「…好きにしろ」

「紫乃はいつもこんなとこまで来て男漁ってるの？」

「まさか…漁りにくるほど相手には困っていない」

「アルファロメオか…随分といい車に乗っているんだ。高校の教師の給料じゃとっても無理だね。紫乃はいいとこのお坊ちゃんなんだな」

いつもより饒舌な凜一だけに、何かあったのかと気づいてしまうのも癪だったから、口を噤んだままだった。

ガキと同じレベルに落ちる事もない。

「へえ…紫乃、カプースチン聞くんだね」

オーディオから流れるピアノ曲が始まった瞬間に凜一は言い当てた。

「…よく知ってるな」

「俺、クラシックもジャズも好きだからね。この音は…アムランだ。アムランの音はあまり好きじゃない。巧いけどね、この曲はもっとゆっくり味わいたいって思うんだ」

「…」

驚いた。色んな奴をこの車に乗せたけれど、この音楽家の曲を聴いて弾き手まで当てられた奴はいない。

最も慧一の影響で俺もこういうクラシックを聴くようになったのだから、その弟が詳しくても不思議ではなかった。

「俺、この曲をとて魅力的に弾く人を知っている」

「…」

「もう死んじゃっていないんだけど…俺が殺したようなもんだ」

それが誰のことを指しているのかは、俺にはわかっていた。

> i 6 3 9 8 — 2 7 3 <

3 (前書き)

宿禰凜一編は「one love」

以下の小説と連動しております。

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>
i /

3、

凜一はそれきり一言も口を開く事もなく、スピーカーから流れてくる音楽に身を委ねている。

このまま家に帰しても良かった。だが、今日ここでこの子に関わったのは偶然だと片付ける気にはならなかった。

凜一にとって、俺にとってそれが必然であるならば、俺たちはその意味を見出さなければならぬ。

4、50分ほど走らせた後、鬱蒼とした森の中にある小高い丘に車を止めライトを消した。

辺りは民家や人の気配はなく、小さな幽霊電灯がひとつだけ頼りなげな影を作っていた。

「ここどこ？」

「山人中」

かなり高台にあるから、車の中からでも街の灯は眼下に瞬いて見える。

「俺、海が見たいって言ったのに」

「海なんかしょっちゅう見てるだろう。ほら、外に出ろ」

気が進まなそうな凜一を促し、外へ出た。

真冬の深夜だ。凍りつきそうな空気が身体を締めつけた。

「さむい…まさか俺をここに置いてきぼりにしてトンスラするつもりじゃないだろうね、先生」

「この不況下、クビにはなりたくないからな。ほら、こっちに來い。とっておきの展望席を案内してやるよ」

俺は先を歩き出した。

もう少し先に唐松林に守られるように短い草の生い茂った小さな

草原があるんだ。その中心に大きな桜の木が一本だけあつてな。そのでかい幹に凭れて、ふたりで一晩中夜空を見上げたんだ…

目的の桜の幹を撫で、葉のない木々の間から垣間見える星々を見上げた。

「ここが紫乃のお奨めの場所？」

「そうだ」

車から運んできた毛布を桜木の根本に敷き、そこへ座り込んだ。

「春にはここら一帯レンゲソウが敷き詰められるんだけどな。夜露が冷たいんだ」

凜一を手で招くと、素直に隣へ座る。そのまま仰向けに寝転んで夜空を見上げ、

「なるほどね。プラネタリウムどころじゃない。星が落っこちてくるみたいだ」と、踊るような声を上げた。

俺も同じように仰向けになり星を眺める。

あの時と同じように、宇宙は変わらないままそこにある。

「きれいだ…久しぶりだよ。こんなに沢山の星見るの。…あれは火星だね」

凜一が左の斜め上を指差す。

「そうだな。その上がカストールとボルックス、下が獅子座のレグルス。プロキオン、シリウス、カノープス…」

「オリオンもこれだけ星がひしめいていると、目立たなくていいね」カラカラと凜一が笑う。

不思議な気がした。何年か前に慧一と見ていた夜空を、その弟と見ている。

敵わぬ恋に苦悩した日々が浮かびあがる。

その最たる原因である男と肩を並べて寝そべっている。どう考えても可らしい光景だった。

「…慧と…こうやって眺めていたんだね」

ぽつりと凜一が呟く。

「ああ、そうだ」

「今でもその気持ちは変わらないの？」

「あの頃とは違う部分もあるし、変わらない部分もある」

「紫乃は見かけと違って純粹だな。皮肉じゃなくてさ。本当にそう思う」

「慧一にもそう言われたことがある」

「…あんたは知っていたんだね。慧がずっと…俺を愛し求めてきたことを。だから、俺を挑発するような事を言ってきたんだ」

横たわったまま顔だけを凜一へ向けてみた。凜一は胸に両手を置き、じつと上を向いていた。端正な横顔だった。慧一は明け暮れこの顔を見つめ、求め、守ろうとしてきたんだろう。

「総じて勘のいいおまえが本当に慧一の気持ちに気がついていないとは…思えなかったからな」

「どうして？」

「慧一の行動のすべてがおまえに関わっているのはわかっていたはずだろ？慧一が誰の為に何の為に自分の人生を歩んでいるのか、傍にいろおまえにわからないわけではないだろう」

「…慧と俺はずっと…愛し合っていたんだ。だけどあまりに近すぎて…俺は取り違えていたのかも知れない。…いや、あんたが言うように俺は…気づかないフリをして慧一を試していたんだろうね」

「…」

「むちゃくちゃな我儘を言っても、酷く怒らせても本当に俺を見捨てないでいてくれるのか手を離さないでいてくれるのか…俺は慧一を縛り付けておきたかったんだ…だから、誰にも…慧一を渡したくなくて、引き止めたくて、困らせていたのかもしれない」

俺と同じように顔だけを俺に向け、凜一は小さな声で呟いた。

「俺を憎んだ？」

あまりにも少女めいた表情が儚くて、慧一はこの顔に魅せられてきたのだと思い、それは当然のことと思えてしまう。

「…ああ、憎もうと思ったし眞実憎かったがね…だが慧一がおまえを愛してしまう事への罪があるわけもない。俺が慧一を愛したのも必然であり、俺の意思だ。たとえ慧一のすべての愛は得られなくても…俺たちの間にそれが全く存在しなかったとは、到底思えない…愛し合ったから俺は慧一に救われたし、幸福な時間を持つことが出来た」

「慧一はあんたに随分辛く当たったんだろ？それでも慧を信じていたの？」

「信じてはいなかったさ。慧一はああいう性格だからな。他人には外面はいいが、本性を知られるとお構い無しだ。怒るわ泣きつくわ打ち捨てるわ…あいつには散々な目に合わされた。だけど、許してしまえる。それはあいつがただひとりを守ろうと必死になって…自分の恰好なんぞ気にしていられないほどに、がむしゃらにおまえだけを守ろうとする…その想いを、姿を俺は、愛しいと思えてしまうんだ」

「俺が居なかったらって…思わない？」

「…おまえがいなかったら、今の慧一はいない。あいつはおまえを糧に生きているようなもんだからな」

「…」

「それを理解するために俺も時間がかかったし歳も取った。でも、今ならなんとなくわかる気がする。慧一の気持ちも、あれがあなってしまった事も…それを運命、宿命と呼ぶものだろうか…そうじゃない。慧一はただおまえを本能で愛し続けているだけ。それだけが眞実だ」

俺の言葉を聞いた凜一はふうつと大きく深呼吸をして上半身を起

こした。

俯きながら言葉を吐く姿は、詩を紡ぎだそうと青春を彷徨う悩めるバイロンの様…

「…ついこの間ね、慧一の本当の想いを打ち明けられたんだ。俺が無理矢理に聞きだしてしまっただけど…心から嬉しかったんだよ。俺も慧のことを好きだったからさ。心底欲しいって思った。だから抱いてくれて頼んだの。でも慧は俺を抱かなかった。愛しているけど俺が子供だから抱けないって…そんなの本当の理由になんねえよ。それほどまでに俺を愛してくれているのに、セックスをしない意味って一体なんだろう。そんなに大事に守るべきものなのか？俺には慧一の貞操観念がまるでわからない。繋がってお互い気持ち良くなれば、それはそれで愛し合うってことになんねえのかな」

「…」

俺は寝たままに凜一の顔を凝視した。

凜一が吐いた言葉が頭の中でグルグルとマールブル状に回っている気がした。

慧一が…告白した…

あの慧一が…「いくら凜一を愛してもどうにもならない事実だ」「凜一のいい兄貴役を貫くだけさ」と、苦渋の顔を見せていた慧一の顔が、浮かんでは消えていく。

凜一を愛していると、やっと…告白したのか…

では彼の真の愛は成就したのだ…

ああ、悪夢から覚めた慧一の顔を拝んでみたいものだなあ…

変な喪失感と安堵感がないまぜになって、知らぬうちに一縷の涙が頬を伝った。

→大学時代の紫乃（左）と慧一

> i 6 4 0 4 — 2 7 3 <

4 (前書き)

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>
h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>
h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>
i /

4、

「ねえ、聞いてる？」

目の前に広がっていた星空が、突然凜一の顔に遮られた。

凜一が身体を起こして俺の顔を覗き込んだからだ。

「紫乃…泣いてるの？」

「別に…」

笑われても仕方がないシチュエーションだろうが、凜一は神妙な表情で俺を見つめていた。その顔がやっぱり慧一に似ているなど、微かに笑うと、また涙が零れ落ちた。

「…そうだな…こちらの感情などお構い無しに勝手に涙は出るものだ」

「…慧は…なんであんなみたくない人を選ばなかったんだろう」

「言つたろ？あいつの本能だからだ。もしくはそれを宿命と呼ぶのならそうかもしれんが、天に決められた道なんか俺は歩きたくないからな」

「うん」

「俺がいくらイイ奴でも、慧一の求める者にはなれない。それを不幸と言うか幸いと言うかは俺が決めることだ」

「…紫乃」

「なんだ？」

「キスしたい」

「…おまえって奴は…」

「なんなら抱かれてもいい。逆でもいい。俺が紫乃にしてあげられる慰めなんてそんなもんだろ？慧一に黙ってりゃ判らんさ」

両腕を俺の胸の上で曲げ、その重ねた両手の上に小さな端正な顔を載せた凜一の目が俺を見つめる。

その表情…絵画で見た女神か天使か、はたまた高級な娼婦か…

よく慧一はこの子に手を出さなかったもんだと…晒いながらその頬を撫でた。

「ありがたい申し出だがな、慧一を悲しませるわけにはいかない。

慧一にとつて俺は恋人ではないが、心を許し信頼に値する友人なんだよ。いつだつておまえのことを頼むと…そればかりだ。だがそれこそが奴の俺への敬意とを感じるんだ」

「…」

「さっきの話だがな、慧一がおまえを大事にしたいのはおまえを育ててきた過程があるからだろう。正直、俺も慧一がおまえを欲しがっていたのを随分前から知っているからその辛抱強さにも呆れている。あれは禁欲的というより…マゾヒストだ。おまえ限定だがな。

だから…凜一。あまり慧一を悲しませるな。簡単に寝るなんて言うてくれるな。貞淑であれとは言わないが、誰だつて愛する者が自分以外のものと交わるのは心底嫌なもんだ」

「良く言うなあ…綺麗な少年に見境なく手をつけてるクセにさ。慧一だつて売春宿に行つてゐるんだぜ？俺にだけ襟を正せつて言うのかい？」

「やることは一緒でも愛情のあるセックスとそうでないものとは、心の充足が違ふだろう。それ以外でも…まあ、色々あるけどな。俺が他者と交わるのは俺が誰にも拘束されていないからだ。恋人でもできれば自重するさ」

「恋人か…作る気あるの？」

「そうだな…慧一が幸せになるのを確信したら考えてもいい」

「それつて物凄く俺に関わってくるよね」

「そうとも言えるな。兎に角、あいつの気持ちは一生変わらんだろうからな。おまえがどんなあばずれでも悪人であつても、慧一はおまえからは離れない。離れることはできない。だからつておまえが好き勝手にしていいわけじゃない。おまえが慧一を想うのなら、自身がどうあるべきか考える」

「夫婦みたいに添い遂げなきゃならないって事？」

「さあ……」

「担任なんだから生徒の質問に答えろよ」

「答えが出ててもその通りに歩くことができるのか？運命を示されたら逆の道を行きたくなくなるもんだろ？」

……答えは簡単に導かれない。愛故に……」

「愛ゆえに……」

「悩む事を恐れるな。」

苦しみの重さを大地の重さに返し与えるがいい。

山々は重く、海は重い……」

「リルケだね。」

我らを結びつける精神に祝福あれ、
真^{まこと}我らの生は形象のうちにある……」

凜一の乾いた口唇が俺の口唇に軽く触れる。

「ありがとう、紫乃。愛と信頼に満ちた者。俺もその精神に誓って紫乃を落胆させないように……生きるよ」

寄りかかる凜一の身体を抱き締めた。

見かけよりも細く華奢な少年とも青年ともいえない頼りなさが、保護欲を沸き起こさせた。

なんだか雛鳥を暖めているようでいつもは綺麗な少年を好んで抱く俺が、こいつにはどうも親心が仇になって情欲は沸いてこない。

「おまえを抱くことは俺にはありえん話だ」

「何故さ」

「……色気が足りない」

呆氣にとられた凜一が弾けるように笑う。

「そうか……紫乃も安全な男か……俺を抱かない奴って大概いい人なんだ。信用できる人」

「そうか？」

「うん、さつき車の中で言った人。事件の事知っているよね」

「詳細は知らないけど、自殺したんだろ？そのジャズピアニスト」

「俺に殺されたかったんだと思うよ、月村さんは」

「…」

「それがあの人の求めていた死に方だったのなら…それはそれで幸せだったんだって…そう思えるようになった。勝手な思い込みかもしれないけれど、俺はあの人の役に立てたんだと思っている」

「そうか…」

「それを教えてくれたのはミナだ」

「水川？」

「だから俺はミナを大切にしたい」

「水川と本気で付き合っていくつもりか？」

「大事な恋人だよ。例えば俺が慧一と生きていくと決めても、今の俺にとってミナは大切な恋人だし、別れるつもりはないよ」

「おまえが慧一を選んだ時点で水川はその他大勢のひとりにしかない。もしくはただのセックスフレンドだな」

「違う。ミナは…」

言葉を切り、酷く動揺した凜一は何度も頭を振って懸命に何かを探し出そうとしているかのように見えた。

俺は正直、凜一にとっての恋人、水川が存在なんてとても小さなものと感じていたから、凜一の苦悩など知る由もなかった。

「ミナは俺が選んだんだ。俺が初めて本気で求めた奴だ。あいつだけは手放したくないって…思っている」

「…」

「ミナといると心が浄化される。穏やかになれる。世界がきらめいて見える。ミナを甘やかしたい、優しくしたい、喜ばせたい、安心させたい、笑わせたい、怒らせたい…悲しませたくない…」

「じゃあ、慧一を諦めるか？」

同じように頭を振って目を閉じた凜一は何も言わず、そして目を開け、ただ南の天を指差した。

その先には煌々と光るふたつの恒星がある…

神々でさえ切り離す事のできなかった双子星だ。
それは確かに慧一と凜一の星のように見えた…

> i 6 4 2 8 — 2 7 3 <

5 (前書き)

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i /

5、

相当な時間ふたりで星空を仰いでいたが、そのうち真冬の寒気にお互い震え始めた。

寝袋があればまだいいが、さすがに凍りつきそうだ。

凜一の身体がガタガタ震えだしたのをきっかけに天体観測を切り上げた。

まだ名残惜しそうな様子の凜一だったが、また来ることを約束して車へ戻る。

車を走らせて山を下りだした頃、実は一週間前に高熱で倒れていたのだと凜一が言い、ここへ連れ出した事を少し後悔した。

「大丈夫なのか？気分が悪いのなら病院へ連れて行くが」

「もう大丈夫だって。…どうして俺の周りの大人たちはこうも揃って心配性なのかね」と、凜一は呆れながらも楽しそうに笑う。

「心配されるうちはまだまだ子供ってことだな」

「そうだろうね…自分でも情けないほどにガキなんだと思う。それでも昔よりはマシになったかな…」

温まり始めた車内の空気に安堵したかのように、凜一はマフラーを脱ぎ、大きな伸びをした。両の手をすり合わせて、何度もはあと息を吐く。

「…俺ね、母親が早くに死んじゃっただろ？顔だってあんまり覚えていない頃だけど。父親も仕事で忙しくてさ…慧一と姉の梓だけが俺の信頼する人間でずっと生きてきた。だから梓が死んで慧が俺の傍から離れてしまった時、この世にたったひとり取り残された気分になって…俺の家って広くてね…ガランとした家に『ただいま』って言っても返事もなくて…家政婦さんの作ったご飯だってひとりじゃ美味くなくてさ…まだ子供だったからだろうけれど、寂しくて

よく泣いてたよ。このまま死んじやっても誰も気づかないんだろうなあゝとか、本気で梓のところに逝っちまおうとか…そしたら慧はきっと死ぬまで俺を手放した事を後悔するだろうとか…
この世の果てにいたいな感覚でいたんだ」

「…」

俺は一度だけだが、凜一の孤独な姿をこの目に焼き付けている。

俺の慧一を奪い取った弟に酷い仕打ちを仕掛けてやろうと思っただけだが、あのあまりに寂しげな、そして唯一の翼を見たとき、俺は自分の愚かしさを知った。

慧一が守ろうとしたもの、奪い取れなかったものの崇高さに敗北したのだと感じたんだ。

「^{とつや} 鳶谷さんがいなかったら、俺、本当に駄目になっていたかもしれない」

「鳶谷さんって…ああ、体育祭の時の？」

「そう、捨てぱちになってた俺を拾ってくれたの」

「ジェントルで愛想のいい人だったよな。顔に似合わず」

「鳶谷さんは俺の一番尊敬する人だもん。殻に閉じこもっていた俺を引っ張りあげてくれたんだ。」

誰もが孤独だ。孤独であるのは当然だ。だけどひとりはずまらない。だからって他人に自分の胸の内をすべてわかってもらおうなんてのは手前勝手な話。もっと楽に生きる。他者と繋がり合う事で、笑いあうことが出来る。一時の慰めにもなる。孤独を楽しむことも出来る…そう俺に言うんだ。だから、俺の孤独はそのまま、自分を大事にしようって思った。

彼の経営するジャズクラブに入り浸るようになって、色んな大人のひとと知り合ったよ。月村さんや、ほら、俺の写真を雑誌に載せてくれた三田川さんとか…ジャズプレイヤーに常連さん…みんなと出会えたことは俺の財産だと思ってるし、これからだつてずっと付き合っていきたい。誰かが必要な時に俺の存在が役に立つのなら、少

しでも恩返しがしたいんだ…だから早く大人になりたいって思うよ…慧の為に」

凜一の話聞いてみると、自分の身の上が重なっていく。

…俺もその頃は随分孤独と仲が良かった気がする。

生き続けることが苦しいとどれだけ思ったとしても、今になつてしまえば、あの時はああいう時期だったと自分を晒いっつも愛しく思える。

慧一もまた自分の過去をそう振り返ったりしているのだろうか…

「慧一は嬉しくてしかたないだろうなあ〜やっとおまえと相思相愛になれて…」

「でもまだセックスはしてない…」

「それが大した問題か？」

「あんたは慧と何回も寝てるじゃん」

「まあな」

「俺だって慧としたい。じゃないとあんたに負けてる気がしてなんねえし」

「勝ち負けか？そこに拘ること自体がおまえがガキだっていう証拠だな」

「…だって、さ…」

幼子のように口唇を尖らせて不貞腐れる表情をバックミラーで眺め、なんとまあ愛しい者だろうと不思議で仕方ない。

シート少し倒し、深く座りなおした凜一はオーディオの曲を選び始めた。

「紫乃先生。俺ね、T大受けるから」

「そう」

「…それだけ？」

「頑張れよ」

「担任なのにそれでいいの？。おまえじゃ無理だとか、他にいい大学があるとかさ、助言しないの？生徒の合否って先生の査定にひび

くんだろ？」

「そんなの知るかい。第一生徒の行動意欲を教師が削いでどうする。行きたいと思う大学を目指せばいいさ。要は己次第。おまえが何を企んでそこを決めたのか、聞く必要性もないね。だが、本気でいきたいと思うなら、後ろについてやるから後悔しないようにやれってことだけだ」

「先生つてさ…」

「なに？」

「生徒に好かれるはずだよな」

「賞賛と受け取っておくよ。それより『詩人の会』の方もよろしく頼むぜ。部長さん」

「蒼き青春の思い出となるように精を尽くしますよ。ねえ、カプースチン聴いていい？」

「ああ」

「紫乃、ジャズが好きなら今度鳶谷さんのジャズクラブに連れて行くよ。ゲイの人たちも多いから紫乃なんか人気者になれるぜ」

「おっさんばかりだろ？」

「自分だつてそのうちおっさんになるんだから、ガキばっか相手にしてないで、大人の会話も楽しめよ」

「はいはい」

山を降りた車は高速に乗り、流線形の波を掻き分けスピードを上げていく。

「すぐ〜速い！慧一の車じゃこうはいかないぜ」と、凜一は嬉しそうに声を上げる。

やがてスピーカーから流れてきたエチュードに凜一の睡魔が目覚めたのか、やたら目を擦りながら重たそうに口を開く。

「『夢』か…宇宙空間に漂っているみたいだ…」

「そうだな」

「銀河鉄道なら…さしずめ俺と紫乃はジョバンニとカムパネルラだ

ね」

「冗談だろ？どちらかが死ぬなんてさ。俺の運転ではありえない話だ」

「そう…じゃあ、ほんとうのさいわいは見つかるかも知れないね…ねえ、少し夢を見てもいい？…無事に家へ帰りつくように祈るからさ…」

「ああ、おやすみ…いい夢を見るといい」

直ぐに静かな寝息を立て始めた凜一を起こすのは不憫に思えて、俺は出来るだけ遠回りをして帰路に着いた。

ほんとうのさいわいはいつだって今だと言えるように…
俺もおまえも慧一も彼方へ辿りつける為に…
今は走り続けよう…

> i 6 4 9 3 — 2 7 3 <

5（後書き）

紫乃編これでしたらくおやすみです。
次はミナ編でお会いしましょう。

Sonnet (十四行詩) 1 (前書き)

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i /

Sonnet (十四行詩) 1

> i 1 6 9 1 6 — 2 7 3 <

Sonnet (十四行詩)

1、

ひとり座つてうるわしく静かに
過去を憶いおこして考えると
私が望んだ多くのものにありつけなかったことを悲しむ
昔の不幸を憶い 新たに私の懐かしい日々を歎く
死の果てしない夜に かくれた貴い友達のために
滅多に泣かないまなこも 涙に溺れるほどだ
また長く忘れていた愛の悩みも 新たに歎かれる
私を犠牲にした多くの過ぎた幻影を悼まれる
それに過ぎ去った悲しみも悲しめる
すでに悲しまれた多くの悲しみの悲しい勘定を
憂鬱に不幸から不幸へと数えあげる
まだ不払いの勘定のように 新たに支払われる。

親しい友よ、こんな時でも君を思うと
すべての損失は償われ、私の悲しみは終わるのだ。

W・シェークスピア

夏が嫌いなのはいつからだったか覚えていない。
日中のそれは言うまでも無く、
夜になってもこの蒸し暑さときたら、
昼間の疲れを倍増させる気

でいるらしい。

ついで星ひとつ見えない都内のみすばらしさに、当然ロマンなど探せそうもない。

やっと着いた終点の重い扉を開ける。

「紫乃、おそ〜い」

都会に彷徨い出でた天使のごとき彼が、手を招く。

「悪い。仕事が片付かなかったんだ」

「疲れた顔してる。まあ、座りなよ。今晚の主役がお待ちかねだよ」
「……」

主役ねえ…

その主役が中央のソファに座って、俺へにつこりと微笑む。

俺は仕方なしに「誕生日おめでとう」と、声を掛ける。

「ありがとう、紫乃。仕事で疲れているのに悪かったな。ゆっくり寛いでくれ」

BGMはいつものジャズが流れるが、辺りを見回して、常連の客しか見えないことに気づく。

「おまえの誕生日の為に、わざわざ貸切なのか？」

「今日は店休日なんだが、慧一くんの誕生日の為にわざわざ開けたんだよ、紫乃くん」

オーナーの鳶谷さん直々の丁寧な挨拶を受け、用意された座へ腰を下ろす。

「夏休みなのに先生は仕事なのかい？」

「夏休みでも生徒は補習。先生は授業があるんですよ。受験生なんてバケーションどころじゃない」

「大変だねえ〜」

「はい、センセ。ビールでもどうぞ〜」

なぜか主役の真正面へ座らされた俺に、いつもの常連客が次々とおしぼりやら料理を取り分けた皿などを差し出す。

「まずはシャンパンで乾杯など」と、主役の隣りへ座る堕天使の凜一がシャンパングラスになみなみとドンペリを注ぐ。

「で、紫乃。慧一へのプレゼントは何？」

凜一の性悪な瞳が俺を見つめる。しかもその質問に対しての俺の答えは…

「ない」

「へ？」

「忘れた…」

これはマジだった。

八月八日は慧一の誕生日。そんなこたあ、誰に聞かれなくても知っている。

毎年毎年、俺はひとりでも慧一の誕生日を祝ってやっているんだからな。

しかし…今夜のパーティーは予想外であり、

今日の夕方、凜一からの連絡で慧一の誕生日だったと気づき、プレゼントなど、全く頭に無かったのだ。

「紫乃、マジで慧一への誕生日プレゼント忘れたのか？」

「…ああ」

「信じられない。俺なんか車だぜ。プレゼントしたの」

「凜、あまり紫乃を責めるなよ。それにプレゼントの車って言うても、こちら（日本）で使う仕事用だろ？経費で落しているし、凜も兼用じゃないか」

「それでも慧へのプレゼントです。なにも持ってこない紫乃とは、愛情の重みが違うよねえ」

いかにもわざとらしく嫌味を言う凜一を思い切り睨みつけても、悪魔の笑みでにこりと返され、力が抜ける。

まあ、なんとでも言え。確かに手落ちの俺が悪い。

言い訳をするなら、慧一の誕生日さえ思い出せないほど、仕事熱心だったと…通じねえな。

「まあ、今日は許してやるよ。しかし紫乃も歳だねえ。慧一の誕生日も忘れるようじゃやもめ暮らしが心配だよ」

「ああ、どーせ、35の爺いですよ」

「紫乃はまだ34だろ？35の爺は俺だよ」

「慧一くんや紫乃くんが爺なら俺たちはどうなるんだ？なあ、鳶谷さん」

「哀れな年金泥棒って言われないように、死ぬまで働くしかない身の上だろ？」

「あら、私はいつまでも乙女のミコシさんでいるわよ」

「命短し恋せよ乙女、紅きくちびるあせぬ間に…ですよ、ミコシさん」

「もう、憎たらしい子なんだから。早く老いさらばえよって言うてるの？」

「違うよ。この詩の意味はね…今を精一杯生きろって意味なんだよねえ、慧」

「うん。実はこの元になっている歌は『バッカスの唄』と言ってね。ルネサンスの豪華王として有名なロレンツォ・デ・メディチが残した詩なんだ。こういう話は紫乃の専門だよな」

「…青春とはなんと美しいものか」

またたく間に過ぎ去ってしまう

愉しみたければ、さあ、すぐに

たしかな明日などは、ないのだから…」

「ステキだわ。青春は若者だけのものじゃないし、それを楽しみなきゃ損しちゃうわね」

「そうだよ。今という時はただ通り過ぎていくだけ。それをどう使うのが人それぞれだもの。今日は慧の誕生日だからね。みんなに幸せになってもらいたいんだ」

「凜くんがいるだけで、我が家はハッピーだね、ねえ、マスター」

「ああ、凜一はうちの守護天使なんだ。永遠にね」

「まさに、永遠すら一瞬の彼方へ消え去るのが、時というもの」
「詩人だねえ」

誰彼の顔も幸せに満ちている。

慧一も凜一も…そして俺もそうでなければならぬ。
だが何度飲み干しても、今日の酒は少し苦く感じた。

「じゃあ、俺は明日も仕事があるから…」

席を立つ俺を、慧一が見送る。

「紫乃、今日は遠くからありがとう。本当に嬉しかった。おまへの誕生日には花束を贈るよ」

「35本か？」

「いや、抱えきれないほどの赤い薔薇だ」

「…」

昔と変わらない笑みを見せる慧一が、愛おしい。

とつくに日は跨いでいた。

深夜二時。俺は「Satyri」の店を出た。

「紫乃、足取りふらついてるし、俺、送っていくよ」

外まで追っかけてきた凜一が俺を気遣う。

ム力つく奴だが、こういうところが憎めない。それも計算なら、俺の負けだろうが。

「ばーか。今日は慧一の誕生日なんだから、傍にいてやれよ。それが一番あいつが欲しいプレゼントだろう」

「…いつだって、そうやって、紫乃は慧一を一番に想ってくれてるのにね。兄の非礼を許してやってよ」

「それでも、おまえらの幸せを喜んでるんだよ。そして、俺への気遣いもありがたく受け取っているさ。…凜一は、良い子だな」

「完全に酔っ払ってるね」紫乃。あんたが俺を褒めるなんてさ」

「いいじゃないか。たしかな明日はもうすぐそこだ。今のうちに楽

しんでおけ。じゃあな」

「バイ、紫乃。気をつけて…」

手を振る凜一に応えて、俺は角を曲がった。

そのまま大通りに出て、そしてタクシーに乗って我が家へ帰る。いつものパターンを取るべきだった。明日も朝から仕事なんだから。

それなのに、路地を曲がったところで足元がふらついた。

前を歩いているカップルを避けようとして、足をとられ壁へ激突、そのまま地面に崩れ落ちた。

仰向けになった俺は、星の無い空に星を夢見ていた。

昔、慧一と一緒に見た無数の星空を思った。

俺の青春はあれだったのだ。

あれでしかなかった。

だからって今を嘆く気もない。

俺は幸せだ。こんなに人を思う気持ちがあるのだから。

「慧一、35歳の誕生日おめでとう。俺もすぐに追いつくさ。いつだって並んで歩ける距離でいられる…そうだろ?…慧…」

そのまま、目を閉じた。

何故なら、幸せな気分だったし、立つ事もままならぬ状態だったからだ。

「大丈夫か?」

「ああ…大丈夫だよ、慧一…」

「大丈夫に見えねえし。このままだと誰かにぼこられるよ」

「…うん、わかって…るし…慧…」

「…なんで俺の名前、知ってるわけ?」

「知らん。慧…は慧…だ…」

それが誰の腕なんかはどうでも良かった。

足元もおぼつかない俺を抱きかかえるように連れ去る人よ。

あの星の彼方まで連れてゆくがいい。

そして心から祝わせてくれ。

すべての祝福をあの男へともたらし給え、と…

2（前書き）

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i /

2.
頭痛に耐え切れず、目を開けたら、辺りはやんわりと明るかった。次に萌黄色のシーツが見え、裸の自分がそのシーツの上に寝そべっていることが判明した。

…なに？なに？

一体…どうした、俺。

ボケた頭をフル回転すべき、仰向けになつて天井を見つめた。

昨日…慧一の誕生日パーティでかなり飲んだ記憶は確かにある。

それから店から出て…道に寝転んで、こんな風に天上を…星を見た…見た、のか？

それで、誰かが俺を抱えて…

「大丈夫か？そのホテルで休もうか？」って、言うから「いいとも」…と、応えた…気がする。

…まさか…

飛び起きたつもりで、上半身を起したら、頭と腰に激痛が走った。「いてーっ！」

思わず、頭を抱え込む。

頭の痛みはわかる。これはいわゆる二日酔いだ。だが、この腰のダルさはなんだ。

それになんだか…奥の方も…痛い…

え？…まさか、俺、しちゃったの？しかも、入れられた？

「ま、じで？」

いや、自分の身体だから何をされたのかははっきりわかるし、こんなことで取り乱すほど、俺も若くはない。

だが普段遊ぶにしても、タチ一辺倒でやってきた俺が、見ず知ら

ずの奴と寝て、掘られるなんてこと…滅多に、つつか、ほとんどないぞ。

第一、相手の顔が全く浮かんでこねえ〜
「サイアクだ、これ」

ガチャリとドアの開く音が聞こえ、バスタオルを腰に巻いた男が濡れた髪を拭きながら出てきた。

> i 1 7 0 8 7 — 2 7 3 <

「あ、紫乃、おはよう。シャワーでも浴びてくれば？」

「…」

「空も青いし、気持ちの良い朝だね〜」

「…あの」

「うん？」

「あんた誰？」

「え？…もしかしたら酔っ払って覚えてないの？」

「全面的にこちらに非があったと思うが…全く覚えがない」

「紫乃が俺を誘ったんだよ。身体つきが好みだからやろうって」

「…」

名前を呼び捨てにされたことさえ、腹も立たない。たぶん、俺がそう呼んでくれと言ったに違いないのだ。

まさにこいつのガタイが俺の好みであるのは否定できない要素だった。

「それに、俺をケイって何度も呼ぶから、俺もその気になったんだけど…」

「…すまん」

そう、慧一と間違えていたんだ。たぶん…完璧にそう。あのシチ

ユエーションからすると、そうなることも予想できた。
しかし、そこまで悪酔いしていたのか…しばらく酒は御免こうむる。

「赤の他人のあんたを、全くもって勝手につき合わせてしまった」
日頃の悪癖だとさすがに自己嫌悪に陥った。

「そんなに謝られても…別に俺は…楽しんだからいいんだ。それに俺、紫乃のこと気に入ったし…」

「え？」

「ね、セックスの相性も良かったし、これも何かの縁かもしれないからさあ、俺達付き合ってみない？」

「…」

ベッドの端に腰掛けた俺の真正面にいる男をしげしげと見つめた。決まった相手は居なくてもこう見えても俺は、遊ぶ相手に困ったことはない。別段付き合いたい相手も探してはいない。

よく見たら、まだ若造じゃないか。

体格は慧一並みに整ってはいるが、童顔の顔がなんともアンバランス。目がデカイとかそういうんじゃない、なんかこう…愛玩動物っぽい、俺も最も苦手とする分類。つつか、そういう奴らを学校で嫌と言っただけで見ているから、条件反射的に手を出しちゃならない、職業意識に駆られるというか…

一見大学生か、社会人成り立てか…まさか高校生じゃないだろうが。

「おまえ、歳幾つだ？」

「え？ああ、自己紹介ね。千葉啓介、22歳。聖ヨハネ学院大学の三年生です」

「…」

驚きすぎて声が出なかった。

なんか色々突っ込みどころがありすぎるが、なんといつても13

下の奴に抱かれた事実は、いかんともしがたい気持ちになる。

しかも、名前はいい、すけ…すけはどうでもいいが、けいは駄目だ。まだ傷は癒えていない。それに聖ヨハネって…不吉なキーワードが多すぎるだろう。

こついう奴とは、深みに嵌って縁など結ぶと、後々ロクなことになる。

「紫乃は？紫乃の方も教えてよ」

無邪気な顔を近づけて、俺の頬を撫でる仕草に苛立つ。

俺は撫でる手を払いのけて、無言でベッドから出た。

下着を着けシャツを羽織る。

「聞かない方がいい」

「なんで？」

「おまえよりも年上だからだ」

「それはわかるよ。でも俺、年上が好みなんだ。紫乃はすごく綺麗だし、年上って言うても、25、6だろ？」

25、6と言われて、嬉しく思わないわけでもなかったが、それを有り難がるほど、こつちも落ちぶれてはいない。

「ヘイ、ボーイ。残念だが俺は今年で35になるおっさんだ。こんなおっさんが相手に本当に気の毒だったと謝るが、一夜の悪夢と違って忘れてくれたまえ、勿論ここの代金は俺は持つ。これは一晩付き合ってくれたお礼だ」

すっかり整った姿を鏡で確かめた。ズボンのポケットから財布を取り出し、三万円をテーブルに置いた。

「ちよつと待ってくれ。お金なんて要らない」

「悪く思わないで欲しい。酔っ払いを介抱して、おっさんを楽しませてくれたんだから、お礼するのは当たり前だよ。千葉くん」

「…」

「本当にすまなかったよ」

「俺は…意に沿わなかったってこと？」

「…君は良い男だよ。俺なんかより、もっと若くて良い男を捜した方がい。悪いが、仕事があるんだ。先に帰るけれど、君はゆっくりしていきたまえ」

精算機で支払いを済ませ、部屋を後にした。

まだ六時前。電車で鎌倉へ帰っても学校へは充分間に合う。

ホテルの玄関を出て外観を眺めた。

安価なものじゃなく、洒落たラブホテルだとわかった。

わかったが、ここへは二度と来ることもねえなと、溜息を付き、俺は駅に急いだ。

容赦なく、朝日が身体中に照りつける。

今日もまた真夏日だろう。

「よう、紫乃。元気ないね」

職場での俺の唯一の休憩所である国語準備室で一服やっている、宿禰凛一が顔を見せた。

凛一はこの生徒でもないし、先生でもないが、新しく建てた聖ヨハネ学院高校の教会堂の建設責任者として、今年の初めから、度々この学校へ顔を出している。

凛一自身もこの卒業生だし、二年間、俺が担任だった。その縁を外しても、俺の人生にとって、切っても切れない関係だってことは、理解している。

まだ26にしかないガキが、一流の建築家におなりになるなんて…昔の担任の俺としては、鼻が高いと自慢になるかもしれないけれど、相手が相手なだけに素直に喜べるわけでもない。

「昨晚は兄の誕生日パーティへ来てくれてありがとう。慧一も喜ん

でたよ」

「…」

綺麗な顔でこういう言い方をされると、誰でもにやけて喜ぶだろうが…奴がこういう顔をする時は、絶対に気を許してはならない。「紫乃はあれから、どうしたの？ 酔っ払っていたから、俺、心配しちゃったよ」

気色悪い言い方をするもんだ。大体おまえが俺の心配をするわけもねえだろう。

「別に…家に帰った」

顔色も見ずに、手元の答案用紙の答え合わせを続ける。

「ふん。家の灯りもついてなかったし、郵便受けに夕刊も手紙も入ったまんまだったよ」

「お、まえ、なんで俺のうちの…」

手を止めて、思わず凜一の顔を見た。

「だって、ついじゃん…紫乃、伊達眼鏡がずれてるぜ」
「るせつ…」

「眼鏡なしの方が、色っぽくて好みなんだがねえ」

俺の顔に手を伸ばして、掛けていた眼鏡を取り去り、自分の鼻に掛けて「似合う？」と、笑う。

「朝がえりのあんたがベランダから見えた。どこに行ってたんだ？」

「それに答える必要があるのか？」

「家族としては当然…あるね」

「…」

勝手におまえの家族の一員にするなっ！

確かに俺と宿禰家は同じマンションに住んでいる。それも今年の春先からだ。

凜一の住むマンションは俺の勤めるこの学院から徒歩十分に位置する、セキリユティもしっかりしている高級マンションだ。

俺はそれまで、ふた駅離れた賃貸マンションに住んでいて、そろ

そろ、自分の家でも買おうかと思っていた矢先、俺の話をどっから聞き及んだ凜一が、自分のマンションの9階の住人が、売りたいがっているという話を持ってきた。

「中木さんっていうお年寄り夫婦だったの。俺、凄くかわいがって貰っていたんだけど、昨年の秋におじいさんが亡くなってね。それでおばあさんは息子さんのところに行く事になって、『この家を売りたいけど、見ず知らずの人には売りたいくないから、凜ちゃんの知ってる方を紹介してくださる?』って、頼まれたの。で、紫乃にどうかと思つて」と、まさにラファエツロのマリアごとく、俺に微笑むわけだ。

その天からの御託に、愚かな一粒の麦でしかない俺はただ頭を垂れるしかない。

いや、そりゃ、俺も一応は反論したし、精一杯逆らつてはみた。

しかし、凜一の後ろにもっとも巨大な魔王みたいな奴が居て、そいつが「紫乃が俺達のマンションに来てくれたら、俺も嬉しいよ。なにかあつたら紫乃を頼つてしまふかもしれないけれど、それはお互い様だな。これから先も紫乃とは家族同然の付き合いを望みたい」慧一の悪魔の言葉に乗せられ、いつの間にか俺には書類にサインをしていた…

と、言う笑い話だ。

結局住んでみると、凜一たちの家は慧一や凜一よりもその両親の住居と化していて、あいつらはたまにしか帰つてこない。したがって、必然的に俺はあいつらの両親との付き合いが多くなる。

「食いつぱぐれがなくて良かったね」と、凜一はせせら笑う。

「体よく、ためーらの代わりに親の面倒をみさせやがって」

「ワコさんも料理の腕を揮えるし、親父もいい将棋の相手が出来たと喜んでいよ。紫乃も親が居ないから、親代わりに甘えればいいじゃん。俺達も紫乃が両親の傍に居てくれれば安心だしね」

「初めからそれが目的だったんだろっ!」

「お互いに幸せでいられれば最高だろ？俺達はみんな紫乃が大好きだもんね」

そう言っで、凜一は俺の頬にキスをする。

「あ、キスマーク見つけ！」

「え？」

「へえ…それで朝帰りだったわけね」

ニタリと笑う凜一は、地獄の公爵と化す。

3 (前書き)

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i /

3、

慧一の誕生日に知らない奴と一夜を共にしたというネタを、凛一は慧一には言わないと約束した。

バレたところで、どうといったもんじゃないんだが、その夜は凛一にせがまれ、宿禰家のディナーへ招待された。

家族での慧一の誕生日パーティとかで、彼らの継母の和佳子さんが腕によりを掛けて作った手料理がテーブル狭しと並べられた。和佳子さんは元々プロのシェフなので当たり前前に美味しいものしか作らない。

「こうやって家族みんなでお夕飯を頂くのって楽しいわね」

「……」

「いやいや、俺は家族の一員じゃない。」

「35にもなるのに家族で誕生日のお祝いって恥ずかしいな」

「……」

「なんだよ、そのわざとらしい恥じらいは。」

「ワコさんの料理はなんでもめっちゃ美味いよ。紫乃もたくさん食べてよ」

「……」

「無駄にはしゃぐおまえは気持ち悪いよ。」

「紫乃くん、楽しんでるかね」

「あ、はい、勿論ですよ、お父さん」

……なんで赤の他人をお父さんって呼ばねばならないんだよっ！

食事が終わってリビングで寛ぐ。

慧一たちの父親、優一さんは外交官としての一線を退いた後、省

庁にしばらくいたが、定年を迎えてゆつくりと老後を楽しむつもりだった。しかし、ここのところ多忙と見える。

慧一と凜一の建設事務所「A・SUKUNE アーキテクツ」の拠点はニューヨークだ。

近年、日本での仕事も順調に増え、二人とも頻繁に帰国している。だから、日本では事務所かわりにこのマンションを使い、優一さんが事務管理一切を取り計らっている。

まさに俺の屍を越えて行け状態……いや、優一さんはご健在だが。

「しかし、慧一も紫乃くんも35。四捨五入すれば40だ。世間的には家庭人でもおかしくないんだろうけどなあ」

ソファに座り、一服する優一さんが何気なく言葉を吐いた。

「父さん、嫌味たらしいことを言うなよ。慧一も紫乃も男にしか興味が無いんだから、家族持ちになれるわけないだろ。だからってそれが何だっていうのさ。結婚すれば幸せになるとは限らない。それに跡継ぎの為の子供がいたからって、この世の中だ。まっとうに育てるのは簡単じゃない。大事なことは父さんの愛する家族が幸せに生きているかどうかだろ？もし、父さんが俺達の本当の幸せを願うのなら、自分の勝手な夢を押し付けるのは不毛だよ」

「……言葉もないな」

凜一と慧一の親父は、わかっているというように、肩を竦ませた。俺と慧一も顔を見合わせて苦笑する。

こういう凜一には絶対敵わないと思いきらされる。

「はい、兄さん達、ワコさん特製のケーキをお食べ」

目の前に差し出されたケーキを黙って食うしかない。

「それはそうと、学校のチャペルは出来上がったんだろ？」

「うん、竣工式も終わったし、お盆明けに慧一がデザインした体育館とも兼ねて盛大に落成の祭式をやるんだよね？紫乃」「ああ、らしいな」「街を上げてのお祭りみたいにするんだって。色んな催し

物も予定されてる」「それじゃ、私達も行ってもいいの?」「勿論だよ、ワコさん。歓迎するよ。あ、ケーキ焼いておすそ分けしてあげてよ。みんな喜ぶから」「わあ、楽しそう、じゃあ、頑張つて沢山作つて持つていくわ」「お願いします」「紫乃君、とつておきの大吟醸があるんだが、飲まないか?」「はい、頂きます」「慧一はザルだし、凜一は酒に弱いし…美味しく飲める相手はワコさんか紫乃君ぐらいだ」「調子いいなあ、ひとしきり飲んだら、すぐに寝ちまうクセにさあ」「俺は明日にはニューヨークへ戻るから、親父の相手は紫乃の任せるよ」「ほら、いつもこうだ。全く親父の威厳などうちには皆無だ」「専務にはいつもお世話になってますよ」「名前だけのな」

本音を言えば宿禰家は居心地がいい。本当の家族の団欒を味わえる。

京都の実家には、たまに帰ることもあるが、心から歓迎してくれる者などいない。勿論それを恨みに思うこともない程、こちらも歳を取ったのだが…

新築された教会堂での初めての奉神礼が厳かに執り行われた。

正教会の司祭たちの説教や薫り高き香炉が振りまかれ、教会の鐘の音がいつまでも鳴り渡った。

パイプオルガンの音に合わせて賛美歌を歌い終わり、なごやかな歓談が続いた。

大勢の賓客の中に、凜一や慧一の姿が見えた。それぞれに忙しく客の挨拶を受けている。

ふと凜一の傍に近づいてくる姿を見た。

凜一の高校時代の恋人だった水川青弥だ。

稀に見る優等生だった彼は、将来のエリートへの道を捨て、画家になった。

昨年末、彼と彼の仲間の展覧会へ行つた。

水川は良い絵を描いていた。「愛する者」を描いた絵だった。

「愛する者」とは宿禰凜一のことだ。

にこやかに笑いあうふたりの姿を見て、なんとも言えない気持ちになった。

教会を出ると、冷房で冷めた身体から、蒸した熱気であつという間に汗が滲みだした。

教会を外側から眺めた。

凜一が設計した教会の壁は薄いクリーム色から先端にかけて淡いレンガ色のグラデーションに彩られ、空の色が何色になってもやわらかく包み込むような色彩だ。

デザインは少し丸みを帯びた後期ルネサンスの形式を取っていると言う。少々変わった作風でもあるが凜一らしいと言えるだろう。

どちらにしても凜一の作品はいつまでもここに存在していくんだ。

「紫乃、暑くないか？ほら、お茶」

慧一が俺に近づいてきた。

受け取ったペットボトルを開け、冷えた液体を喉に流し込んだ。

「どうした？なんか気に障ることもあったのか？」

「え？どうして」

「そんな顔してるから」

「…おまえは気にならないのか？」

「何が？」

「あいつらだよ」

凜一の永遠の恋人は慧一のはずだ。だからこそ、俺はこいつを諦められたんだ。

自分の命を捨てても構わないくらいに恋い慕う凜一が、元の恋人とにこやかに談笑しているのを、平気で眺められる慧一じゃないだろう。

「ああ、凜と水川くんのことか…」

「…」

「彼の絵を見た？」

「見た」

水川の展覧会でひととき目立った作品があった。

「目覚め」という凜一をモデルにした油絵だ。その絵がこの教会の壁に飾つてある。

「この教会はこの学院出身者の色々な作品を展示する空間を作るため、側廊を二重にしてるんだ。水川君の絵は鳴海先生のたつての希望だったから、一番目立つところに展示したんだよ」

「だからって…今更ふたりを認めるつもりなのか？」

「おまえが怒る事かよ」

「…」

「心配してくれてありがとう、紫乃」

「心配してるわけじゃない。ただ俺は…」

慧一は俺の腕を取り、教会の影へと導いた。

「ほら、あのウリエルを見たか？」

教会の尖塔には、以前と変わらずにウリエルのブロンズ像が建っている。

前とは違って新しく仕立てた像は剣を振りかざすのではなく、中央の花壇にあるヨハネ像に目をむけ手をかざしている。

「あれは、俺のボスでパトリック・ネヴィルという芸術家が凜一をモデルにして創ったんだ。ネヴィルは凜を天使と呼んでいるからね」

「ロクでもねえ」

「よく見るとあのウリエルはどことなく凜に似ている」

「そのうち天雷でも落ちるんじゃないか」

「それはありえる話だよ。あれは避雷針も兼ねてるから」

慧一の言葉にお互い顔を見合わせて笑った。

「凜のことはあまり気に病むな。あれは誰がどう言おうと自分の好

きに生きていく者だ。それに…俺自身にも迷いは無いんだよ。凜を愛し続けることが俺の幸せだと知っているからね」

「凜一は横暴だ。もう子供じゃないんだ。おまえの身になってもいいだろう」

「紫乃、本当の恋をする者に、恋をすると言うのか？俺の他は誰も好きになるなと縛るのか？人の恋路を邪魔するものは…だろ？」

「だからって」

「…愛しているからこそ許せるんだよ」

「許せる？」

「…凜が言っただ。これからも水川さんと永遠の恋を続けていくだろうって。純愛と名づけたそれは、綺麗な恋物語を綴っていくだろう…って。俺もその過程を結末を見つめていたいと思うようになった。凜は決して俺を裏切らないし、俺の傍を離れる事はない。…愛しあっている。…そして凜の想いは自由だ」

「それをも許すのか？」

「ああ、そうだよ」

「俺にはわからねえな」

「紫乃は充分にわかってるさ。…今でも俺を愛しているだろう？」

「な、ん…」

「だけどそれはノスタルジーだな。俺は紫乃の優しさが好きだよ。幸せになって欲しい。恋人が出来たからって俺への想いを捨てなくてもいいさ。俺を好きなままでもいいから、恋をしろよ」

「…兄弟揃ってうぬぼれも格別だな」

「そういう星の元に生まれついたんだろう」

「恋か…」

「ああ、そうだよ、紫乃。折角の美貌だ。分別臭いおっさんにはなるなよ」

「その言葉、そっくりおまえに返すよ」

太陽は頂上にあり、おしみなく光を授ける。

すべてを受け取るのは容易ではない。

光を受ける逆の面は必ず影があるということだ。
慧一の言うノスタルジーとは、この影のことかも知れない。

九月、新学期が始まった。

二年を受け持つている俺は、二学期は大きな行事は体育祭ぐらいで、比較的余裕がある。

国語準備室で数人の教師と談話していたら、教頭がやってきた。

「藤宮先生、この間話していた教育実習生を紹介するよ」

「あ、はい」

そついやそんなことを言ってたな。

毎年、2、3人程、この学院でも教育実習生を受け入れている。
ほとんどがこの学院の卒業生か、付属大学からの学生だ。

「聖ヨハネ学院大学からの実習生だ。千葉君、お入りなさい」

…チバ

嫌な予感しかない。

戸が開けられ、覚えのある背格好と爽やかな笑顔を持った男が現れた。

「初めまして、千葉啓介です。よろしくお願いし……し……のお……？」
にこやかに笑う顔が、俺を見て、目が点になる。ポカンと開いた口が、言葉を失った。

まさにめぐり合う魂だ…

これが天啓というのか？

これが天の定めた運命の相手なのか？

俺はこいつを選ばなきゃならないのか？

俺はこいつと恋をするのか？

胸に手を当てた。

ときめきを示す動悸など一切ない。

…無理なんじゃね？

俺は苦笑いをする。

なあ、慧一、俺、まだしばらくノスタルジーに引き籠もっていて
もいいか？

> i 1 7 4 0 2 — 2 7 3 <

4（前書き）

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i /

4、
目を丸くしてこつちを見ていた千葉啓介が、やっとこの世に帰ってきたらしく、につこりと笑いかける。

今度はこちらが引きつる番なのか…

そんな馴れ合いなど一切知らぬ人の良い教頭が、機嫌よく先を続ける。

「千葉君、明日から藤宮先生の指導の下、クラス担当教務に参加してください。今日は挨拶がてら、学校内をひととおり見学するといいですよ。なにか質問はありますか？」

「いえ、ありません。あの、一生懸命頑張りますっ！」

「では、藤宮先生、千葉君の指導等よろしく頼みます。今日は午前中で校務も終わりですから、先生に学校案内を頼んでもよろしいですか？」

駄目だと言つてもすでに決まっている話だ。ここは事なかれ主義でいかせてもらおう。

「…わかりました」

「では、よろしく願います」

「ありがとうございますっ！」

準備室から出て行く教頭を、いかにも体育会系らしい深々とお辞儀で見送る千葉啓介だった。

ガタンと戸が閉まるとそいつは俺の方を向き、爽やかな笑顔を見せた。

畏れるな。たかが二十二のガキじゃないか。一度寝た位で怯む事でもない。

どんな修羅場も切り抜けてきた俺だろ？

平常心で付き合えばいい。

「藤宮先生。ふつつか者ですが、どうぞよろしく願いますっ！」
準備室に響きわたる声に、周りの先生の笑う声が漏れる。

少々呆れるが、こういう実習生は今までも何人か居たし、別段彼が変わっているわけでもない。暗い奴より幾分能天気の方が、こういう職業には合っている。

「じゃあ、千葉先生。こちらの机を使って下さい」

俺は空いてる右隣りの机を示し、彼を誘導した。

千葉啓介は「はいっ！」と、元氣良く返事をし、一礼をして椅子に座った。

「ここの引き出しも好きに使って良いから。何かわからないことがあったら、遠慮なく聞いてください」

「はいっ！」

そう言つて引き出しを開けようと屈んだ千葉は、俺の右腕を引き寄せた。思わず俺の身体が右に寄れる。

屈んだ千葉が俺の耳元に囁く。

「こんなところであなたに会えるなんてさ。これって運命の赤い糸っていう奴？」

「…残念だが、その糸はこちらから切つておいた」

「じゃあ、また結びなおしておくよ。俺、こう見えても裁縫得意なんだ」

「…」

ジロリと顔を睨んだが、意に介さず微笑を称えたまま俺を見る。

そんな顔に騙されるかよ。

「用意が出来たら、構内を案内しよう」

「はいっ！よろしく願いますっ！」

「…」

握られた手をわざと鋭く振りほどいたが、奴は顔色ひとつ変えな
いまだ。

まったくもって、今の若者は裏表が激しすぎて、ムカつく。

これ以上ややこしい奴との付き合いはゴメンこうむる。
それだけでなく俺の回りにはトラブルメーカーが多いんだから。

次の日から、教育実習生千葉啓介の本格的な指導が始まった。

実習期間はひと月半もあり、指導教師はその実習生の教師としての適正能力を見極めるという重要な責任を負うことになる。教職課程を受けたすべての学生が教師になることは少ないが、この聖ヨハネ学院大学からの教員採用試験の合格者は多い。

千葉啓介も当然大学の教育学部である。教科は国語、地理歴史を専門にしているが、今回は主に世界史を受け持つ。

教科が違つとそれだけ顔を合わせる時間も少ないから、こつちとして気が楽になる。

たとえあの一夜が遊びといえど、肌を交わしたことはないのだから。

千葉啓介は教師として遜色のない優秀な人材だった。

明るさや物怖じしない人懐っこさは生徒達への交流を意図も簡単にクリアしたし、若さと清潔さが教師達の好感を持って受け入れられた。

何よりも聡明であり、生徒ひとりひとりへの判断が的確に行われていることに目を見張った。

「まるで先生になる為に生まれてきたみたいだな。俺なんかよりよっぽど先生らしいよ」

お世辞ではなく本音を言うと、千葉は照れながらもキリツと俺の方を向き「紫乃先生から褒められるなら、俺、もっともつと頑張りますっ!」と、姿勢を正すのだ。

そうかと言え、ふたりだけになった途端、雰囲気 がらつと変わるからこちらが抜けない。

「紫乃…ふたりの時はそう呼んでいい?」

生徒にだつて呼び捨てにされることも多いんだから、呼び方に拘りは持っていない。

「構わないよ」

昼休み時、いつものように注文した弁当を食べていると、隣で焼きソバパンにかぶりついている千葉は、不満そうな顔をする。

「やっぱり昼飯は自前で作ろうかなあ」

「え？」

「俺、料理するの好きなんです。いつも自炊してるし…あ、そうだ。紫乃先生の分も明日から俺が作ってやるから、弁当頼まなくていいよ」

「別に俺は市販の弁当に不満はない」

「だって愛情がこもってないじゃん。俺の愛情たっぷりの手作り弁当を紫乃先生に食べさせてやりたい」

「いや…結構なんだ…」

「よし！図書館に行って料理本借りて、メニュー考えてこ」

残りのパンを口にほおり込んだと思うと、立ち上がって突風のよう準備室から出て行った。

周りの先生方も一緒に、その背中を見送った。

「千葉先生を見ると、何故だか元気が出ますなあ」

「あれが今時の弁当男子って言うものですかね。藤宮先生、好かれて結構なことじゃないですか」

「…はあ」

千葉のような一途な奴も今までに居なくはない。

いわんや生徒達からの俺へのアプローチは思春期も兼ねてか、むちゃくちゃ激しいものがある。

「先生好きなんです。付き合ってください」は可愛いうち。

「抱いてくれなきゃ死んじゃう」や、マンションの玄関先で何度もインターホンを鳴らし「一晩だけでいいんです。思い出を下さい」とか…ストーリーめいたものも何回もあった。その度に警察や親や

学校に頼んで生徒を説得し諦めてもらったんだ。

そんな彼らでも卒業してしまえば、俺はただの過去の人、甘酸っぱい過去の思い出になってしまうんだから、青春ってマジで一過性の性の爆発なんだろう。

結局、いくらなだめても赤いコードは切れてしまうわけだ…

次の日から、俺の昼飯は千葉啓介特製の手作り弁当になった。

千葉は学校から五分とかからないとヨハネの学生寮を寄宿舎としている。

食堂をオバサンともすつかり仲良くなって、料理も色々と教えてもらっているらしい。

確かに栄養のバランスもいいし、彩りも申し分ない。だけど、俺は弁当に何かを求めてもいないぞ。

「紫乃先生、卵焼き美味しい?」「…甘い。卵焼きはダシのほうがい」「…そっか…うちの家は昔から砂糖味だったからなあ。紫乃はダシ派か。じゃあ、明日からはそっちでいくよ。里芋の煮つ転がしはどう?」「…普通」「普通って?」「普通は普通だろ」「なんだよ。素直に美味しいって言えば良いのにさあ…紫乃ってツンデレ?」「おい、俺のどこがデレているのか教えて欲しいもんだ」「だって…ベッドではデレてた…」「おまつ!」「大丈夫だって。誰も居ないから聞こえてません。紫乃ってホント純情なんだから」「…」「まあ、そこが大好きなんだけど…。あ、明日は唐揚げ作るっ」

なんか違う…なんでこうなるんだ…わけがわからん。

千葉啓介は、変わった男じゃない。むしろ純真であり、且つ一般常識も身に着けている上出来の学生だ。

彼がゲイであっても、俺に関わってあの子が得をすることなんてひとつもないはずだ。

若い好奇心をくすぐるちょっと珍しい年上のゲイと遊びたいだけ

なのだろう。とても本気とは思えない。

少しだけ甘い蜜を啜って、ひと月後には、この閉ざされた楽園から自由に旅立つのだ。

放課後、夏の日差しが和らいだのを見計らって校舎の屋上で一服していると、千葉がやってくる。

「今日は部活は無いから、暇ですね」

「そうだな」

実習生は部活の指導も経験する。千葉は俺が顧問する『詩人の会』を選び、生徒と同じように詩を読んだり、作ったりしていた。

「部活は面白いかな？」

「詩なんて作ったの、中学生以来？でも面白いよ。面と向かって言えない事も、詩でなら相手に伝えられる。」

『風に吹かれる葦のように私の心は震えている、おまえの美しい精悍な腕で、私の身体を抱いてくれ…ただ抱き締めてくれ…』

朔太郎の詩だ。

「…大事な言葉を抜かしやがったな」

「え？」

「『女よ』…だ」

「そうだったかな？じゃあ、そこは『紫乃よ』に変えるよ。そして紫乃は俺に言うんだ。『良い子よ、恐れるな、なにものをも恐れなさるな、あなたは健康で幸福だ…』」

「そう言っただけなのかな？」

「…」

「言わなくてもおまえは十分健康で幸福者に見えるよ」

「そうなりたいたと、願っているからだよ」

そう言っただけ、千葉啓介は反対側の柵の方へ歩いていく。

その背中を見つめながら、お前ほど心根の健康な奴は居ないと思

うよと笑う。

5 (前書き)

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i

5、
「こちらから見ると学校全体が良く見えて綺麗だね」

柵に寄りかかった千葉の隣に近づき、運動場から体育館、教会に繋がる景色を眺めた。

「ああ、そうだな」

「ここの教会も体育館もなんかすごくかつこよくて立派だし、高校って感じしないよね。俺の母校とはえらく違つてて、やっぱり都会だなあゝって思った」

教育実習生は自分の母校へ実習へ行くのが普通だが、千葉啓介はこの学院の卒業生ではない。

「千葉は確か…北海道だったよな」

「うん、札幌。つて言っても岩見沢に近いから田舎だよ」

「北海道は高校の修学旅行で行ったつきりだな。スキー旅行だったから、銀世界の景色しか記憶にないけど」

「そうだね。まあ、雪ばっかりだし」

「じゃあ、千葉もスキーは得意なんだろうな」

「…もう、飽きたかなゝ物覚えがついた頃からずっと滑つてたから、今は滑りたいとも思わない」

「そういうもんかなゝ」

「そういうもんよ。それよりさ、あの教会つて建つたばかりだろ？」

「ああ」

「新築したばかりのものつてどこか、緊張するっていうか…建物もこちらの方も人見知りする気がするけど、あの教会つてびっくりするほど、こちらを受け入れるんだよね。最初見て、中に入った時、なんか暖かい隠れ家に招かれた気がして…俺、教会つてあまり知らないけど、こんな感じは初めてだったんで驚いたよ。よほどの感性の人が作つたんだろうねゝ」

「…」

そいつは才能も見た目の神に愛されているが、性格は悪魔だぞ。あの悪魔が感性であれを作ったとすれば、本物の悪魔もあいうものを密かに欲しがっているのだろう…と、俺はあの教会へ行く度にそう感じてしまう。

「それに体育館も同じ感覚があった。周りの風景と溶け合っているっていうか…同じ人がデザインしたの？」

「違うけど…」

違うがロクでもねえ兄弟だ。

「なんかねえ、ここ、俺の知ってる世界とまるで違って…平和って言うかさ。守られてる気がするよね」

「ミッシヨンだから、神様のテリトリーにあるんだろうよ」

「男子校でもみんな綺麗で素直で良い子ばかりだろ？まさかゲイの巣窟じゃないよね」

「当たり前だ。そういう奴が居ないわけじゃないが、殆どはまっとうな…そうでもないかな」

苦笑いをする。

「紫乃なんか生徒達にモテて引く手あまた？」

「モテたって、本気になるわけないだろ？お山の大将がいい所」

「そうかなあ…本気で紫乃の事好きな奴だって沢山居るはずだと思うけど…」

「だからってそいつらの好意を全部受け入れるわけにはいかないだろう？」

「…俺、紫乃の事、本気で好きだよ」

俺を見つめるその目にいつわりが無いとは思えるけれど…まともじゃない。この空間が生み出す魔法でしかない。

「この学校の規則知ってるか？」

「え？」

「教師と生徒、教師同士の恋愛はご法度だ」

「へー、生徒と恋愛するのは駄目ってのはわかるけど、なんで教師同士で駄目なんだよ」

「…男性教師しか居ないから」

「あ、そう…で、ホモの教師は紫乃だけじゃないだろ？」

「さあ、表面上は何も無いさ。仮にもキリスト教を学ぶ場所だからな。だが、もし生徒と恋愛しても生徒が卒業すれば規則に縛られない。その後くつついたという話は珍しくはない」

「紫乃は？そういう生徒…いた？」

「こちらから生徒には手を出さない。俺も職を失いたくないんでね」

「そう…、じゃあ、学校以外で付き合っている人はいるの？」

「今はフリーかって聞いているのか？」

「そうだよ」

「ずっとフリーだよ」

「けい…いちっていう人は？…紫乃の恋人だろ？それとも振られたの？片思い？」

「しつこいな。それをおまえに話す必要があるのか？」

「あるよ。だって紫乃は最初、俺をその男と間違えたんだから。俺とセックスしている間、あんたは俺を『けいいち』って呼び続けた」

「…」

「聞く権利、あるよね？」

「その件は謝ったつもりだったけどな」

「3万円貰って忘れろって？」

「…」

「じゃあ、返すよ」

そう言って、千葉は財布を取り出して三万円を差し出した。受け取らない俺の手を取り無理矢理握らせる。

「俺は忘れたくないからね。あんたと寝たのも、『けいいち』っていう男に間違えられたのも、大切な事実だよ」

「金を…出したのは悪気があったわけじゃない。酔っ払った俺が悪いと思ったからだ。千葉に嫌な思いをさせたのなら謝る」

「啓介って呼べよ。それとも『けいいち』って人を思い出すから、呼ぶのに躊躇いがあるの？」

「け、いいちは…俺の昔の恋人だった奴だが…今はいい友人だ。それだけだ」

「…じゃあ、俺の事、啓介って呼べるよね」

「なんでそこに拘るんだよ」

「紫乃が…俺をケイって呼んだ時…俺、すごい感じたの。この人が好きだ。この人を抱きたいって、すげえ思った。だから呼んでもらいたい」

「…」

あまりに単純すぎて思わず、笑ってしまった。

「お、おかしいか？」

「じゃあ、余計に啓介とは呼べまい。仕事中に卑猥な妄想されても困る」

「…」

顔を赤らめてそっぽを向く様が、ますますガキで可愛く思えた。

「でも、ふたりの時は啓介って呼んでやるよ。それでいいだろう？」

「！ホント？」

「だからってその気になってもらっても困る。俺たちは恋人でも何でもない。実習生と指導教師だ」

「たったひと月の間だろ？それからは…俺はここには関係ないもの。自由に紫乃を愛せるよね」

「…ああ、そうだね」

ひと月経てば、きつとおまえも気が付くさ。

ここは閉ざされた楽園。外へ出ればここであつた事なんか忘れてしまつて事を。

昼食時の千葉の手作り弁当は、記録を更新し続けた。

「ねえ、今日の蓮根のきんぴらどう？」

「…普通」

「紫乃先生の普通は美味いってことだから、合格だね」
無駄に声が弾んでいる。

「紫乃先生はいい実習生をもって幸せだなあ〜うらやましいよ」

「おいおい、周りの教師達のいいネタにされてるぞ〜」

「…げっそりだ。」

「千葉先生、僕らにも手作り弁当お願いしますよ」

「それは、無理です」

「おい、即答かいつ！少しは躊躇してみせろよ。」

「でも、今度クッキー作りますから、先生方にもおすそわけしますね」

「そりゃ楽しみだ」

和気藹々とはこのことだろう。千葉がいると周りの空気が和む。

「こんにちは〜」

準備室の戸が開けられると共に、聞きなれた声が弾む。

「おお、宿禰くんか」

「目の保養が来たな〜」

「また口が上手いなあ〜。はい、これおみやげです。皆さんでどうぞ」

菓子箱を一番年上の教師に渡して、にこやかに愛嬌をふりまく。
周りの教師に媚を売ることも怠らない奴の性格がうらめしい。

「よう、紫乃。お土産だよ」
手渡された箱を見る。

「…なんで『ちんすこう』なんだよ」

「沖縄行ったから」

「一昨日、ニューヨークから帰国するとはメールで聞いてたけどな」
「そうだよ。成田からそのまま沖縄まで行ってお仕事だったの。ん

で、さつき帰ってきてここへ直行。それよりさ、美味そうな弁当食ってるなあ〜どれ」

許可も得ないまま、俺の弁当箱からきんぴらをつまんで食べやがった。

「なかなか美味いじゃん。…へ？これもしかして手作り？」

「…」

「紫乃先生の昼食は実習生の愛情弁当なんだよ」

お土産を広げている教師達が、ご機嫌な顔でいらぬことを口走る。

「へえ〜そうなんだ」

まったくもっていい迷惑。ほら、こいつの目が輝きだしたじゃねえか。

凜一は俺から隣りの千葉啓介の方へ視線を移した。

「こんにちは。宿禰凜一です」

凜一は例のごとく、首をかしげ千葉にあざとい微笑を向ける。

「…」

千葉は硬直したかのように目をぱちくりとしたまま動かない。

「…おい、千葉？大丈夫か？」

「…あ、…はい。あ！すいません。え、え〜と、こんにちはです。

初めまして、千葉、啓介と申します」

いきなり席を立て、直立不動のまま凜一に向かってお辞儀をする。

「千葉…けいすけ？ふ〜ん」

凜一は、固まった千葉に近づき、頭からつま先まで舐めるようにひととおり眺めると、ニコリと笑う。

「千葉君、いくつ？」

「あ、はい。に、じゅう、に、才です」

「そっか、若いね〜ちよつとハグさせてね」

「え…ええ？」

驚いている千葉にも構わずに、凜一は千葉を思い切り抱き締め、そしてその感触を確かめると満足したように千葉から離れた。

千葉は倒れそうなくらい真っ青になっている。

さすがに気の毒になって、座るように促した。

「凜一、免疫のない奴におまへの挨拶はセクハラなんだよ。少しは手加減しろ」

「へえ、啓介くんってウブなんだね。体格も好みだし、気に入ったよ」

そう言いつつ、不敵に笑う凜一は、椅子に座ったまま顔をあげる
ことができない千葉を執拗に見つめ続けている。

これ以上、千葉がメドウスサの魔力に取り付かれたままになって
も困る。

俺は、凜一の腕を引っ張り、準備室から出た。

6 (前書き)

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i

6、

「おまえ何しに来たんだ」

廊下を歩きながら凜一に問う。

昼休みの午後、運悪く凜一の姿を見た生徒達は、悉くじつじつ赤い顔をして深々とお辞儀をする。

「何って、メンテナンスに決まっているだろう。新しい建物は、地に馴染むまでは細かく点検と手入れをしなければならぬからね。自分の建てたものは、俺自身の目でキチンと見直しておきたいんだ」

「ひとりでか？」

「そうだよ。本当は体育館は慧一が見るのがいいんだが、あっちも手一杯でね」

『あっち』とはニューヨークの事務所のことだ。スタッフの人数を増やしたとは言え、仕事の大方を慧一と凜一のふたりで荷っている。決まった休日など殆ど取れないと、慧一も漏らしていた。

「ふたりとも仕事のし過ぎなんじゃないか？身体を壊しては元も子もないぞ」

「俺はおっさんじゃねえんだから心配ねえよ。元より、慧一は35になるんだから、そろそろこれにもメンテが必要かな」

大事なパートナーにさえ、にべもない。人事とはいえ気に病んでしまうのは、やっぱり歳の所為か。

俺は頭の片隅にあつたわだかまりを確かめたくて、凜一に問う。

「おまえ、この間の竣工式の時、水川青弥と仲良さそうに話していたよな」

「あん？」

「まさか本当にヨリを戻したわけじゃないだろうな」

渡り廊下の手前、午後の日差しが厳しい。それから隠れるように

庇のある影へ身を移した。

「なんで？」

立ち止まった凜一は腑に落ちない顔を向ける。

「去年のクリスマスの時、ミナの美術展を見に行けって言ったのは、他ならぬあんただったよな。その所為でっ！俺たちがヨリを戻したと言ったら、あんたは責任を感じて、慧に許しを請うのか？」

「……」

確かに俺はあの夜、鳶谷さんの店で凜一に会い、水川の展覧会を観に行けとけしかけた。翌々日、この学院へふたりは揃って顔を見せ、にこやかに微笑んでいた。

俺はその時、どう思った？

…この学院を卒業して、ふたりが離れ離れになり、そのまま別れたと知った。

これで慧一の気持ちが変わって落ち着くだろうと、俺はそれを喜んでいて。だが、一方であれほどの仲だった凜一と水川の絆がこうも簡単に切れてしまうのかと、残念にも思った。

…いや、どこかで信じたかったのかもしれない。

この学院で生まれ育った「恋」の行方が、また結びつく事を…。同時にそれは慧一を傷つけることにもなる。

俺の本性の深いところで未だに慧一への遺恨が燦々しているとは、考えたくない。

だが微塵もないとは言いきれないところかもどかしい。

「慧一は…凜一、おまえに関してはこちらが呆れるほどに寛大だよ。だけど俺は…おまえが俺を家族のひとりとして認めてくれるなら…俺は兄として忠告するよ。慧一を不安にするな」

「慧一が不安？ミナと俺の仲を気を揉んで？不安なのはあんただろう。慧一は納得しているよ。俺がミナを愛している事を」

「……」

「…もしあんたの望みとおりに俺とミナの関係を無しにしたいのなら」

ら、ミナの存在を、もしくは俺をこの世から消さなきゃならなくなるな」

凜一の潔さは呆れるくらいだが、この件に関してはまっとうな正論だ。俺は何も言えない。

「この世に愛し合ったふたりつきりで生きていくとして、不安が無いといえるのか？不安という感情は人間であれば誰だだって持っているだろう。俺がミナと付き合っているとしても、俺が慧一を愛していることに翳りはない。俺と慧一の絆がそうである限り、俺達は揺るぎはしない。ミナは…アレだ。TVの中のスターに恋するようなもの」

「TVの中の奴とは普通は寝ないものだがな」

「慧一以外とセックスするのが、紫乃兄ちゃんはそんなに気に入らないのか。こりゃ敬虔な修道士だな。この学院に居すぎて宗旨替えしたのか？」

「ふざけるな。俺は…」

「慧一の為…だろ？」

こつこつと衣着せぬところが憎ったらしい事この上ない。

「今もあんたには慧一が第一。一番愛しい人。だけど、慧一には俺しかない」

「おまえほどの自尊心を持った奴を愛した慧一を哀れんでるだけだ。慧一だけじゃ飽き足らなくて、水川とも本物の恋をするという。おまえは慧一の愛情の上に胡坐を？いているとは思わないのか？」

「まったく思わないね。つまり俺は光みたいなもんだ」

そう言つて、凜一は影から陽の当たる場所へ進んだ。光を背に受けた凜一の輪郭が白く輝く。

「太陽は人を選んで光を注ぐか？俺はね、できればだ、俺を乞うすべてのものに光を与えたいと思う」

「おまえはキリストか？」

「まさか、あんなボランティアスキュになろうとも思わないけどね。俺はちゃんと選んでいるだろ？ファウストとグレートヒュンを。即ち慧一とミナを」

「…」

「メフィストフェレスに愛されたふたりはどうなった？…天国に行ったじゃないか。大団円だ」

「高慢な悪魔め…」

「悪魔と天使は非常に良く似ているっていう学説が常識になりつつある」

「適当なことを言いやがる」

「俺のことはどうでもいいがおっさん、自分の救いを考えろよ。俺はあんたには手出しはしないんだからな。自分で契約を取り交わせよ」

「言ってる意味がよくわからん」

「シラを切るな。あれだろ？この間、紫乃が寝た相手って」

「え…」

なんつー勘の良さ。だからこいつは侮れない。って感心している場合か！

「なんで、そう思う？」

「キーワードはいくつかあるよね。千葉、けい、すけ。慧一に良く似た体格。たまたまここの教育実習生だった事。そして紫乃が指導役だった…」

「それだけじゃ決め手にはならんよ」

「じゃあ、俺の予言だよ。紫乃はあの千葉啓介とくつつく」

「…おまえの予言なんて恐ろしすぎて、絶対背きたいものだ」

「俺は紫乃の幸せを願ってやまないんだぜ？お兄ちゃん。千葉啓介、俺も気に入った。あいつを選べよ」

「…簡単に言うな。俺の運命がそうであっても、選ぶのは俺だ」

「勿論だよ。俺はオブザーバーでしかない。だから勝手に言うだけだ。千葉啓介は紫乃の運命の相手だって、さ」

上目遣いに俺を見つめ（凜一の方が上背があるのにも関わらず）、口端だけを軽く上げる癖。

見慣れた俺でさえ、見惚れる程艶やかな顔をする。

「ミナとはあんたが想像するような恨めしい事は残念ながら無いよ。こっちにその気があっても、向こうは今あるパートナーを氣遣ってキスさえさせてはくれない。律儀で貞節。自分のものだったら有り難いが、人のものだところも口惜しい。紫乃、適当な恋歌でも教えてくれよ。ミナに贈り付けてやる」

少しだけ考えて、百人一首の和歌を詠んだ。

「…今はただ 想い耐えなむ とばかりを 人づてならで いうよしもがな」

（私はあなたことは諦めます。忘れます。でもそのことをあなたに直接会って伝えたい、人づてではなく、私の口から）

「まあ、俺も諦めの悪い男だが、紫乃には負けるよ。その和歌、慧に贈っておく」

「ヤメロ、人聞きの悪い」

「…紫乃、あんたはいい兄貴だ。幸せになれ」

そうして、凜一は俺の頬に軽いキスを残し、渡り廊下を飛ぶように走り去って行く。

…慧一と同じ言葉を吐いて。

国語準備室へ戻ったが、啓介の姿は無かった。

「千葉、先生は？」

他の教師に居所を尋ねる。次の授業の準備の為に社会科準備室へ行ったのだと聞かされた。

凜一との関係を誤解されなかっただろうか。

後でいくらでも説明できたはずなのだが、なぜか一時も早く千葉啓介に話しておきたかった。

宿禰凜一、奴には絶対近づくな、と。

7 (前書き)

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i

7、

午後の授業も終わり、ホーミルムの後、職員室へ向かう。

あれから啓介とは顔は合わせたけれど、指導上の話だけで、凜一のことは話せずにいた。

学年の職員会が終わり、いつものように準備室へと引きこもりうとすると、教頭が呼ぶ。

「この後、実習生の中間報告会を校長を交えて行いますから、よろしく願います」

「はい、わかりました」

「あれ？千葉先生は？」

「ああ、きつと準備室でしょう。呼んできます」

実習生は千葉啓介の他にふたり居る。

三人のこれまでの実習を指導教員の意見を交えて成果や反省をそれぞれに発表することになっている。大事な会議だ。

啓介呼びに準備室へ行くが姿は無かった。他の教師に千葉の居所を尋ねても、首を振るばかり。

「連絡はしていたはずだから、わかっているだろうに。こんな時にどこに行きやがった」

思いつくままに校舎の屋上へ足を運んだ。

柵に凭れて校庭を眺めている啓介の姿を見つけ、ほっと息を吐き、近寄った。

「千葉先生。実習成果の報告会の時間だ。遅れないように言っただけだろ？」

「あ……すいません。すっかり忘れてた」

「おいおい……」

頭を？きながら詫びる何の裏もない笑顔に、俺も釣られてしまった。

「何をそんなに真剣に見ているんだ？」

「あ、あれですよ」

啓介が指差す方向には…凜一の姿が小さく見えた。

体育館の外側の壁を双眼鏡で覗きながら、細部をカメラで撮り、手元のモバイルに何かを書き込んでいる。

その一連の動作を、少しずつ歩を進めながら繰り返す。

「…ずっとああやっているですよ、あの人…宿禰さん」

「それが仕事だからな」

「あの人があ教会を設計したって聞きました。俺とあんまり変わらない歳なのに、凄いとしか言いようがない」

「ああ見えても凜一は26だよ。確かに歳の割に際立った才能と技量を持っているけれど、あいつは人には見せない努力も半端ないからな」

「あんなに柔らかい雰囲気教会からは、想像もできなかったなあ」。まさに容姿端麗、眉目秀麗…いくら美辞麗句を並べても見劣りしないんだもん」

「プラス才色兼備だろ。しかし、性格が最悪、唯我独尊を地で行く」

「あの容姿じゃあ、誰でも自尊心は高くなるに決まってるよ。紫乃は凄いね」

「何が？」

「平気な風に話すんだもん」

「当たり前だ。教え子だよ。あの顔も見慣れりや別にいちいち感服する必要もない。あいつはああ見えて、人懐っこいしな」

「…紫乃はあの人を好きなんでしょ？」

こちらを向いた啓介の顔に嫉妬心は見えなかった。だから俺も正直に言おうと思った。

「ああ、凜一が好きだよ。あいつは確かに俺が担任した優秀な教え

子だし、それ以上に、家族みたいなものだ」

「宿禰さんのお兄さんが体育館のデザインをしたんだよね…紫乃の友人でもあるその人の名前は宿禰慧一さん…」

「…」

ドキリとする。別に後ろめたい気にならなくてもいいはずなんだが。

「紫乃の大事な人って、あの人のお兄さんなんだ…って、思ったらさ。なんか納得したよ」

「なにが？」

「紫乃がいつまでもその『慧一』って人に拘るわけ。弟があれじゃあ、お兄さんはもつと凄いんだろっね」

「そうでもないさ。凜一よりは人間に近いよ」

「そうか？じゃあ、俺も頑張れば脈ありって思っている？」

迷わずに言い放つ無邪気な言葉は、俺に風穴を開ける。心地良い風だ。

この子の影を俺は見つけることが出来ない。

「そっぴや、教会の絵に宿禰さんに良く似た天使の絵が飾られてた」
「あれはこの卒業生の画家が、凜一をモデルに描いた絵だよ。だから真正銘、凜一の姿だ」

「だからかあ。最初宿禰さんを見たとき、あの絵から抜け出して俺にお告げを下しに来たのかと思った」

「何のだよ」

「千葉啓介よ、汝はこの藤宮紫乃を永遠の恋人として、愛せよ…ってね」

徹かに芝居めいた口調で言う啓介に、苦笑する。

「おまえ…凜一以上にうぬぼれが過ぎる」

「そっかなあ。でも本音だよ」

「…」

こついつさらつと言つ言葉の強さがこいつにはある。俺はそれに逆らえない。と言つか快い気持ちさえ沸いて来るから始末が悪い。

「そろそろ校長室に行かなきゃ間に合わなくなるぞ」

肝心の事項をこちらが忘れそうになった。踵を返し、屋上の扉へ向かった。

「ね、紫乃」

ドアに向かって歩く俺に、後ろから啓介が声をかける。

啓介の背中によろど夕日が重なって、眩しさに表情は見えなかった。

「なんだ？」

「明日は天気良さそうだから…俺と一緒に出かけないか？」

明日は第二土曜日で、学校も休みだ。別段俺も用はない。

「ああ、別に構わないが」

「ホント？マジで？よっしゃー！」

啓介は急に走り出し、一メートルほどジャンプした…ように見えた。

「めっちゃ嬉しいーっ！じゃあ、俺、弁当作って、車で迎えに行くから、楽しみにしててよね」

「車、持つてるのか？」

「勿論だよ、デートするのに車がないと堂々とラブホに入れないじゃん」

「…」

さすが今の若者…

その後の会議でも啓介のノリは半端なく、他のふたりを圧倒して独壇場だった。

ただ帰り際、啓介が俺に言った言葉だけが気がかりだった。

「七時に迎えに行くからね。デートだからって恰好はつけないで身軽な服装でお願いします。出来れば靴もスニーカーで風除けのウィンドブレーカーもあればいいかも」

「…」

山登りか、はたまたトレジャーハンターごっこでもやるのかしら…と、俺は頭を傾げた。

言われたとおり翌朝七時にエントランスで待っていたら、啓介が車から手を振る。

赤のSUV、RAV4は、啓介に似合っていた。

助手席に乗り込むと、紙袋とペットボトルのお茶を持たされた。スムーズな運転で、まだ車の少ない県道を南下していく。

「目的地には3時間はかかるから、ゆっくりしててよ。眠かったら寝ててもいいよ」

「俺が寝てたらデートの意味はないんじゃないのか？」

「まあ、そうだけど…」

「ドライブだったら、俺のスポーツカーの方がスピードが出るし、シートも上等だ」

「じゃあ、次は紫乃の車に乗せてもらうよ。それより朝早かったから朝食はまだでしょ？」

「ああ、コーヒーだけだ」

「さっき渡した袋に、おにぎりやサラダ巻きが入っているから食べてください。朝御飯抜きじゃ体力がもたないから」

「体力が必要なデートコースなのか？」

「うん。今日は天気もいいし、風もおだやかだから、飛べると思うんだ」

「飛べる？」

「うん、あ、紫乃、高所恐怖症じゃないよね」

「ああ、それは平気だが…飛ぶってどういうことだ」

「パラだよ。きつと紫乃も気に入ると思うよ」

「パラ？」

「パラグライダー。聞いたことくらいあるだろ？」

「あの？…空を飛ぶ？」

そりゃテレビで見たことぐらいはあるけれど。

「啓介はそれをやれるのか？」

「そうだよ。今は気軽にやれるスカイスポーツだし、そんなに珍しいもんじゃないよ。俺も、大学のサークルで始めたんだし」

そんなのをうちの大学のサークルはやっているのか…侮れんわ。

「それで…俺も、出来るのか？」

「え？」

「飛べるのかって聞いているの」

「勿論だよ。その為に一緒に付き合ってもらってるじゃない」

「…」

「何？気に入らなかった？」

「いや…何だか期待に胸が膨らむとはこういうことだと…ワクワクしてきた…」

「…紫乃、そんな顔するな。あんまりかわいくてここで押し倒しそうになるじゃんか」

「いや、無事に目的地まで連れて行ってくれ。そうじゃなきゃ、おまえとの付き合いはこれきりにする」

「なんだよ、俺よりもパラの方に夢中になりそうじゃん。とにかく体力がいるから、しっかり食っててよ」

啓介への返事も曖昧に、俺は期待感で一杯になった腹におにぎりを無理矢理詰め込んだ。

サンルーフから覗く空はただ青い。

あの空を飛べるのかと思うと、嬉しさのあまり顔が綻んでどうしようもない。

とても生徒や凜一たちには見せられたもんじゃなかった。

> i 1 9 0 3 2 — 2 7 3 <

8 (前書き)

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i

8、
富士山近くのフライトエリアまでのドライブの間、俺は啓介から出来るだけ詳しくパラグライダーについて学んだ。

早くに言ってくれば、前もって資料や本で勉強できたのにと文句を言くと、啓介は「それじゃあ、俺の出る幕はなくなるじゃん。いつも紫乃の指導されてるから、俺が教えてあげる気分を味わいたかったの」と、意地を張る。

そういう幼いところが、なんとも恋愛をしている気分にはならないのだが、それを言うとまたつむじを曲げそうだったのでやめておいた。

「じゃあ、今日は帰る」と、言われたら元も子もない。
恋する相手には、まだまだ程遠い気がする。

ワンツーマンでの講習を受けている間に目的地へ付き、スクールで受付と説明を聞いた。

その後、簡単なレクチャーを受け、離陸場に向かう手はずとなる。まずは体験から始めることになり、後ろにインストラクターがついてのタンDEMフライトに挑戦する運びとなった。

レクチャーを聴いている間に啓介とは離れ離れになり、終わったところで姿を探す。

フライトエリアには専用のワゴンで向かうので、待ち合い場所に人が集まっている。

啓介の青いジャケットを見つけ出したが、ちょっと興味もあり、しばらくその様子を伺うことにした。

予想通り、誰彼となく声を掛けられては挨拶をしている。
周りは若い人からお年寄りまで年齢の幅も広い。女性もちらほら

と見えるが、あれは俺と同じく興味本位の新参者だろう。辺りをきよきよとしている。

それよりも気になるのは、さつきから背格好のほっそりとした男性が啓介と楽しげに語らっている光景だ。

ベンチに座った啓介が少し頬を染めながら嬉しそうに、佇んでいるその男を見上げている。

前の男か？それとも本命なのか？

…なんだよ、俺にあんなだけアタックしながら、好きな相手がいるならそう言えばいいのに。

自分の事を棚に上げて、勝手不信になるのはなんとも未完成過ぎて笑える話だろう。

それにどう見ても、俺の方が年寄りだ。大人になれよ、紫乃。若者を見守り続ける聖職を選んだはずだろう？

「紫乃！」

俺の姿を見つけた啓介が人目を気にせずに、名前を呼ぶ。こういうところが、まあ、こいつのいいところなんだが…

ゆつくりと近づくと、その細身の男は丁寧に頭を下げた。

「初めまして。黒木と言います」

人当たりのいい感じの青年だった。

「藤宮紫乃です。ひと月ほど前から、教育実習生である千葉君の指導教師をしています。今日は千葉君に誘われて、パラグライダーを初体験させてもらうことになりました」

「啓介から聞いております。とても尊敬する指導教師だと、伺っております。今日は天気も穏やかだからいいフライトができますよ。楽しんでください」

「黒木さんはうちの大学のOBなんだ。パラグライダーのサークルの先輩でもあるし、インストラクターのライセンスも持っているんだよ。今は県の高校教師をしながら、サークルの指導もしてくれているんだ」

「たまにだけだね。教師も担任を持つていないと余暇に時間があるので、その時は先輩気分を味わいにサークルに行くんですよ。ああ、そうだ。僕もヨハネ学院高校のベテラン教師に色々ご指導願おうかな」

「ベテランとは…まだまだ未熟者ですが…」

「昨今の学生にはこちらでも戸惑うほどに性急に大人になる。どう扱っていいのかわからなくなる時があります。藤宮先生は…どうお考えでしょうか」

「何も…学生たちは俺達が思うよりもずっと…考え悩み、夢を持っていますよ。そのひとりひとりすべてを理解しようだなんて、とても無理です。期待されても困る。俺たちはたかが教師だと、生徒にわかってもらえればいい。そうした上でお互いを理解しようと歩み寄ることしか、できない気がしますね」

「…ありがとうございます。なんだか元気をもらえた気がします」
「いいえ」

「啓介、おまえ、良い指導者にめぐり合えたね。藤宮先生になんてもしっかり教えていただけたよ」

「はい。なんでも教えてもらいますよ」

満面の笑みを見せる啓介に、こちらが照れる場面になった。

黒木さんは俺達と一緒に離陸場まで付き合ってくれ、初めて飛ぶ俺の緊張を和らげようと尽くしてくれた。

啓介はタンデムパイロットのライセンスを持っているという事で、本当なら熟練のインストラクターに付いて飛ぶ予定だったが、黒木さんの勧めもあって一緒に飛べることになった。

なにしろ何もかも初めの経験だったから、正直、啓介が一緒だと聞いて心強く思えた。

「俺が付いてるから安心してね、紫乃」

「逆に心配だ。本当におまえで大丈夫なのか？」

こちらにもプライドがあるから意地を張ってみる。

「ばーか、それでも俺はインストラクター目指してるの。それに大事な紫乃を危ない目に合わせたりしないからね」

ヘルメットを被りながら、啓介は安全のおまじないと頼にキスをした。横で見ていた黒木さんは大笑いしている。

本当におまじないなのか？と、疑ってみた。

操縦席となる背中の中のハーネスを抱えたまま、離陸場に向かう。

真正面にまるで絵のような富士山が見える。見惚れていると、啓介がヘルメットをコツンと叩く。

「行こうか」

「ああ」

翼に風を取り込み、ゆっくり上がって行くキャノピーを見上げ、アゲインストの風を受け、啓介の掛け声と共に走り出す。

テイクオフだ。

身体が持ち上げられ、走る足が地上を離れる。見る見るうちに今居た場所が小さくなる。

風を切る音が耳元で鳴り続ける。

ゴーグル越しの景色に目が回るようだ。どこを見て良いかわからない。

なによりも空中に身を置く不安定さが怖かった。

「紫乃、大丈夫？」

背中から啓介の声が響いた。

「うん。ちよつとびびってる」

「初めはね、誰でもそうだよ。でもせつかくだから、よく周りを見てごらんよ。今日はいいパラ日和だよ。景色が紫乃を歓迎している気分にならない？」

顔を左右、上下に向けて空中に浮かんでいる自分を知る。

雄大だった。ふわりふわりと右に左に揺れながらゆっくりと上がった、下がったりしなから落ちていく感覚が何ともいえない高揚感を湧き上がらせた。

時折、後ろから啓介が声を掛ける。

ほら、あの山を見てよ。秋になると紅葉が凄すぎて目がちかちかするの。本当か？本当だって。あっちの方からはね、時たま凄いい上昇気流が来たりするから、気をつけなきゃならないんだ。へえ。たまに冒険したくてわざと行ったりするけどね。落っこちるぞ。そういう時の為にハーネスには緊急パラシュートが付いてるだろ？使ったことがあるのか？うん、一度飛んでるライダーとぶつかって開いたことがある。でも滅多な事では使わないから、安心して。ねえ、秋になったらまた紫乃をここへ連れてきてもいい？楽しみにしてるよ。…紫乃、ランディングが近いよ。ゆっくり落ちるから落ち着いて足元を合わせてね。わかった。啓介の言うとおりにやるよ。大丈夫だ。紫乃は飲み込み早いよ。

ぐんぐんと目の前に地上が接近し始めるから、ぶつからないかと心配したが、本当にふわりとランディングに成功した。辺りからも拍手が起こったほどだ。

二十分間の初飛行だった。

「本当言つとタンDEM飛行は初めてだったから、緊張したんだけど無事に紫乃と飛べて良かったよ」

「…初めてだって？おい、俺を踏み台にしたな」

「インストラクターになるには人に教える実技が一番大事だからね。紫乃はいい生徒だ。じゃあ、今度はひとりで飛べるようにここで飛び方の練習をしよう」

俺と啓介はランディング場の隣りの講習場で、グライダーの扱いや飛び方、ランディングを何度も繰り返し返した。機体をコントロールする為のブレイクコードの詳しい扱い方は実践にならないとわからないが、初歩の段階はクリアできそうだ。

「いきなりさっきのエリアからは無理だけど、初心者用のなだらか

な場所に移って何度も繰り返せば、すぐに上手くなるよ。午後からはそこに移ろうか？」

「それもいいが…もう一度、啓介と一緒にさっきの場所から飛んでみたいんだが、いいかな？」

「勿論」

差し出す啓介の手を、俺は迷う事無くしっかりと握り締めることが出来る。

もう一度フライトエリアの戻ってみると、風向きが良くないとの事で、飛行が中止されていた。

「山の天候は変わりやすいからね。せつかくはるばる来たのに、飛べないで帰らなきゃならない時も結構あるよ。しばらく待とうか。ちようど昼飯時だし」

木陰に座り込んだ俺たちは啓介の作った弁当を食べた。

運動の後の飯は格別だとは言いが、マジで美味かったから素直に褒めると、啓介は早起きして作った甲斐があったと喜んだ。

「啓介はどうしてこんなに料理が上手なんだ？ただ本を見て作ったというより…長年作ってきたおふくろの味みたいだな」

絶妙にスパイスの効いたミートパイを口に入れた俺は、こいつは教師よりシェフ向きじゃないだろうか、思ったりする。

「それはさ、昔から作ってたから…。うちはね、結構金持ちなんだ」「そうだろうな。洒落た車も持っているし、こんな金のかかるスポーツも学生の身分でやれるんだ。親の援助は大きいはずだ」

「まあね…両親で道内でレストランと居酒屋のチェーン店を経営をして、結構繁盛しているって。俺は知らないけどね。姉ちゃん…四つ違いの姉が後を継いでるから、俺は自由に遊んでいいって言うてくれてて、脛を齧ってるの」

「良いご身分だな」

「それでも小さい頃は、両親が忙しくて、かまってもらえなくてさ。

朝早く出て、夜遅くしか帰ってこない。まったく顔を合わせない日もあったりしてさ。それじゃあ親子の絆が築けないって。親父が遅く帰って来ても、絶対に風呂だけは一緒に入るって決めて…嬉しかったな。一日の出来事を風呂の中で話して聞かせるの。それで風呂から上がったら、四人揃って夜食を食べてさ。夜中だよ？小学生が起きてる時間でもないのに…俺も姉ちゃんも嬉しくてさ。そのうちに姉ちゃんと話し合って、両親の帰りを夜食を作って待つことにしたんだ。初めは梅とおかかの入ったおにぎりだったなあ。すごく喜んでくれた顔を今でも覚えているよ。で、段々エスカレートして、色んな料理を作って用意したの。もう夜食というよりディナーだね。毎日じゃ大変だから曜日を決めてね。月曜はおにぎりの日、水曜日はパスタの日、土曜は鍋の日とか…」

「良い家族だ。羨ましいよ」

「紫乃は…家族はいるんだろ？」

「京都の方にね。でも…肉親はもうとうに亡くなってしまっているからね。啓介みたいな話を聞くと、なんだか癒されるよ」

「そうか…」

「もつと聞かせてくれないか？啓介の事」

「え？」

「確かに一目惚れっていう恋愛もあるだろうけれど、理解しあうって大切な事だと思うんだ。俺はまだ啓介を恋愛の相手だと思えないけど…おまえが好きだよ。だから、もつと色んなおまえを知りたいって思っている。今のおまえを育ててきた話を聞きたい」

「ホントに？」

「もしかしたら恋かもしれない」

「…マジで？」

「かも、知れない…あはは」

あまりに啓介がキラキラと瞳を輝かすから、顔を上げて大声で笑ってしまった。

てっぺんの雲が風に流れている。

夏から秋に変わる風だ。

9 (前書き)

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i

9、
夕刻まで待つて、なんとかもう一度タンデム飛行ができることになった。

二度目は少し余裕が出来た所為か、最初よりも断然楽しめた。

啓介は風具合を見ながらも、「サービスだよ」と、一時間近くフライトを続けてくれた。

西に傾いていく太陽を、何の遮るものもない空から見る景色は格別だ。

なんども息を呑むような心踊る爽快感を味わった。

「どうしよう。ちょっとした好奇心だったのに……もっとずっと飛んでいなくなるじゃないか」

啓介と一緒に翼をたたみながら、名残惜しさが口に出た。

啓介は「また一緒に来ようよ。今度は本格的に紫乃ひとりで飛ぶ練習をしよう。ふたりのフライトと違って自分で空の道を選んで飛ぶんだよ。俺はいつだって紫乃のお供をするからね」と、俺を慰めてくれた。

これではどちらが年上かわからないと、俺も自重した。

山から下りて東名高速に乗る頃にはあたりも暗くなり、また行楽日和の為か渋滞に巻き込まれてしまった。

「どうする？」

サービスエリアで一服しながら、少し疲れのみえた啓介が俺を見る。

「箱根辺りに一泊するか？」

「え？ いいの？」

「啓介は疲れている上に、長時間運転させてしまっているからね。俺が奢るよ。さて、良い宿が空いているかなあ」

「俺、探してやるよ」

言うよりも早く、携帯を使ってあっという間に幾つかの宿をピックアップしてきた。

そのひとつに連絡してみると、ちょうど一室空きがあるという。予約を取り、箱根湯元に向かって車を走らせた。

なんとか夕食の時間にも間に合い、温泉に浸かって昼間の疲れをゆつくり癒した。

部屋へ戻ってみると、先に湯から上がった啓介が、案の定、敷かれた布団の上でぐっすりと眠りこけている。

せつかくの夜だ。こちらだって相手になってやろうと思わないでもいるのに。

「啓介らしいな……」

エアコンが効いた部屋の温度は湯上りには気持ちがいいが、そのままでは身体が冷えてしまうだろう。

エアコンを切り、窓を開けた。昼間の暑さはすっかり引いて、虫の声が聞こえた。

浴衣一枚だけで寝込んでいる啓介に羽織を掛け、その隣りに俺も寝てみた。

少しだけ濡れた髪にそつとタオルを押し当てた。身体の汗は引いていた。

じつと寝顔を見つめる。

健康的に焼けた肌、整った鼻梁に人の良さが滲む口元。しっかりと弧を書いた眉も男らしい。長い睫が頬に影を映す。

「男前だな、啓介。引く手あまたじゃないか。俺みたいなおじさんより、若くて良い子は沢山いるぞ」

独り言を呟いてみた。

「紫乃が良いんだよ」

口元が動いた。

「起きてたのか？そうならそう言えよ」

バツが悪く起き上がるうとする俺の腕を掴んだ啓介は、俺の身体を抱きとめた。

「このまま寝て朝を迎えちゃったら、一生後悔するに決まってるだろ？紫乃が誘ってくれたんだ。朝まで寝かせないから」

「バカだね。俺もおまえも疲れてんだ。そんなにもたないよ。やるんならさっさとやって寝ちまえよ」

腕の中でもがいて離れようとした時、啓介の浴衣の裾が大きくはだけて、右の太ももから膝までの痛々しい傷跡が目に残った。

「啓介…これは？」

大浴場では客も多かったから、傷跡には気づかなかった。

ケロイド状に斜めに走った傷跡にそっと触れてみる。

「ああ、これ？名誉の負傷だよ」

相当に酷い怪我だったろうとひと目でわかる。

「いつ？」

「高校生の時。…聞きたい？この傷の事」

「おまえが話せるのなら…聞きたい」

啓介は上半身を起こし、布団の上に足を伸ばした。

「紫乃はスキージャンプってやったことないよね」

「え？スキージャンプって…あのオリンピックとかで見る奴か？」

「そうだよ。俺はこの怪我をするまではずっとジャンプをやってたんだ」

「凄いな…テレビでは見ても実際飛んできるところを見たこともないよ」

「北海道じゃそんなに珍しいもんでもないけどね。で、俺は小学五年からこのスキージャンプって奴を初めてすぐに頭角を現したってわけ。まあ天才肌だね」

「自分で言っな」

「ホントだって。ジュニアじゃちょっとしたもんで、スキー留学で

ノルウェーまで行ったこともあるんだから」

「へえ、そりや凄いな」

「中学になって国内の公式の大会でも優秀したりね…将来はオリンピックも夢じゃないって周りが騒ぐから、俺もその気になってさ。両親も一生懸命応援してくれてたから、もつと喜ばしてあげたかった…で、高校二年の時…練習中に飛んで…運悪く突風に煽られて…まともに機材の側溝に叩きつけられた。打ち所が悪くて…右足がズタボロで…二度とジャンプは無理だって言われてね」

「…」

「じゃあ、見てろ。絶対に元通りになってもう一回ジャンプ台に立つてやる…って、若いから意地になるじゃん。俺、本気でム力ついてたからさ。俺を哀れんだり、ほくそ笑んだりする奴に泡ふかしてやるって、必死になってリハビリやって、一年後になんとかまともになれるようになった。クソ根性だよ。それで、もう一回ジャンパーとして復帰したいってジャンプ台に立って、アプローチを滑った…」

「怖くなかったのか？怪我した時のことを思い出したりしないものなのか？」

「うん、俺もそれを予想した…けれど、逆だったんだ」

「逆？」

「怖くなかったんだよ。良くこういう競技って己の心の恐怖に打ち勝って言うよね。それって怖さを知って、それを乗り越えろって言う意味なんだと思う。…俺は初めからいくら飛んでも怖さを感じた事がなかった。怪我した後、ジャンプをしてみて俺ははつきりわかった。俺にはジャンプに恐怖を感じない。それが、恐ろしくなかった。このままこの競技を続けて、K点超えを目指していったら、俺はまたどこかで自分の命の重さを気づかずに無茶をしてしまう…って。危険の察知を自分自身のどこかで見極めるって、とても大事だと思う。俺はまだ死にたくはなかったからね。ジャンプはすっぱりやめた」

「それで…周りが納得したのか？」

「それまで応援してくれた人達には悪いと思っただけで、怪我でズタボロの俺を見てるだろ？もう高いところへは行けないって諦めもしてただろうから、落胆は少なくとも思う。両親も俺の話を聞いて納得してくれたし。俺の努力っていうか、頑張りを見てくれてたから、俺が決めた結論を責めたりせず、自分の好きな道を探しなさいって言うてくれた。で、一年浪人してこっちへ出てきたってわけ」

「そうだったのか…啓介は偉いな」

姿と精神が一致した人間は稀だ。俺は素直に感銘してしまった。今までの俺の周りにはそういう者が少なかったからとも言える。極めているのがあの兄弟で…まさに夢を見させるような現身なのに、恐れおののく精神の持ち主達。

比類のない魅惑力に逃れられない自分を呪うことになる。

だが啓介は違う。

裏のない明朗闊達な気性が回りの者を笑顔にさせる。無償の奉仕だと言っている。

明快さは魔性とは違って身動きが取れないようなジャンキーになることはない。

狂うことはなくても、風が吹き抜ける爽快感が千葉啓介の持つ色。

太ももの傷跡にキスをした。

啓介は驚いたように身体を震わせた。

「名誉の傷に敬意を表したんだよ」

「紫乃…」

「おまえが死ななくて良かったと、俺は心からそう思っているよ」肌蹴たままになった下着を下げ、俺は啓介のものを口に含んだ。思わぬ行動に啓介は戸惑い、身体は震え続けた。

こいつはこういう事には慣れてはいない。あまり他の男とやった経験が無いのかも知れないな。

啓介の指が俺の髪を掴む。「紫乃」と、喘ぎながら呼ぶ声がいじらしくてたまらなかった。

啓介の傷が俺を昂ぶらせるのは、きっと啓介が口にしないプライドや痛み、努力を痛烈に感じてしまうからだろう。明朗闊達な啓介の人格の中にある根源的なものを捕まえなけりゃ、こいつを愛せない気がした。

若い欲望はあつという間に解き放たれた。

興奮冷めらやぬ啓介が荒い息を吐き、俺を見つめた。

「口でいかされたの、初めてだよ」

「そんな崇めるような顔をするな」

口を拭いて、俺も浴衣を脱ぐ。

「だって…紫乃、上手すぎるんだもん」

「年の功と言え。これぐらいで感心してもらっても困る。俺はこの道のエキスパートだ。言うなればA級ライセンス持ち」

「な〜んかいやらしそудなあ〜」

およそ色っぽさとは遠そうな呑気さで啓介も自分の帯を解いていく。

「紫乃は眼鏡も似合うけどさ。眼鏡無しだと色気が倍增するよね」

「だから学校では眼鏡は必需品だ。色ボケされた生徒が増えては、良い成績は期待できないしな。進学校の名が廃る」

「じゃあ、眼鏡は常時かけておいてくれ。その方が紫乃に惚れる奴が増えなくて俺も安心するもん」

「誰もこんなじじいに振り向かないよ。それが惚れた欲目っていうんだよ」

「そうかなあ〜。俺は紫乃が一番美人だと思うけどな」

「…天然バカ」

裸の身体をぴったりと重ねる。汗を掻いた啓介の身体はまだ熱さに浮かっていた。

着やせするタイプなのか、啓介の身体は裸になるとすっかりとした無駄のない筋肉質だ。

「前の時はわからなかったが、啓介は良い男だな」

「そう？じゃあもう『慧一』って呼ばないでくれる？結構間違えられた事を根に持ってる」

「…執念深さも啓介のひとつなら、仕方あるまい。認めてやるよ。もう間違わない」

「良かった…紫乃に出会えて…本当に良かった」

親猫に甘えるように俺の胸を撫でる啓介は、安らかな表情を見せた。

他者に心から甘え、委ね、信じることができたなら、それは本当に幸いな人生だと思う。

それが一瞬であつても、信じた軌跡は残る。

今夜の啓介が誰よりも愛おしいと思うから、俺は啓介の望むものすべてを与えてやりたかった。

10（前書き）

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i

10、

「…でさ、聞いてる？紫乃」

「あん？」

三度目…終わってこちらはぐったりだが、啓介はまだ続ける気なのか、俺の中に入れたまま学生時代の話が続く。

…若いつてこういうもんなんだろうが、年寄りを少しは労わって欲しいものだ。大体俺は入れられるのは慧一以来なんだからさあ。

「…それで、黒木さんに出会って、俺はまたスポーツの面白さを味わったんだ」

「ああ、啓介はその黒木って奴に惚れたんだな」

「えゝっ？どうしてわかるの？」

そんなに驚くな。中のものが動いてたまらなくなる。

それにそんなの誰だってわかるだろ。単純なおまえの顔を見てたら。

「…そう顔に書いてあった」

「紫乃には隠し事は出来ないね。それまで俺は女の子としか付き合ったことなくてさ。ほら、俺、顔良いし、ちよっと有名なジャンパーだったから、可愛い子がわんさか言い寄ってくるわけさ。こっちはジャンプ一筋で恋愛に夢中になる事もなかったけど、暇な時は普通にデートやらなにやらでさ、自分が男に興味あるなんて知らなかった。で、上京して横浜の聖学の入学式の時、サークル勧誘をした三年の黒木さんを見てひと目惚れしたの」

「…」

どっかで似たような話が…ま、俺と慧一だけど。

「初めて恋をしたっていうか…顔を見るだけでドキドキしたり、声掛けられたらあたふたしてさ。これが人を好きになるってことかっ

て、思ったよ。俺が教師を目指したんだって、黒木さんが県の高校教師になったからなんだ。もし採用試験に合格したら、いつかここかの高校で一緒になれるかもって…思った。単純だね」

「自分の将来を決め方なんてそんなもんさ。憧れや成り行きで決めるのは悪い事じゃない。それで、黒木さんとはどうなった？」

「黒木さんは大学を卒業してからも、ずっとサークルの指導をしてくれて、それで、俺の事もすごく可愛がってくれて…思い切って告白しようとしたんだ。でも告白する前に、黒木さんから婚約者がいるって…言われて…」

「…」

「俺の気持ちを察して、傷つかないように自分から言ってくれたんだと思う。見ようによっちゃ俺と黒木さんの友情は壊れずに済んだんだけど、俺は黒木さんと会う度辛くてさ…初めての失恋だね。そんで代わりに良い男がいなくな…ってウロウロしてたら、紫乃に会った」

「…は？」

「ちよ、ちよっと待て。と、いう事は…」

「紫乃ったら道端で倒れこんで、声かけたらべろんべろんで『けい、好きだ』って言うんだもん。すげえ綺麗でかわいくて、たまらなくなっちゃった」

「ちよっと待ってくれ。もしかしたら…おまえ、男とするのは…俺が初めてなのか？」

「そうだよ」

「…」

力が抜けた。

百戦錬磨の俺が初めての奴に抱かれて、それで啼かされて居ると思うと、さすがに悔しい。つか、腹立たしいわ！

そういう俺の気持ちなんか知ったこともねえ啓介は「紫乃、大好き。愛してる。ずっとしてたい」などと減らず口を叩き、俺の身体を揺すぶり続けるのだ。それに反応する自分の身体も悔しい

が。

結局解放されたのは三時も過ぎた頃で、裸のまま寝てしまった啓介に布団を着せ、隣りに寄り添うのが精一杯だった。

翌日、朝から露天風呂に引つ張り出されて「気持ち良い。良い朝だね」と何度も笑顔を見せる啓介を他所に、俺は風呂の隅っこであちこちの身体の痛みを癒すのに必死。

豪華の朝飯も、だるくてなかなか全部喉に入らない。

そんなことを知った風でもない啓介はいつもの天然だ。

「紫乃、どうしたの？この卵焼きダシが利いてて美味しいよ。もしかしたら疲れてる？どつか痛い？…そうか、昨日は初めてのパラだったから筋肉痛だよ、きつと」

「…」

おめえの所為に決まってるんだろっ！何回抜けば気がするんだよ、この体力バカっ！

「パラも慣れたら無駄な筋肉を使わなくてすむから大丈夫だよ。荷物が重かったら、俺が紫乃の分も俺に任せていいからね」

「…よろしくお願いします」

わけのわからぬ敗北感…。なのに啓介を見ていると切なくなったり、嬉しくなったりしてしまう。

帰り道、パラグライダーのフライトルールを詳しく学びながら、次も行こうと約束する。

俺をマンションに送り届けた啓介は、「絶対だよ、紫乃。また一緒に飛ぼうね」と、言う。

「ああ、また誘ってくれ」

「じゃあ、明日学校で」

「さよなら…」

走り去る啓介の車を見送る。

差し込んでいた光を急に失ったみたいで、冷えた空気に身震いす

る。

ひとりは寂しい。慣れるしかない、言い聞かせてきた。
俺だけじゃないんだと…

慣れれば孤独も楽し、自由は我が身に…と、鼓舞してきた。

ふたりでいる温かさは知っている。それを失う怖さも…

再びそれを味わい、離れていく悲しみに耐えられるほど、俺は強くないんだよ、啓介…

次のパラグライダーのフライトをする約束はしたものの、十月は学校行事が立て込んで、まともな休みも取れなかった。

実習生の啓介も同じで、中間試験結果の追試や補習など忙しない。それに一大イベントの体育祭が控えている。生徒主導とはいえ、実習生は生徒会に借り出されて、色々な演目に参加することになっている。

「あまり無理するなよ、千葉先生」

「大丈夫ですよ、紫乃先生。俺、体力だけは自信ありますからね」
それは知ってる。気になるのは…

「足は…痛んだりしないのか？」

周りに誰もいないのと見計らって、尋ねる。

「え？…しないよ。寒い冬は時々筋肉が縮んで突っ張ったりするけど、それ以外は大丈夫だから。紫乃、心配してくれてありがとう」
「…」

啓介のくれる笑顔が、近頃は切なくなって困る。

年を取ると感傷が敏感になるって本当だな。

それとも別れが近い所為かな…

体育祭は見事に快晴。

朝一番の準備体操から、啓介は我先にと先頭に立って張り切って

いる。

プログラムも順調に進み、昼前近く、なんだか保護者の一団が関係者のテントの近くでざわついている。近寄ってみると…貴賓席にあいつらがいた…

「あ、紫乃だ。慧、紫乃が来たよ」

「やあ、紫乃。ご苦労様」

…なにが優雅に「ご苦労様」だ。

確かにおまえらはうちの体育館と教会を建てた建築家だし、貴賓席にデンと居座ろうがおかしい話ではない。が、なんかもう、存在自体がむかつく。

俺のテリトリーに入り込むなって言っておいたはずだろう。

「ね、慧。紫乃は今、教育実習生を指導しているんだよ」

「へえ」

「その実習生がさ…良い男なんだ。ね、紫乃？」

「別に…普通の大学生だよ」

「是非紹介して欲しいもんだな」

慧一の言葉に血の気が引く思い。

本当に…ロクなことにはならないぞ…

俺はくるつと身を翻して、あわててあいつらから逃げ去った。

逃げたところに啓介の姿が見えた。

「紫乃先生、探してたよ。次のプログラムは出番だから準備してくれって」

「わ、わかった」

「なにかあったの？」

「何にもねえよ」

「あれ？…貴賓席にいる人、宿禰さんじゃない」

「…」

「だからなんか周りがざわついてたんだ。宿禰さんの隣の人…もしかして、あれが慧一さん？」

もしかしくなくてもそうだ。

「すごい… かつこいい。想像してたより遙かにだよ。うわ… ふたり並んでいると、迫力…。あそこだけ別次元だね。神話で言う英雄と女神みたい…」

それを言うなら魔王とメフィストだろう。

「そうだ！ 挨拶に行つてこよう」と

「バカ、あんなのに近づくなよ。マジでロクな目には合わない」

「なんで？ 紫乃の家族みたいなものだろ？」

「… 俺、そんなこと言つた？」

「この間の夜、俺にしがみつきながら言つてた。『慧一と凜一はロクでもねえけど、俺の大切な家族なんだよな』って。あれ、寝言？」

「…」

だから、言つてるじゃねえか。

ロクなものじゃねえさ

午後の応援団のプログラムにハプニングが起こつた。

生徒会役員に押し出され、凜一は昔ここで見せた剣舞を見事に舞つた。

その姿に魅了された観客と、同じく見惚れている隣りの啓介を眺めつつ、あいつらが居る限り、俺の心休まる時など、一生来ないんじゃないかと、恨めしく思った。

11（前書き）

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i

11、

「出来たよ」アルデンテ。慧、ミートソース混ぜて」

「オッケー。こちらも用意が出来たから、テーブルに置いてくれ」

「了解。紫乃、皿を並べてくれよ」

「…わかった」

体育祭が終了した夜、なぜか宿禰兄弟は俺の家へ来て、勝手に飯を作っている。

「野菜スープもよし！じゃあ、頂きましょう」

「頂きます」

「…いただきます。つうか、なんでおまえらここに居るんだよっ！」

「だって、紫乃ひとりで飯食うって言ってたからさ。それなら一緒に食べた方が美味いだろ？それに今日は親父達も知人の結婚式に行つてて、泊りで居ないんだ」

俺の皿にご丁寧に取り分けながら、凜一はニコリと笑う。

こいつの本性を知らぬ奴なら、いっぺんに虜になってしまいそうな微笑だ。裏のない啓介とは真逆過ぎる。そして常に惹き付けられ易いのは「美しき魅惑」の方なのだから、人間の性というものは早々に浮かばれない。

「ひとり者の自由さはあるだろうけど、紫乃、たまには俺達と飯を食うぐらい構わないだろ？」

慧一もまた別格の生き物だ。

こいつの執念や思い込みは留まる事を知らない。こいつに一途に想われる身になると考えるだけで、その重さに気が滅入る。が、想い人である凜一は慧一の愛の重圧などそよ風の如くに受け流す性質であるから、まあ、世の中良く出来たもんである。

「そうそう、家族ごっこだろうと、楽しんだ者の勝ち。そう思わないか？」

「…」

こいつらが俺を想ってこうして付き合ってくれているのはわかっているんだが、気を使われるのも何となく居心地が悪い。と、いうより家族っていう言葉に、俺は照れくさくて素直になれないだけかもしれない。

注ぎ分けてくれたパスタも野菜のスープもサラダも、確かにひとりで食べるよりも何倍も美味しい。

「紫乃、味大丈夫だった？塩辛く無かった？」

「ちょうどいいよ」

「良かった」。ほら紫乃は今美味しい弁当をいつも食べてるからさ、味には五月蠅いかもってさ」

「弁当？」

「そう、紫乃の昼飯はあの実習生の手作り弁当なんだよ。ねえ、紫乃」

「…」

何を企んで喋っているのか本心が読みかねる凜一には、迂闊に答えられない気がしてきた。

「まだ続いている？それとも飽きられたかな？」

「…続いてるよ」

「そりや凄いな。その実習生の名前、なんて言ってたっけ」

「千葉啓介だよ、慧」

「そう…今日、挨拶だけでもしておけば良かったな」

「…いいよ。別に」

だから…慧一までも巻き込むな。頼むから俺の事はそつとしておいてくれ」

「俺、話したよ」

「ええっ？」

「啓介くんと話した。紫乃、啓介くんに誘われてパラグライダーをやったんだよね」

「パラグライダーか？面白そうだな」

「すごく楽しかったって啓介くん、嬉しそうだったよ。彼は良い子だね。俺、大好きになったよ」

「啓介は、おまえらと違って裏のない人当たりのいい子だからな」

「啓介は良い子だからなって…紫乃、マジになってる。待ちに待った本命現れたり…かな」

「…」

「凜、大人をからかうなよ」

「俺も一応二十六の大人なんだけどね」

年齢不詳というか…凜一はその状況において表情も仕草も自在に変えてくるから、少年のようにも老獪な青年のようにも見えてしまう。その上、見る側による印象がそれぞれに異なる魔性の者だ。

「まあ、そうだが…凜と比べる紫乃が悪い。凜は別物だ」

「何それ？」

「品種が違うつて言ってる」

「なんか褒められてる気がしない」

「褒めてない。事実を述べてるだけ」

「慧は時々すげえキツイよなあ…ベッドの中でも大体Sだしな」

「おまえが言うな。この間なんか…おまえ、三回やったのに足りないってごねて、最後に俺を年寄り扱いしたよな」

「だってさ…仕事で二週間も離れてて、寂しかったんだもん。一杯やりたかったの」

「だからって こちらが自信喪失するようなことを言うな。俺は前
の日から仕事で徹夜明けでふらふらだったんだから」

「その割にはヘンタイだったじゃん」

「おまえが望む事をしたまでだ」

「おいっ！いいから俺の家で痴話げんかをするな」

「ケンカじゃねえもん。惚気だもんね…慧」

「…悪かった。それより紫乃。来月は誕生日だったね。お祝いは一緒にやりたいと思っている」

「俺の誕生日の為に、わざわざこちらに帰ってくる必要はない」

「いや、こちらにも用事があるんだ」

「遅くなっただけ、今年中に聖堂が出来そうなんだ」

「例の奴か？」

宿禰家の墓前を聖堂として、このふたりは横浜の山手に建てた。

俺と慧一が学生時代良く星空を観た場所で、俺も思い出深い。その場所に宿禰家の墓が出来ること何故だか切れぬ縁があるように、見たことも会った事もないふたりの家族に懐かしいものを感じる。

「うん、母さんと梓の聖堂。金沢の山手になるんだがこちらからは近いしね。宿禰家個人の墓にしようかとも思ったけど、形だけでも正教会に認められるように奉る事にした。鳴海先生に教会の祭司をお願いしたら、快く承諾されたんだ」

「そうか、鳴海先生も引退なさって少しは楽になると思ったのに、やぶ蛇だな」

「鳴海先生は喜んでいるよ。誰だって…自分を必要とされることは嬉しい。そうじゃない？」

「…尤もだね」

食事を終え、明日は代休だからと、慧一と凜一は俺に付き合って、酒盛りとなった。

俺と慧一はスコッチ、酒に弱い凜一は軽いカクテルを作って飲んでいる。

「ねえ、紫乃。啓介くんと話しててね、俺思っただけさ。彼は紫乃に恋をしているよね。告白されたんだろ？」

「啓介は…千葉はまだ二十二の若造だ。本気で好きだと言われても、そう簡単に受け入れられるもんか」

「なんで？」

「第一俺とは歳が違いすぎるだろう。それにあいつはウブで世間知らずの子だ。男だって俺が初めてで…」

「へえ」紫乃が初めてだったら啓介くんも幸せじゃん。色々教えてもらって、いい思いができる」

「凜、ちやかすなよ。紫乃は真剣だよ。紫乃、歳の所為にして相手の想いを踏みにじることはするなよ。大事なものは紫乃の気持ちだろう」

「……」

「紫乃が啓介くんを本気で好きなのかどうかが、一番大切なんじゃないのか？」

「……好きだとして、啓介になんて言うんだ？愛しているって、一生俺の傍にいて、俺の老後の面倒をみてくれて……そう言うのか？社会に出れば、いくらだって啓介が望む恋はできる。あいつには沢山の未来を選べる権利がある。そのひとつが俺ならば、俺は……それを選べとは言えない」

「何故さ。好きなら一緒にいたいって思う。それが歳に関係あるの？」

「凜。おまえの言うことは正しいよ。だけど……俺も紫乃もおまえよりもずつと歳を食っている。年上っていうのはね、愛する者が若いほど、その者の未来を考えてしまうもんなんだ。俺だってね……凜一にとって本当に俺でいいのか、もっと違う一緒に生きていく者を選んだ方がおまえにとって本当の幸せを掴めるんじゃないかと……何百回も何千回も考えた。今だってその気持ちが無いとは言えないよ。おまえが本当の幸せを探し当てたら、俺はおまえの前から消えたっていいと、思っているんだから。……だから、紫乃が啓介くんへ踏み出せない気持ちはわかるつもりだ」

「……」

「だけど、だからこそ思うんだ。もしそこに『愛』があるのなら、無視することも踏み潰すこともできないなら、ただ掬い取って抱き締める事。大きく育とうが消えてなくなってしまうても『愛』を知った者は幸いだ……俺は紫乃から貰った『愛』に何度も救われたんだ」

「慧」

「愛故に…」

「悩む事を怖れるな」

「うん。だけど俺は紫乃にこう贈るよ。愛する事を怖れるな、ただ従える唯一のものだから…」

慧一は昔と違って大人になったのだと思う。そして俺もまた…成長しなければならぬ。誰かが必要とすることは、頼ることは脆弱になることではないのだろうか。

そう言つと、慧一は答えるのだ。

「弱くなつて当たり前だ。絶えず降り続ける精神の重みに、どうしてひとりで耐え切れよう。ひとりで突つ走る時を経て、そして誰かに寄りかかるしかない時が来る。大人になるということは、歳を取るとのことだろ？俺たちは『愛』を知ろつとする者に成長したんだよ」

「俺は…啓介を必要として、いいんだろうか」

「おまえだけが必要としているんじゃないのなら…彼もまた、おまえが必要なら…必然だろう？」

ひと月半の教育実習の日々が間もなく終わる。

これが終わつたら、俺と啓介の関係はだたの教師と大学生になる。

俺は啓介の必要な者になれるのだろうか…

12（前書き）

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i

12、

実習の最終日も啓介は手作り弁当を持参した。啓介は感謝の気持ちを込めて赤飯を炊いたと国語と社会科担当の先生方に赤飯のおにぎりを配っていた。

「寮のおばさんにも手伝ってもらったんだ。炊飯器もひとつじゃ足りなくてね」

皆に喜んでもらったと嬉しそうに笑う。

「勿論紫乃先生の弁当は特別だからね」

いつものプラスチックの弁当箱じゃなく、赤飯のおにぎりとおかずが一緒に竹の皮に包まれていた。

「ありがとう、千葉先生。よく味わって頂くよ」

できるなら、これが俺に作る啓介の作る最後の弁当だと思いたくなかった。そう思う自分が感傷的になってしまうことを笑う。

なんだよ、これじゃまるで転校する友人との別れを惜しむいじらしい高校生気分じゃないか。

ゆっくり噛み締めて味わう俺を、じっと見つめる啓介にも慣れてしまった。「見てないで一緒に食べるよ」と、促すと素直なおにぎりにかぶりつく。素直な少年のままに…

俺はこいつを導いてやれるのだろうか…

最後のホームルームで啓介はクラスの生徒達に挨拶をする。

別れの言葉は時折涙で途切れ、生徒達のすすり泣く声が聞こえる。啓介は良い実習生だった。このまましっかり勉強して採用試験に受ければ、きつといい先生になれるだろう。

「先生もみんなと別れるのは寂しい。でも…みんなと会えたから先生には未来が見えたんだ。みんなに約束する」

涙を拭いた啓介は明るい声で言う。

「再来年、君達がこの学院を卒業する時、先生は…俺は絶対この学院の先生となつて、君達の卒業を祝福する。来年のこの学院の採用試験に絶対受かつて見せるから。その為に一生懸命勉強するから、みんなも自分の夢を未来を信じて進んで欲しい」

啓介を見る生徒らの顔が輝く。啓介の話す未来が生徒を照らす光となる。

千葉啓介は生徒達が望み得る教師になり得るだろう。

簡単な送別会が職員室で執り行われ、そしていつものように勤務時間が終わる。

十月も半ば、日の入りも少しずつだが早くなった。

各先生方に丁寧な挨拶を終えた啓介は、帰宅しようと靴を履く俺を追いかけてくる。

「紫乃、先生、待つてよ。先に帰るなんてつれないなあ」

「なんだ。別れの挨拶は充分にしたつもりだが…」

それでなくても涙を堪えるのが大変だったんだ。これ以上啓介といるところがもたない。

俺は啓介を無視して足早に校門へ向かう。

「紫乃、何怒つてんの？」

「怒つてねえよ」

「じゃあ、なんで逃げるの？」

俺は少々呆れ果てながら、啓介を振り返る。

「おまえは俺を好きだと言うが、その好きな相手の気持ちもわからないのか。そんなことじゃ良い教師にはなれんど。生徒たちの涙の意味を知るなら、わかるだろう」

「紫乃…」

「おまえはいい実習生だった。きっと良い教師になれるよ」

「俺はこの学院の教師になるよ。そう決めさせてくれたのは紫乃だ。絶対に帰ってくるから、それまで待つてくれる？」

「恋人でもないくせに、俺を縛る気なのか？あいにく俺は辛抱強く

ない。恋人を作るかもしれない」

「その時は奪い取ってやる」

その揺ぎ無い感情に憧れる。若者の特権だな。それに甘えたくないじゃないか。

「啓介：今から、俺のマンションへ来ないか？」

この意味がわかるなら…啓介、応えてくれ。

「…紫乃」

校門に佇むふたりの側を帰宅する教師の車が通り抜けようとする。俺たちは同時に端に避け、頭を下げた。

「啓介、実習期間の最後だしな。俺がおまえにできることは…これくらいだろ？」

「紫乃：嬉しい申し出だけど…行けないよ」

「何故？」

断れるとは思わなかったから、俺の声も少し震えた気がする。

「だって…紫乃は俺を愛しているわけじゃないんだろ？紫乃は優しいから、俺に同情しているだけだろ？」

「…」

「俺、本当は怪我の事、言いたくなかった。実際上京してから俺がスキージャンパーだったことも、事故って選手をやめた事も誰も知らないし、言ったこともなかった。向こうでは同情や憐れみばかりだったし…それが良心だとわかるけど、偽善じゃないってわかってるけど、俺と言う人間の本心を見るにはフィルターがかかるじゃん。俺は可哀相でもなんでもない。ただの千葉啓介を見て欲しいって…そう思ったから。だけど…紫乃が好きで、紫乃に振り向いて欲しくて同情でもいいから、愛して欲しくて…あの夜、紫乃に話したのは自分の中にそういう気持ちがあったのかもしれない。だけどそれって結局、知らなくてもいいフィルターを紫乃にかけてしまったことになるよね。本当の愛情じゃないんだもの。そういう卑怯な手を使った自分を反省している…だから、紫乃のマンションへは行

けないよ」

「…そうか」

こいつの言う事は理解できた。俺だって啓介の怪我の話に同情したことは間違いない。だけど…

「ごめんね」

「いや、啓介の純粋は気持ちにはわかった。おまえが来年ここの採用に決まることを祈っているよ」

「うん、頑張るよ」

「じゃあ、紫乃。俺、寮に帰らないと。片付けがあるから。またね」
「ああ、さよなら」

ヨハネ寮に向かって歩いていく啓介の後姿を見送る。西日が啓介の背を赤く染めた。

…これで良かったんだ。啓介の未来は啓介のものだ。セックスで俺のものにしようなんて卑怯だし、おこがましい限りでもんだ。

五十メートルほど離れていった啓介の後姿を俺はただ、ぼーっと見ていた。

その時、啓介が立ち止まり、くるりところらを向いたと思ったら全速力で走りながら戻ってくる。

俺は呆氣にとられるばかり。

俺の前で足を止めた啓介はハアハアと荒い息を吐いた。息を整えながら啓介が顔を上げる。

「紫乃…」

「ど、どうした？何か忘れもんでもしたのか？」

俺は慌てて聞く。

「大切な忘れ物だ」

そう言つて、啓介は俺の腕を取る。そのまま引つ張られた俺は校門から歩道に進んだ。校門から続く学院の赤レンガの塀に沿った歩道で啓介は俺と向き合った。

「ほら、もうこれで教育実習生と指導教師の関係は無した。今から

はただの千葉啓介と藤宮紫乃で付き合うことになるんだよね」

「え？…ああ…そうだな」

「良かった。紫乃、前に言っただじゃん。先生同士の恋愛はご法度だって。だったら来年ここを受けて採用されて、再来年の春までに紫乃と恋人同士になって、永遠のパートナーになることを誓いあったら、校則は破ったことにはならないよね」

「…」

「だから、俺、今から頑張るよ。紫乃に愛してもらおうように、紫乃を支える男になれるように…頑張るから。見てくれる？」

「啓介…」

「紫乃が好きだから。大切だから。一緒に生きて生きたいって本気で思っているから。今すぐじゃなくていいんだ。少しずつでもいいから、俺を理解して欲しい」

「バカかおまえは。…ド天然にとぼけるのもいい加減にしろ。俺が…おまえの傷で、おまえの過去で、おまえを見間違うと思っているのか？どれだけの生徒を見てきたと思う。無駄に歳を取っているわけじゃないんだぞ。俺は…千葉啓介という人間が、愛おしいんだよ。啓介、おまえが傍にいてくれたら、俺はきつと、笑っていられる。幸せだと感じられる…おまえが俺を好きなら…」

そこまで言って、俺は口を噤んだ。自分の勝手な想いが、もし啓介の未来を自由を奪うとしたら。

歳が離れているほど、相手を幸せにしたいと、しなきゃならないと思う使命は重くなる。簡単に愛していると言えるはずがないじゃないか…

「紫乃…愛してるよ。ホントだよ。信じて。俺は紫乃を愛してる。幸せにする」

啓介は俺の心を読んだように、俺の言えない言葉を何度も口に出した。少しも濁りのない純粹な感情に満ちた言葉が俺の心に流れ込んでくる。

俺は…愛してもいいんだろうか、愛されてもいいんだろうか…

「俺は…おまえよりも随分年寄りだから、未来永劫おまえを縛り付けたりしないし、おまえが俺から離れても恨まないよ。ただ…俺を愛しているなら、嘘のない笑顔を見せてくれ。それだけでいいんだ」俺の言葉に啓介は懸命に笑おうとする。けれど顔は歪み、口はへの字に震えている。

「笑えないよ。だって…嬉しすぎるから。嘘でも紫乃が俺を愛してくれるなんて…」

「嘘じゃない。啓介を愛してる。…愛してるんだ」

「こんな公道じゃなかったら、とくにあんたを抱き締めてキスを浴びせているのに…よりによって校門の前で告白するなんてさ。中坊でもないよ」

「まったくだな。俺も年甲斐もなくこんな恥ずかしい様をさらすなんてさ、どっかが狂っているに違いない」

その時、校門の向こうに立つ教会の鐘が鳴り響いた。

聖ヨハネの祝福の鐘。凜一が作った教会の鐘だ。

鐘の音に聞きほれている啓介に近づき、背伸びをしてその額に口付けた。

啓介はにつこりと微笑んだ。

俺の欲しかった幸福の道標だ。

13 (前書き)

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i

13、

翌日に会う約束をして別れた。

俺は片づけを手伝うと言ったのだが、啓介は「紫乃が傍にいたら俺、何も手につかなくなる。それでなくても嬉しすぎて口が緩んでくるのにさ。寮の生徒達にどう説明すればいいのさ。出て行くのがそんなに嬉しいのか？って責められるよ」と、言う。

「そうだな。ひと月半お世話になった寮のみんなとゆっくり別れを惜しんでくる方がいいね」

「紫乃、明日は空いてる？良かったらデートしない？」

「いつでも構わない」

翌日は横浜の聖ヨハネ学院大学の近くに住む啓介のワンルームマンションまで車で出迎え、近くの水族館やドライブを楽しんだ。

夕方啓介のアパートに寄り、そのまま一泊した。

ワンルームの狭い部屋のシングルベッドで大の大人がふたりで寝る。

体格のいい啓介とふたりで寝るにはどう見ても狭すぎるベッドは困惑するかのようにぎしぎしと鳴り続けたが、啓介は俺を離そうとはしなかった。

いつまでも眠らない啓介を宥めても、啓介は堰を切ったように話し続ける。

思いつくことを片っ端から話す内容は、啓介のままに笑いやウエツトに富んだものだったから、飽きもせず聞き役に回る。

「何から何までそんなに話したら、これから先付き合っていくのに話のネタが尽きてしまうぞ」

「尽きないよ。だってこれから紫乃との物語がどんどん増えていくわけじゃん。話すネタには困らない。それに紫乃が言ったじゃん。」

お互いのことを良く知り合うことこそ心を近づける一歩になるって」
「そう、だったかな？」

「だから紫乃の話も聞かせて欲しい」

「俺の？」

「そう…慧一さんの話、とか…」

「…」

「紫乃が本気で愛した人の話を、俺は知っておきたいんだ」

誰にも話したことはなかった。あの兄弟以外、俺の葛藤を知る者はいない。それを啓介に晒すことは、俺達の間生まれた愛情に水を差すことにならないのだろうか。

それでも…啓介が知りたいのなら、俺は正直に打ち明けるべきなのだろう。

俺は啓介に慧一とであったことや恋人になった経緯、別れた事を話した。そして今でも慧一という者に一方的な情愛を抱いていると。「大学の二年間付き合っただけなのに、紫乃はまだ慧一さんのことを想っているの？」

「そうだな…想いの深さや感情は色を変えてしまったけど…愛していることには違いないのだろう。俺は今でも慧一の幸せを祈らずにはいられないのだから…」

「慧一さんは幸せなんだろう？だって、彼には凜一さんがいる。慧一さんの一番大事な人って凜一さんだよな」

「どうして、そう思う？」

「なんとなく…と言うより、ふたりの間に漂うオーラかな…凜一さんと少し話したけど、あの人って凄いね。あれだけ近寄りがたい容姿なのに、話し始めると人懐っこいし、笑うとめっちゃかわいいし…」

「惚れたか？」

「凜一さんに？まさか。無理だよ。畏れ多くて…ただ思うんだ。あんな人の傍にずっといるのなら、愛を注ぐしか仕方がないんだろうって。だからお兄さんである慧一さんは、凜一さんを愛して…逃れら

れないんだろぅなあって」

「それが慧一にとって幸か不幸か…俺にもわからないよ。だが、それを慧一が望んでいるのなら、俺は傍で見守っていたいんだ…どうしてそう思うのか自分でもわからない。初めから片思いでしかなかった。今更慧一の愛が欲しいなんて思っているわけじゃない。ただ慧一との絆を断ち切りたくない。…啓介と抱き合っているのにこんな話を話すのが正しいとは思えないけれどね。啓介の純粋な心に背くのは後ろめたいからね」

「でも紫乃は俺を好きだって、愛してるって言うてくれた。それは間違いじゃないんだろ？」

「勿論だ。多分俺は自分を縛り続けていた慧一への想いを弛めて、そして許してやろうとしているんだと思う。慧一以外の者を愛しても、幸せになれると、少しずつ理解しているのかもしれない…」

自分自身に言い聞かせるように呟く俺の頭を撫で、啓介は微笑んだ。

「俺よりずっと大人の紫乃でも、片付けられない感情ってあるんだね。それとも大人になるから難しいことが増えるのかな」

「知識は悪魔の実とも言う。無駄な知識も必要な知識も選択する側の判断だからな。どれが正しいなんていうのは死ぬ時に判るのかもしれない。それでも…慧一を愛した事を後悔してないし、啓介を選んだ事も正しいと思っているよ」

「良かった…正しい選択だと思われるように、紫乃を幸せにするからね」

そう言っただけで啓介は俺を抱き締める。

…幸せにする…なんて安らかな言葉なのだろう。今まで得られなかったものを、啓介は意図も簡単に、そして真っ直ぐに俺に与えてくれる。

幸せになりたい。啓介と一緒に、ずっと一緒に…

俺たちは時間があえば平日でもお互いを共有した。横浜から鎌倉

までは車を飛ばせばあつという間だし、お互いのマンションに泊り込む。

これまで俺は遊びで数知れずの男と寝たけれど、自分の部屋へ入れるなんてことは殆どなかったから、この若い恋人の存在は俺の生活を一変させ、新鮮な感覚に毎日楽しくてならなかった。

休みの日には近くの海岸でパラグライダーを習い、ついには俺も自分のグライダー一式を購入することにした。

「スクールに通ってちゃんとパイロットライセンスを貰ったら、どこでも自由に飛べるから、それまでは一緒に付いててあげるよ」

「一人前になつても付いてくれないと意味がないだろ？ 啓介と一緒に飛びたいんだから」

何気ない俺の言葉に啓介は「紫乃、大好き！」と抱きつき、全身で喜びを表す。

素直な感情に慣れていない俺は、なんとも啓介の性格が羨ましくてたまらない。

「紫乃、ごめん。明日のフライト、行けなくなった」

突然の携帯電話からの啓介の声。

翌日の休日は新しく購入した俺のグライダーのテストフライトを行うことになっていた。

俺も啓介も楽しみにしていたから、啓介の電話に俺もがっかりだった。

「どうした？ 急な用事なのか？」

「父さんが…倒れたんだ」

「え？」

「脳梗塞だつて。元々血圧が高かったし…新しい店を開店させたりして、無理が祟ったらしい。仕事中に具合が悪くなって救急車で運ばれたつて…俺、今から札幌の病院に行ってくるよ」

「わかった。とにかく早く顔を見せてあげて力になることだ。俺に出来る事があるなら、なんでもするから、啓介…」

『なに？』

待っているとは言えなかった。

「…身体に気をつけて、お父さんをしっかり看護してあげなさい」

『うん。紫乃』

「ん？」

『待つててね。絶対、帰ってくるから』

「…」

『帰ってきたら一緒に飛ぼうね』

「…ああ、飛ぼう」

俺の欲しい言葉をためらいなくくれるおまえが好きだよ。

啓介の父親の容態は決して軽いものではなかった。命の心配はなかったが、相当の後遺症が残りそうだと言う。早期のリハビリも始まった。幾つかの店舗を持つ実業家でもある千葉家の経営は啓介の姉夫婦と母親が受け持ち、啓介は父親の世話につききりとなった。完全な回復は見込めないまでもひとりで身の回りの術ができるまでにはどれだけの期間を要するかわからない。

大学の単位は充分取れているから留年はしないだろうと言っていたが…何より啓介はこちらへ戻ってこれるのだろうか…

日が経つにつれ心配で仕方がない。

俺は一度、慧一に捨てられている。突然俺の前から姿を消した慧一を俺は憎んだ。状況は違っても、俺の前に大事な者が居なくなつた不安感は同じだ。

「戻れないかもしれない」

もし、啓介からそう言われたら、俺はどうすればいいんだ。

携帯が鳴る。啓介からだ。

『紫乃』

「啓介か。お父さんの具合はどうだ」

『うん、頑張つてリハビリしてるよ。でもまだ立つのがやっとで…』

右半身が麻痺してるんだ。誰かが付いてた方がリハビリも集中的にやれそうだから、もうしばらくこっちにいろよ」

「わかった」

『パラ行つた？』

「いや…啓介が帰ってからは行つてないよ」

『新しいグライダーもあるんだから、紫乃、大変だろうけど、ひとりで飛べるように練習しててよ。紫乃がライセンス取るまでには俺も戻るから』

「…」

『ね？』

「…わかつたよ。おまえの言うとおりにするよ」

親父の面倒を見るだけでも大変だろうに、俺なんかの心配までしてやがる。バカ野郎、俺の心配なんざ、してくれるなよ。おまえよりも十三も上のなあ…じじいの事なんざ…かまわないでいいんだから。

涙が止まらないから上を向く。

大丈夫だ。遠くにいても啓介は傍に居てくれる。

次の休日、俺は富士山近くまで車を飛ばした。

黒木さんから連絡を貰い、啓介から頼まれたらしく、俺のパラグライダーの練習に付き合うと申し出てくれた。

到着すると、新しい俺のグライダーが用意されていた。

「啓介が選んだんですよ」

翼は紫とオレンジ色のラインで描かれていた。

「藤と紫乃だから絶対に紫を入れるんだって。綺麗な色だ。きっと青空に映えますよ」

「そうですね…」

黒木さんに教えを請い、なだかな丘を何度もひとり飛ぶ練習を繰り返す。飛ぶだけじゃなく、飛んだ後のキャノピーのたたみ方

から、アクシデントへの備え、覚えなきゃならないメソッドはいくらでもある。

一流のインストラクターでもある黒木さんの教えは判りやすく、昼前までには、一通りのメソッドを確認できた。

休憩所でひとりでコンビニのおにぎりを食べていると、黒木さんが「隣りいいですか？」と、声を掛けてくる。

「勿論です」

「先生もコンビニのおにぎりですか。僕もです」

「先生は止めて下さい。今の立場では黒木さんの方が先生なんですから」

「そうですね。じゃあ、紫乃さんでいいですか？」

「ええ」

「啓介は…色々大変そうですね」

「ええ、でもあいつなら乗り切ってみせるでしょう」

「啓介は、面倒見の良い子でしてね、サークルでパラをやる時も、みんなの分までおにぎりを作ってきたりするんです。啓介の握ったおにぎりは美味かった」

「そうですね…」

「紫乃さんは…啓介と付き合っているんでしょう？」

「え？」

「啓介が嬉しそうに言っていました。あんまり幸せだって言うから皮肉のひとつも言ってやるんですが、それも聞こえてないどころか有頂天で…本当に良かったと、思っています」

「黒木さんは婚約者がいらっしやると伺いました。ご結婚はいつ？」

「あ…ああ、そうですね…」

「バツが悪そうに頭を？いた黒木さんはぼそりと言う。」

「あれ、嘘です」

「え？」

「啓介の気持ちがなんとなくわかってしまっただけでも受け入れる事は無理でした。だけど友情を壊したくなかったから、ああいう形で

断りました。啓介には内緒にしてください。そのうち婚約解消になったとも言っておきますから」

「そうだったんですか……」

「啓介は良い子ですからね。僕では彼を幸せにはできないと思っていました。あなたが……彼を受け入れてくれて本当に良かったと、心から思っているんです。先輩として啓介をよろしく願います」

「はい、啓介にとってより良い未来に導けるように、頑張ります」

「良かった」。これで一安心だ。啓介に嘘をついていたことが心苦しくて、誰かに話したかったんです」

優しい笑顔を見せるこの人は、どこかに影が付きまわっている気がした。

「黒木さん……君は心に決めた人が、いるのでは？」

黒木さんは苦い笑いを残し、その場を立ち去った。

恋の成就是難しい。ならば尚更一度結びついた手を離すわけにはいくまい。

風を孕んだ翼を抑えながら引き上げる。走りつつ地面を蹴る。

「啓介、早く帰って来いっ！」

低く空に飛びながら、俺は叫び続けた。

13 (後書き)

次回で終わります。

14 完結（前書き）

以下の小説と連動しております。

宿禰凜一編は「one love」

<http://ncode.syosetu.com/n8107>

h /

兄の宿禰慧一編は「GLORIA」

<http://ncode.syosetu.com/n8100>

h /

凜一の恋人、水川青弥編は「愛しき者へ…」

<http://ncode.syosetu.com/n0724>

i

14 完結

14、

11月18日は俺の35歳の誕生日だ。明後日に控えた晩、ニユーヨークの凜一から電話をもらう。

『いいか、紫乃。俺と慧で祝ってやるから、仕事が終わったら時間空けとけよ』

「別にいいよ。年取ることを祝ってもらうのは二十五歳までだ。お肌の曲がり角が過ぎたら、ろうそくの火なんかいらねえや」

『年取ると僻みっぽくなってやだね。愚痴っぽいとケースケちゃんに嫌われるぞ』

「うっせー！」

こちらから切ってやった。

バカやろう。啓介のことには触れるなよ。それでも…あいつは帰ってこない。

『誕生日には帰ってきたけど、ごめんね。戻るにはもう少しかかりそう…』と、朝のメールが啓介から届いた。

「別に気にしてない。おまえは父親の面倒をしつかりみてやれ」と、返したけれど本意じゃないことぐらい啓介にだってわかっているはずだ。

…もうひと月近くおまえの顔を見ていない。

その日は模擬試験中で生徒達は午前中で下校。教務時間も四時には終わる。

その時間を見計らったように凜一からの携帯が鳴る。

『紫乃、仕事終わった？』

「ああ、今終わったところだ」

『誕生日のお祝いさ。ちょうど新しい聖堂が出来上がったから、そこでやることにした。だからすぐに来いよ。あんたの車なら三十分

もかからないだろ?」

「だから何度も言つたろ。別に祝つて欲しいって言つてねえよつ」
思わず語尾が強くなつた事を悔やんだ。

「紫乃、俺達があんたを祝いたんだよ。来てくれないか?」

ささくれ立つ理由がなんであれ、凜一達の想いを素直に受け取る
器量ぐらい持てよ。

「悪かった。すぐに行くよ」

「うん、待ってる」

「凜一」

「ん?」

「ありがとう」

「お礼なら聖堂で言つてよ。慧一も紫乃を待つてるからね」

携帯を切り、すぐに聖堂に向かった。

目的地の山手のまだ整地されたばかりの道路を登り、丘の頂上に
立つ聖堂へ着いた。

仕上げ途中の門を潜り、資材が片付いていないガーデンを通り抜
け、聖堂に近づいた。

東向きの聖堂は、どんな材質を使っているのかはわからないが桜
色の壁面がなんともやわらかで美しい。ところどころにはめ込まれ
ている白い大理石のモザイクが花びらのように見える。

宿禰家の家族への愛が満ちている気がした。

重厚なヒノキの扉を開ける。

真新しい木の匂いが鼻腔に広がった。程よい高さの天井のヴォー
ルトも木材を使っているのだろうか。綺麗な木目が見える。目立た
ないが贅沢な作りだ。

華美なものは一切なく、ただあるものが必然にある。それだけだ
った。

大仰ではなくやわらかい光に満ちた空間が、身廊を清冽にしてい
る。

こんな空間は初めてだった。

突然パイプオルガンの音が響いた。それさえ荘厳ではなく、ただ来る者を癒す為の音。

目をやると奥の左隅のオルガン席に凜一が座って弾いていた。

ブルグミュラーの「アヴェエマリア」だ。

聖ヨハネの週一行われる礼拝で、週番がパイプオルガンを弾く。たびたび弾かれる曲がこの曲だ。

シンプルなのに美しい旋律。どこか懐かしい。

低い内陣の奥に背を向けて立っている男が居た。

背格好から一瞬啓介かと思ったが、啓介がここにいるわけがない。こちらを向かなくてもわかってる。

俺は慧一に近づいた。

「慧一、すばらしい聖堂だな」

こちらを向いた慧一が穏やかに微笑む。

「ありがとう。今の俺と凜ができる精一杯の聖堂だよ」

「きっと母親も妹さんも喜んでる」

「そうだといいな」

「しかし…」内陣をくると見回した。「何もねえな」と、笑う。

一般の教会には当たり前にある、ベンチも恵の座も十字架もない。

「ここは安楽の地だからね。椅子に座って懺悔をする場所じゃないんだ。光を受け取ってくれたらいいと思っている」

「光か…」

正面にアルターピースはないが、シンプルにデザインされた薔薇のステンドグラスが淡く光に照らされている。

繰り返される心地良い音楽とステンドグラスに身を委ねていたら、慧一が口を開く。

「紫乃。三十五歳の誕生日おめでとう。これからも友人として家族として…愛し続けていけたらって、思っている」

「…うん」

「俺の誕生日に約束したこと覚えているか？」

「は？」

「抱えきれないほどの薔薇の花束をプレゼントするとおまえに言った」

「そう…だったな」

「残念だが俺からは渡せない」

「はあ？」

「是非おまえに渡したいという奴に役を譲ったんだ」

「えっ？」

鳴り終わっていたパイプオルガンが再びメロディを響かせた。

印象的な和音…メンデルスゾーンの…「結婚行進曲」。

慧一が内陣の右端の扉を開いた。

そこに立っているのは…啓介。

黒のタキシードを着た啓介は、両手に抱えきれないほどの薔薇の花束を抱えている。

赤い薔薇と同じくらい真っ赤な顔をして…

慧一が足の動かない啓介の背を押す。

啓介は緊張の所為でつんのめりながらぎこちない歩き方で俺の方に向かってくる。

クライマックスへ向かうメロディに乗せて、俺も啓介に近づく。

> i20285 — 273 <

「紫乃…誕生日おめでとう」

「あ、りがとう…啓介、戻るなんて言わなかったじゃないか」

「紫乃を驚かせたかったんだ」

少しだけ済まなさそうに啓介は頭を傾げた。

「アホか…クソっ、騙された俺は素直に喜べない。今日のメールだつて戻れないって言ってたクセに」

「それは…」

「俺が啓介くんに嘘をついていたの。実はこの企画、一週間前

から啓介くんに頼んでたの」

オルガンを弾く手を止め、こちらに近づいた凜一がいたずらっ子の顔をする。くそっ、こいつにはまともに勝った試しがない。おのずと啓介を責めたくなる。

「一週間…啓介、おまえずっと俺を騙していたのか？」

「ごめんなさい。凜一さんたちが絶対紫乃が喜ぶから、黙っているって…命令でしたので」

「紫乃、啓介くんを責めるな。俺と凜一が企てたとしてもすべて紫乃を喜ばせたかったからなんだから」

「だからって…俺がどんな気持ちで過ごしてたと思う」

「欲求不満が爆発しそうって事？」

「うるせー、凜一、黙ってる！それより啓介、お父さんの具合はどうなんだ？ほおっておいてもいいのか？」

「父さんは『俺の事は構うな』って言うてる。『奇跡の復活をした息子に負けられるもんか』って。親父はね、俺には自由であれって言うんだ。『生きる喜びを見つけた啓介がここにいる理由などない』

って…紫乃の事は話していないのにさ。ちゃんとわかっているんだよ、親父の奴。…俺はね、紫乃と生きていくって決めてたから、戻るつもりでいたんだ。だけど先に親父に言われたよ。まだまだ敵わないね。それこそ年の功って奴？」

「啓介…俺は…」

「ずっと待っててくれたんでしょ？…ありがとう、紫乃。俺も会いたかった」

啓介が渡してくれた薔薇の花束が眩しいくらいに赤く輝いた。

「紫乃、この聖堂は、誰でも愛を約束を慈しみを誓い合い、祝福される場所にしたいと願っている。ファザーは居なくても秘跡は執り行われる。誓いあう魂に嘘がなければ認められる。紫乃と啓介くんがこの聖堂の最初の約束の地へ導く者となれば幸いだ」

「慧一…」

なんてことだ…俺はなんて幸福者なんだ。こんなことって…信じ
ていいのか…

俺は隣りに立つ啓介の顔を見上げた。啓介は俺を見て笑う。

「紫乃を幸せにするよ」

「俺も…啓介を幸せにすると…誓う」

目の前に並んだ慧一と凜一が祝いの拍手を奏でた。

「おめでとう、紫乃。いつまでも幸せに」

付き合っていた頃よりもずっと…慈しんでくれる慧一がいる。

「つまりは大団円…だろ？」

得意げにウィンクをする凜一がいる。

ステンドグラスの赤と白の薔薇が、夕日に照らし出され一層鮮や
かに輝き始めた。

俺達は心奪われるままにその幸福の光を浴び続けた。

ただずっと…あるがままに。

次の休日、俺と啓介はパラをやるため、朝霧高原へ向かった。

ドライブ中に先日から気になっていたことを聞く。

「啓介、聖堂でおまえの着ていたタキシードは一体どうしたんだ？」

「あ、あれ？慧一さんが貸してくれたんだ。背格好は似てるって本
当なんだね。ぴったりだったもの」

「似合ってはいなかったけどな」

「ひでえ〜。まあ、凜一さんも笑いころげていたけどさあ。…俺に
連絡くれて、念入りに計画を立てたのは凜一さんなんだ。慧一さん
は薔薇の花束を揃えるために何軒も花屋さんをハシゴしたという
しね。本当に紫乃の為に一生懸命だったんだよ」

「ありがたいと思ってるよ」

「紫乃は大事な家族だって言ってた」

「ああ、俺もそう思っている」

「俺も…一員になれる、かな？」

「…努力次第だな。言っておくが、あんまりあいつらに心を許すなよ。マジで天罰がくだらないとも限らない」

「何それ？もしかしたら…紫乃、焼きもち？」

「バーカ。天使と悪魔にはよほどの事がない限り近づくなって事。眺めて祈るぐらいがちょうどいいのさ」

「肝に銘じます」

啓介と初めて来たフライトエリアへ再び来れた。

ハーネスを背中に背負いながら、キャノピーを広げる。

「紫乃、ライセンス取れたんだね」

「当たり前だ。おまえより黒木さんの教え方が巧かったからね、すぐに合格を頂いたよ」

「ちえっ、紫乃に唯一上目線で教えられるものだったのにさ」

「つべこべ言つてないでさあ、飛ぶぞ」

「うん」

「先に行くから、啓介。後ろから俺を導いてくれ。おまえの指示に従うよ」

「…任せろ、紫乃」

翼を広げ、フロントライズアップからテイクオフ。風に乗りふわりと宙に浮いた。

『紫乃、聞こえる？』

トランシーバーから啓介の声。振り向くと啓介のグライダーは俺の斜め横を飛ぶ。手を振って応えようと、啓介も手を振る。

『ブレークとアクセルで少し加速しよう』

「わかった」

導く声は信頼に満ちている。

俺はふと気になって啓介に尋ねる。

「啓介、おまえはスキージャンプを怖いと思わないと言ったね。パ
ラも同じなのか？」

『パラは競わないからね。俺には優しいばかりだ。だけどね、俺は自分の人生で初めて恐怖を感じたよ』

「え？」

『紫乃を失ったと思うだけで、恐ろしさに震えるんだ。だから、紫乃だけは離したくない』

「俺も…同じだ」

俺の応えに啓介のトランシーバーは黙り込んだままで切れた。気になって後方斜めの啓介を見る。

啓介は両手を口に広げ、俺に叫ぶ。

「愛してるーっ！紫乃、ずっと愛してるからなーっ！ずっと、ずっと一緒にいようなーっ！」

繰り返して放たれる愛の言葉。

目の前には先ほどまで雲で見えなかった富士山の山頂が綺麗に晴れ、青空に冴え渡った輪郭を見せる。

止まらぬ涙のまま、俺はそれを眺め続けた。

私はただここに在った。

誰にも気づかれず、愛されぬまま、転がり彷徨っていた。

それを救おうとせず、許そうとせず、

省みる事もせず、

愚かな道化になる事も出来ず

ただ恨むばかり。

だが、愛は在った、私と共に。

多くの愛に気づかずに、ただ見ようをしなかった己の貧しさ故の
涙。

欲しくて欲しくて欲しくて手を伸ばす

目覚めながら、清めながら、

幾つもの光を通り抜け、君の手を掴む

歡喜に震える君の手を掴む

あるがままの君を、私を、愛したまえ
ただ光が満ち溢れたこの世…

b
y
s
a
i
a
r
t

> i 2 0 2 8 6 — 2 7 3 <

14 完結（後書き）

長い間ありがとうございました。

これで一連の「greenhouse」はすべて完結いたしました。
拙いテキストを読んでいただいた皆様に感謝いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2768i/>

早春散歩

2011年3月23日12時12分発行